魔導師の街へようこそ

夜那國

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔導師の街へようこそ

【Ｎコード】
Ｎ７７６８Ｖ

【作者名】
夜那國

【あらすじ】
魔導師の住まう街、陽ノ宮での事件、騒動を描いたものです。初心者で初投稿だったりするので、まだまだですが、これから頑張っていきたいです。少しネタ要素を含んでいます。軽く読んでくれると嬉しいです。

【第一章】宮暦１９９９年。魔導師の街、陽ノ宮での一年間の物語。

【第二章】宮暦２０００年。少女達は本当の現実と向き合う。これは分岐点。一人の人間の些細な行動が後に大きな影響を与える。

……この物語に根本的解決は存在しえない。

用語（前書き）

随時更新したいと思います。何か足りないと思われた方は気軽にどうぞ。

何となく思いついたのですが、『魔導師の街へようこそ』って長いので、流行りの４文字で略してみました。

『まどまち』なんてどうでしょう。個人的には気に入りました。

用語

【用語】

・【神】
試験の末就ける役職。主に、ダークと戦うのが務め。

・【ダーク（＝魔人）】
龍脈の影響を受け暗黒面に墜ちた魔術師の事。
人知を超えた力を持ち、並大抵の事では死なない。
魔人とも呼ばれている。

・【龍脈】
地球の生命エネルギー。その力は大きな影響力を持ち、魔術師に魔力を与える。世界各地にあるが、特に大きな龍脈は四ノ宮に存在する。

・【魔力】
龍脈のエネルギー

・【魔術】
自分の中の魔力を使い何かしら現象を起こす事。

・【魔術師】
魔術を扱う者。

・【魔術炉】
心臓の別称。魔術師が魔力の許容量はほとんど魔術炉で決まる。

・【魔導】
魔力からどのように自然現象が起きているか解明する学問。

・【魔導師】
魔術が使えないが、魔術の知識のある一般人。研究者とも呼ばれる事がある。
少しでも魔術が使えれば、原則魔術師扱いになる。

・【ＳＰＥＬＬ　ＣＯＤＥ≪スペル・コード≫】
誰にでも魔術が使える簡易魔術器具。魔力を瓶に入れたタイプが一般的。
瓶を割って発動出来る。
物質に付加する事も可能。
その場合、使い捨てではなく、半永久的に使用することが出来る。
例外もあるため、絶対無限に使えるわけではない。

・【夜の獣≪ナイト・ビースト≫】
魔導師が生命掌握を目指す過程で作る生物兵器。生きているものを襲い、魔
力を喰らい、成長する。
ほとんどはすぐに狩られる。

・【夜の狩猟者≪ナイト・ハンター≫】
夜の獣を狩ることを生業にしている。陽ノ宮では魔術の素質があるものが代々受け継ぐ。

・【赤羽ライン】
伝説≪レジェンド≫

・【ハイル１９４８】

小折玲専用の魔導機銃。元々は迷走鬼組が所持していた銃。いくつかコードが添付されている。加工者は三國屋の娘。
その能力は、既に市販のもののレベルを遙かに凌駕している。

用語（後書き）

２０１１／０８／２１　スペルコードの部分を編集。
２０１１／０８／２７　ハイル１９４８　追加
２０１１／０８／２７　ダーク　更新
２０１１／０９／０１　余談、前書き

登場人物（第一章）（前書き）

随時更新していきます。基本ネタバレは避けてます。読んでも大丈夫かと。

登場人物（第一章）

【登場人物】

・【迷走鬼　縫≪めいそうき　ぬい≫】
魔導師の少女。一言で言えばヤクザっ子。最近の悩みは組を継ぐか駄菓子屋を継ぐか大学進学が最近迷ってる事。

・【赤羽　那癒多≪あかばね　なゆた≫】
夜の狩猟者の少女。最大の敵は母。今日も暗黒物質弁当と戦う。髪型はお団子。戦闘の時一番しっくりくるらしい。

・【葵　祢衣≪あおい　ねい≫】
召喚師の少女。陽ノ宮管理者の直属魔術師。母の残した帽子を常に被る帽子の少女。最近の悩みは学校で男子に囲まれる事と一人だけクラスが別な事。

・【二ノ宮　絵心≪にのみや　えごころ≫】
魔術師の少女。角が生えてる事が特徴的。ひびが入ってからずっと痛い気がする。最近の悩みは親知らずが痛い事。

・【鳴海　縁≪なるみ　えにし≫】
探偵。ただの探偵ではなく、借金探偵。最近の悩みは借金。

・【迷走鬼　栽≪めいそうき　さい≫】
縫の母親。伝説の魔導師。ヤクザの組長である夫に素手で勝った。夫は刀を所持していたにも関わらず……。
最近の悩みは腰痛。

・【赤羽　癒美≪あかばね　ゆみ≫】
テロリス……那癒多の母。暗黒物質弁当の創始者。その弁当は胃を溶かし、悲劇を生む。恋愛相談も行っている。弟子が現在三人ほどいる。
夜の狩猟者時代の怪我で車椅子生活を送っている。
最近の悩みは足のリハビリが辛い事。

・【葵　詩衣≪あおい　しい≫】
祢衣の母。魔術師。最近の悩みは視力低下。

・【小折　玲≪こおり　れい≫】
魔弾の魔術師。詩衣の親友で、優秀な魔術師。最近の悩みは頭痛。バファ○ンを服用している。本人曰く、「あの薬は本当に良く効く」との事。

・【黒陽　飛鳥≪くろひ　あすか≫】
陽ノ宮の管理者。温泉大好きなサボり癖の酷い人。最近の悩みは櫻井が仕事をしない事。

・【櫻井≪さくらい≫】
黒陽の元で働く局員。他の人の数十倍の仕事をこなす。最近では、黒陽に仕事をさせるスキルを取得した。最近の悩みはそれでも黒陽が働かない事。

・【組長≪くみちょう≫】
極道の頭。迷走鬼組の組長。最近は娘と妻に悩まされている。最近の悩みは家族の中での威厳。

・【銀】

迷走鬼組員。良く働く。関節を外すのが得意。最近の悩みは好きな相手が極道が嫌いだが極道をやめられないこと。

・【朱鷺羽　咲夜≪ときわ　さくや≫】
魔術自衛軍≪メイガス≫の魔術師。優秀。最近の悩みは弟と会えないこと。

・【朱鷺羽　咲嵜≪ときわ　さきざき≫】
鷺ノ宮管理者にして朱鷺羽家頭首。鷺ノ宮の龍脈の暴走により発生した『無限の影』と数年前から一人戦い続けている。
最近の悩みは少し老けた事と、沢山人のいる場所に耐えられるかどうか。

・【朱鷺羽　咲炉≪ときわ　ざくろ≫】
こころの思い人。現在中学三年生。月ノ宮にいる。最近の悩みは住む場所が無いこと（学校に泊まってる）。

・【三岸　御影≪みぎし　みかげ≫】
色んな意味で厄介な存在。２年７組に所属。クラス委員。最近の悩みは思い人が自分に振り返ってくれないこと。

・【水樹　希風≪みずき　きかぜ≫】
ミッキーと呼んだ人間を葬ってきた狂戦士。正当指導権利を持ち、学校内での暴力は正当化される。
常に木刀ｏｒ妖刀を所持している。最近の悩みは木刀の先が赤黒くなってきていること。

・【締野　元治≪しめの　もとはる≫】
歌舞伎の跡取り息子。校則無視で長髪、髪を一つに束ねている。
「……似合うので許す」と希風に言われ、承認されている。最近の

悩みは普段着に女物が用意されること。

・【神宮寺　神楽≪じんぐうじ　かぐら≫】
アホ毛の少女。ヘアピンを使用している。最近の悩みは発育が遅い事。

・【紋雛　皐月≪あやひな　さつき≫】
7組では珍しい常識人。笠原と締野担当。最近の悩みは締野に抱く感情がわからないこと。

・【木村　彩喜≪きむら　あやき≫】
左の前髪で左目を隠している少女。左目の眼帯を見られないための工夫。最近の悩みは目の手術の経過がよろしくない事。

登場人物（第一章）（後書き）

２０１１年８月２８日　【赤羽癒美】　修正
２０１１年８月２８日　７組の連中を追加しました。

登場人物（第二章）

【登場人物】

・【迷走鬼　縫≪めいそうき　ぬい≫】
魔導師の少女。一言で言えばヤクザっ子。最近の悩みは那癒多でさえ将来の事を考えているのに、自分はまだ決められていない事。

・【赤羽　那癒多≪あかばね　なゆた≫】
夜の狩猟者の少女。最大の敵は母。今日も暗黒物質弁当と戦う。髪型はお団子。戦闘の時一番しっくりくるらしい。
最近の悩みは筋肉痛。

・【葵　祢衣≪あおい　ねい≫】
召喚師の少女。陽ノ宮管理者の直属魔術師。母の残した帽子を常に被る帽子の少女。最近の悩みは母の料理。

・【二ノ宮　絵心≪にのみや　えごころ≫】
魔術師の少女。角が生えてる事が特徴的。ひびが入ってからずっと痛い気がする。最近の悩みは飛鳥の世話。

・【鳴海　縁≪なるみ　えにし≫】
元探偵。最近の悩みは恋人になってからの縫との距離感。

・【迷走鬼　栽≪めいそうき　さい≫】
縫の母親。伝説の魔導師。ヤクザの組長である夫に素手で勝った。夫は刀を所持していたにも関わらず……。
最近の悩みは腰痛＋関節痛。

・【赤羽　癒美≪あかばね　ゆみ≫】
テロリスト。那癒多の母。暗黒物質弁当の創始者。その弁当は胃を溶かし、悲劇を生む。恋愛相談も行っている。
弟子が現在六人ほどいる。
夜の狩猟者時代の怪我で車椅子生活を送っている。リハビリのかいがあって、少し立てるようになった。
最近の悩みは那癒多の成績。

・【葵　詩衣≪あおい　しい≫】
祢衣の母。魔術師。最近の悩みは母としてどう娘と接するか。

・【小折　玲≪こおり　れい≫】
魔弾の魔術師。詩衣の親友で、優秀な魔術師。
最近の悩みは多忙。バファ○ンをいつも携帯している。本人曰く、「あの薬は本当に良く効く」との事。

・【黒陽　飛鳥≪くろひ　あすか≫】
陽ノ宮の管理者。温泉大好きなサボり癖の酷い人。
最近の悩みは櫻井が仕事をしない事。

・【櫻井≪さくらい≫】
黒陽の元で働く局員。他の人の数十倍の仕事をこなす。最近では、黒陽に仕事をさせるスキルを取得した。
有休を使って陽ノ宮にいない。

・【組長≪くみちょう≫】
極道の頭。迷走鬼組の組長。
最近の悩みは次期組長を誰にするか。

・【銀】

迷走鬼組員。良く働く。関節を外すのが得意。
最近の悩みは好きな相手が極道が嫌いだが極道をやめられないこと。
……だったが、次の組長が決まったらすっぱり足を洗って結婚する事が決まった。

・【朱鷺羽　咲夜≪ときわ　さくや≫】
魔術自衛軍≪メイガス≫の魔術師。優秀。最近の悩みは弟と会えないこと。

・【三岸　御影≪みぎし　みかげ≫】
影≪シャドウ≫の頭首。影の魔術を使う。最近の悩みは×××。

・【水樹　希風≪みずき　きかぜ≫】
ミッキーと呼んだ人間を葬ってきた狂戦士。
学校内での暴力が正当化される権限を持っている。
常に木刀ｏｒ妖刀を所持している。最近の悩みは木刀の先が赤黒くなってきていること。
夜の狩猟者で玲の事を敬愛している。

・【締野　元治≪しめの　もとはる≫】
歌舞伎の跡取り息子。校則無視で長髪、髪を一つに束ねている。
「……似合うので許す」と希風に言われ、承認されている。最近の悩みは普段着の女物に抵抗を覚えなくなっている事。

・【神宮寺　神楽≪じんぐうじ　かぐら≫】

アホ毛の少女。ヘアピンを使用している。
永遠の悩みは発育が遅い事。

・【紋雛　皐月≪あやひな　さつき≫】
7組では珍しい常識人。笠原と締野担当。最近の悩みは恋煩い。
愛の師匠に出会って少しは緩和されている。

・【木村　彩喜≪きむら　あやき≫】
左の前髪で左目を隠している少女。左目の眼帯を見られないための工夫。最近の悩みはみんなが色気付いてること。

【ＮＥＷ】

・【神谷　主衣≪かみや　しゅい≫】
三年七組在籍の普通の少女。命を狙われる。悩みは頭痛。
ロリータファッションを好む。
最近の悩みは三つ編みをするときに指を切ること。

・【神谷　裏≪かみや　うら≫】
主衣の兄。

・【守屋≪もりや≫】
透明の魔術師。魔術で透明人間になれる。包帯を体中に巻いている。武器は槍。

・【蘇我≪そが≫】
守屋を敵対している。

・【イハトナ＝イレイミ＝レーマ】

ダーク。魔人とも表現される。人知を超えた存在。趣味は殺人。
特技は相手の魔術を瞬時に使えるようになること。
最近の悩みは『朱鷺羽』が見付からないこと。

準備前　神話　四ノ宮の生誕

年代不明

「月ノ宮（つきのみや）、これは……」

暗いはずのその場所は蒼い霧で明るくなっていた。川が流れていた。触れられない蒼い川。

それが、二人の探していたものだった。

「うん、間違いない、これが魔力の源……私達の魔術の秘密。魔法の正体」

考古学者月ノ宮。彼女は神の位に就きながら、この世の秘密を紐解くため、

恋人の吸血鬼、シュウム＝ネクロアシアと共に地下第三層の鍾乳洞を探索していた。

そして、”それ”は見付かった。

龍脈。この地球（ほし）のエネルギー集合体。

数々の現象はこの龍脈が関わっていると月ノ宮は仮定していた。

その仮定が今、真実となった。

「これで、はっきりした。魔法……つまり、自然現象は龍脈の流れで決定する。　地震の起きやすい地域、雨の降りやすい地域、火山が噴火しやすい地域……。これらの現象はこの星を作るにはどれも不可欠なものだわ」

「こんなものが地下に存在していたら、嫌でも影響を受けるね。それに……、」

シュウムは確かめるように魔術を使う。左手から水が溢れてくる。魔力を水に変換したのだ。

「こんなにも魔力が結合する。どう思う?」

変換魔術は魔力から他のものに変換するとき、必ず何パーセントかの魔力は失われる。

１００の魔力を変換すれば８０になる。だが、この場所に限っては、１００の魔力で１００になっていた。

「魔術は今まで自分の中の魔力を使っていたと仮定していた……だけどそれは違う。魔術師は龍脈から、魔力を得てる……魔術炉に魔力を貯えている。魔力量に個人差があるのは、魔術炉の性能……か」

「魔力とは……龍脈のエネルギーそのものか」

月ノ宮はそれを知った。

今この事実を知っているのは自分とシュウムだけだ。急がねばならなかった。月ノ宮は急いで準備をする必要があった。

「シュウム、急がないと、私の理論上まだ、大龍脈は存在する」

月ノ宮の考えは、こうだ。龍脈は沢山あるが、大きな影響を与えている龍脈が存在する。それらを悪用する者が現れれば簡単に世界は崩壊する。だから、月ノ宮は考えた。それらを守らなければならないと……。

神殿に戻ると庭に月ノ宮とシュウムの友人がいた。闘神朱鷺羽（ときわ）と不死神天月（あまつき）。二人は座って談笑していた。

「あれ、リーンは？」

「会議中よ」

「大事な話しようと思ったのに……」

一人欠けていた事を残念に思う月ノ宮に朱鷺羽は話しかけた。

「何だ？　ダークが近々攻めてくるとかか？」

「違う。下手したらそれよりも大事な事なの……」

「ダークよりも大事なもの？」

ダークとは、原因不明で暗黒面に墜ちた魔術師の事であり、常人を超えた身体能力と魔力を秘めている。

神々にとってダークと戦うことが使命であり、それより重大な事など存在しない。

だから、朱鷺羽にとって、月ノ宮の発言は理解不能だった。

「私達の……魔術の正体がわかった」

「！」
朱鷺羽が驚く一方、天月は冷静だった。その内月ノ宮が解明するとわかっていたからだ。
「で、正体って？」
天月が月ノ宮に訊ねる。
「魔術の……魔力の正体……それは――」
月ノ宮が真実を語る。天月は納得し、朱鷺羽険しい顔をしていた。
「じゃあ、よぉ。魔術使えない人間って何なんだ？」
そこが、不明瞭だった。朱鷺羽は強大な力を持つ故に、何故自分以外の者は
こんなにも力を持たないのかとある種のコンプレックスを抱いていた。
だからこそ、納得出来ない。
「その説明だと自分と他の者の差が説明出来ない」
「遺伝……という言葉では片付けたくないけど、今はそう説明するしかないわ」
「遺伝？　悪いな、論破するぜ。オレの両親はロクの魔術を使えない普通の人間だった。
なら、オレをどうやって説明する？」
「突然変異」
「確かにな、だが、それは逃げだぜ。他の可能性の提示を求める」
議会において、この様な論争はよく行われる。そもそも二人が知り合う切っ掛けが、
論争による意見の相違だった。それぞれが意見することで、互いに得るものがある。
だから、どんな些細な事でも二人は論争する。
「……ッく」
今回は、月ノ宮の方が圧倒的に不利だった。
「必要な進化、退化」

発言者は天月だった。
「――っち、お前かよ」
舌打ちをする朱鷺羽、助け船を出された月ノ宮でさえ「助力は必要無い」と申し出た。
論争において、天月は負けたことがない。つまり、朱鷺羽も月ノ宮も買ったことがないという事だ。
「どうしたの？　納得した？」
「他人の勝負に首突っ込みやがって……良いだろう。オレを納得させてみろよ！」
「良いでしょう。……少し論点から逸脱するけど、私は創造主がいると仮定する」
話題が逸れる所の脱線では無かった。しかし、論争において、相手の発言をないがしろにするのはあまりに愚かな行為であるため、朱鷺羽はじっと聞く。
「創造主？」
「この世界は彼のゲームでそのための調整が施されているとしたら？」
「そいつは、とんだファンタジーだな」
「ところが、そうじゃない」
天月は左手を挙げると本が机の上に現れる。サイズ的は子供一人分程の大きさだ。
その本をめくってく。
「何だ？　これ？」
「歴史書。歴史的事実なんだけど、ほら、見てみて」
歴史書には書き込みがされていた。使い込んでいるという感じだった。
そのページを見て朱鷺羽は驚く。
「……おい、この歴史って事実か？」
「もちろん」

「改竄されたりしてないのか？」
「間違い無い。今まで論破した神々に誓って」
その言葉を発する時は、天月は決して嘘を付かなかった。
「……こんな事実があったらそれは認めざるを得ないな」
歴史書の内容は滅びと再生に重点を置いて書かれていた。いずれも発展し過ぎて滅んだというのは共通している。
そこから見えてくる事実は世界には『創造主』と呼ばれる管理者の存在。
ペットは飼い主がいなければ、やがて死ぬだろう。人間も同じだ。
だが、人間は順調に発展し過ぎている。明らかに誰かが保護していたと思える程に。
だから、天月か『創造主』がいると考えた。

「つまり、突然変異は創造主が必要だと思って生み出したって事。
偶然なんてこの世にない無い。
生まれる人間も両親と環境でどんな人間になるかほとんど決まる。
ああ、これは経験則だけど。
そして、私が言いたいのは、必要な時に人は進化して、必要無いときに退化する。
朱鷺羽の突然変異は必要性があるからって事」

大きく息を吸う。一拍置く。それは、結論を話すときの癖だった。
「ほら、ここここを見て」
指を指されたのは年代だった。
「何これ？」
月ノ宮は思わず声を上げる。年代、その時代の人類が滅ぶ周期が綺麗過ぎた。
まるで、誰かが調整しているかの様だった。
「『創造主』はペットに飽きたら新しいペットのために世界を滅ぼす。簡単に言えばだけど。

その度に平凡な家庭からいきなり救世主と呼ばれる程の力を持った者が現れる。
朱鷺羽がいるこの時代に大きな争いが起きるって事。朱鷺羽が生まれたのは、創造主が大きな争いを起こしたいからよ」
「大きな……争い……」
朱鷺羽はまるで、自分が原因で争いが起きると言われているようでならなかった。
「朱鷺羽が強大な力を持って生まれたのは、『創造主』の気まぐれ。納得した？」
「ああ……」
天月の論破は相手の心を尊重しない。真実を叩き付ける。論破された相手はしばらく、
魂を抜かれたかのように疲労困憊してしまう。
天月は朱鷺羽のそばに寄り、耳元で、
（だから、朱鷺羽。戦乱が来たら、鍵を握るのはあなたよ。この世界を滅ぼすか、
救うか、あなたの手に掛かっている……だから、頑張って。お願い）
そう確かに言った。まるで、他の誰かにも語ってきたかの様な貫禄を秘めていた。

「あれ、みんなこんな所どうしたの？　暇なの？」
会議を終え、リーンが来る。
「さぁ、月ノ宮、あなたが何をしたいのか言ってみて」
天月は「役者は揃ったと言いたげな顔をしていた」

「組織を作る。大きな組織を。私達が死んでも存続できるような組織を……」

月ノ宮は新しい都市開発着手した。
当事者の名前を取り、天ノ宮、鷺ノ宮、月ノ宮と付けられた。最

初三つだった街は魔術の使えない人々のための街、陽ノ宮を加えられ四つになった。
四つの街は一つの都市になり、『四ノ宮』と呼ばれるようになり、その後、
生まれたのが枢機卿（すうききょう）『四之宮』と管理者である。
使命は『四ノ宮』と龍脈の守護である。

ダークと神々との戦いは神々の勝利で終結した。始まりの五人の神と多くの神々の犠牲を払って……。

準備前　神話　四ノ宮の生誕　（後書き）

過去編です。思ったより時間が掛かってしまいました。もっと速く文章を書けるようになりたいです。本当に。

準備中　スペル・コードください

「すいませーん」
春、まだ肌寒い時期。駄菓子屋それも夜に少女はそこにいた。
駄菓子屋『三國屋』。歴史のある駄菓子屋。この街、陽ノ宮でこの店を知らない人間はおそらくいないだろう。
「縫、今手離せないから出て」
この駄菓子屋の店主、迷走鬼裁（めいそうきさい）はテレビを見ていた。
手が離せない理由は某サスペンスの崖のシーンだからだ。このサスペンスから崖を取れば大した印象に残らないだろう。崖あっての○サスだ。
「私だって忙しいのに……」
娘は文句を言いつつも自分の部屋から出て行く。
出なければ嫌でも小遣いに響くのだ。
「少し待って下さいねー」
縫は外の客に向けて声を掛ける。
階段を降りると、キシキシと階段が音を立てる。
障子戸を開けると、店の中に風が入ってくる。もう春だというのに、風が冷たい。
「はい、お待たせしました……あっ咲夜さん」
「夜分遅くにごめんね」
「いえいえ、こんな時間にどうしたんですか？」
「噂を聞きつけてね」
彼女、朱鷺羽咲夜（ときわさくや）はこの店の常連である。歳も縫と近いと言う事で割と親しい関係である。
そして縫は魔導師で、こうして個人的に商売をしている。
「耳が早いですね。ちょっと待ってて下さいね」
縫は店の中に入り、冷蔵庫の中から何かを取りだした。
「はい、どうぞ」

咲夜が渡されたのは試験官の様な物だった。コルクで栓がしてある。

「これが？」

「ＳＰＥＬＬ　ＣＯＤＥ：ＲＥＣＯＶＥＲＹ。数日前、私が作ったコードです」

数百年前、あらゆる現象は魔力から起こると解明された。

それから、魔法（自然現象）を学ぶ『魔導』という学問が出来た。

魔術が使えなくて、魔導を学ぶものを、総称して『魔導師』と呼ぶ。

スペルコードは、説明すると難しい、まず魔力原子というのがある。魔力を細かく分類したもの。その魔力分子配列によって起こる様々な現象を魔導師達はを分析する。

例えば、魔力原子がパターンＡの配列をした時、発火するとか、配列Ｂの時、空気に触れたら爆発するとか…様々なものがある。。

その基本配列を偉い魔導師は何と式に興した。

Ａ＋Ｂ＝発火　Ｄ＋Ｅ＝電気発生　Ａ＋Ｂ＋Ｃ＋Ｄ＝落雷

と、こんな感じで、ほとんど関連性が無いため関連づけて推理して自分の思い通りのコードを作ることは出来ない。

式が生み出されてからスペル・コードは驚くほどの発展をした。

今までは、感覚や勘に頼っていた作業をより機械的に行うことが出来るようになった。

～スペル・コードが出来るまで≪現代編≫～

1．本に載っている現象の式を見ます。

2．計算します。

3．計算結果から材料を買います。魔導具店や最近ではコンビニで売っています。

4．完成！

普通はここで完成。形状は基本液体だ。瓶に入れて、割ることで発動するタイプが多い。あとは、魔力を通して発動も結構一般的。一言で言ってしまえば、誰にでも使える魔術である。

さらに、スペル・コードを物質に付加する事も出来る。物質と適合すれば、そのコードの能力を半永久的に使える。だが、適合物質を探す事は臓器移植のドナーを見付けるほど難しい。拒絶反応が出ない様な物質を探すか、物質に合わせてコードを調整するか、どちらにしろ至難の業だ。

世の中には解かれていないコード配列式がいくつもある。それとは別に適合物質がまだ見付かってないものも数多く存在する。ある資産家がそれらを解くため懸賞金を賭けた。それは「ミレミアム１３」と呼ばれていて、既に六問が解かれ、今でもまだ、懸賞金は打ち切られていない。

そして、自分の思い通りのコードを作り出すのは神の業。無理と言える。

縫のスペル・コード　リカバリーは偶然生まれた。材料の分量を間違って出来てしまった偶然の産物だった。

縫は咳払いをし、コードの使用法について説明を始める。

「使用方法はこれを床か何かに叩きつける。そうすると魔方陣が展開されるからその中に居れば良いです。何か質問は……ってねぇ？」

縫は途中で説明を止め咲夜に同意を求める。

「まぁ、咲夜さんになら説明不要なんですけどね。毎度の事ながら」

義務とはいえ同じ説明を同じ相手にするのはやるせない。

「いえいえ、毎回丁寧な説明有難うね」

毎回同じ説明。この間来た時は縫の台詞に会わせて咲夜も同じ台詞を暗唱した程だ。
「はう、まっち？」
下手な英語が辺りに響く。縫は五本指を立てる。咲夜は「五百万？」と訊いてきた。
「はい！？」
縫は五百円のつもりだった。冗談が、真に受けられる。
材料は水（タダ）と紙（百円）と純魔力水（四百円）。極めて安価である。
「うん、思ったより安いや。これ今度からダース単位で買うからよろしく」
自分のコードの価値に今更気付く。
今まで本当に小遣い程度の額でしか売れなかったが今回は違った。
あまりの金額の大きさに体が硬直する。
そして、ある疑問を抱く。そもそも魔術師はスペルコードを好まないはずだ。なら、何故？
「魔術師、それも魔術自衛軍（メイガス）の一員がこれを好き好んで使うとは思えないんだけどなぁ。実のところ、月ノ宮の安全基準もまだクリアしてないし」
「スポーツ選手が道具に気を遣うのは当たり前よね？」
「え、ええ」
「私はね利用出来るものは利用すべきだと思うの。変な意地を張るより利口よ。それにね、このコードは私の欠点を補ってくれる」
「欠点を補う？　ご冗談を、咲夜さんは月ノ宮でも屈指の魔術師じゃないですか」
「その私が必要としているのよ。それより、書かなきゃいけないものがあるんでしょ」
「あ、はい」
少し気になるが、縫にとってはこっちの方が優先度の高い事項だ。
帳簿を取り出し欄を埋めてゆく。
「ここにサインお願いします」

「おーけー」
「……はい、これで良いですありがとうございます」
「お金はいつもの所に振り込んでおく」
「わかりました」
「たまには月ノ宮に遊びに来ると良いよ。案内するわよ」
「前向きに検討しておきます」
「じゃーねー『光華』！」
魔力を身体に纏い、その魔力を光に変換する事で光速移動が可能になる魔術。それが彼女、朱鷺羽咲夜の魔術。その分魔力の消費も激しい。それが、彼女の言っていた欠点である。
その欠点も、このコードにより補われる。
数日後。縫は銀行まで行って振り込み額を確認する。五百万どころか数千万単位でお金が振り込まれていた。
メイガスで正式に採用された事を程無くして咲夜からのメールが来て知る事になる。そのため大量の発注が必要となり、前払い込みで振り込まれたそうだ。
「どうしよう。私……お金持ちだ。え、この数を明日まで？　・・・・・急いで作らないと」
その晩彼女は眠る事なくコードを作り続けた。

準備中　スペル・コードください（後書き）

２０１１／０８／２０　スペル・コードの設定を少し変えました。
少しはわかりやすくなったと思います。

第1話　4月（1）　魔導師の少女と謎の病

一限目。魔術の授業。魔術に関心のある生徒は少ない。ここは魔導師による魔導の街。魔術師の街ではない。

生徒達はゲームをしたり漫画を読んだり寝ていたり、と随分と自由に過ごしている。

私達魔導師は基本的に魔術を使えない。魔術師は才能と魔術炉と呼ばれる器官がなければ使えない。

逆に魔導師には誰でもなれる。私達にとっての魔術の授業は漫画の世界がどういう原理なのか習っているに過ぎないという事だ。

つまり、空想。繰り返すが何の役にも立たない。

魔術担当教師も相当やる気がない。そして、教師も魔術が使えない。

この街、魔導師の街陽ノ宮で魔術を使える一般人はいない。

そして、私、迷走鬼縫も授業を真面目に受けていなかった。

徹夜疲れでは無い。私はずっとお金の使い道について考えていた。

ぶっちゃけ、コードの開発費に当てればあっという間に無くなる。

コードの研究費用は馬鹿にならない。今まで自分の小遣いのほとんどをつぎ込んできた。親戚のおばさんに会ったときに貰ったお金、誕生日に貰ったお金。宝くじで当たったお金。道端で拾ったお金、その全てを。

趣味がコード研究の他にないのかと言われると……ない。皆無と言って良い。

私がスペルコード研究にお熱なのは、母さんが「ミレミアム１３」を解いた伝説の魔導師だという事。魔導師として母さんは尊敬出来る。私の目標は母さんだ。

「まぁ、他に使う当ても無いか」そう自分にそう言い聞かせる。

と、いう事でお金の使い道はスペルコードの研究費に当てる事が決定した。

『キーンコーンカーンコーン』
授業終了のチャイムが鳴る。
「起立、礼、ありがとうございました」
授業終了の挨拶。それが終ると一気に教室がざわめいてゆく。
「……授業終わったのか。……縫、おはよう」
寝ぼけた声で私に話し掛けて来る。
「那癒、寝てたのか」
隣の席で寝息を立てて寝ていた友達の赤羽那癒多(あかばねなゆた)が目を覚ます。
涎を拭う姿と小さな容姿もあって何だか子供みたいで笑える。
「ああ、魔術なんて授業ないに等しい。余程の事が無ければ単位を落とす事はないだろう？」
「確かに」
……那癒は去年落としかけたけど。
「次の授業は？」
「えーと……確か英語？」
「四ノ宮にいる限り私は英語を使いません」
「そうね、日本語使えれば何とかなるわね」
「縫はいつも満点じゃないか」
「うっ」
コードのために勉強していたらコードに関連する科目だけ特化して優秀になってしまった。英語、数学、化学は良いが、国語と社会が壊滅的だ。理系の大学に進む上では問題ない。
ガン。ドアを乱暴に開く音。嫌われ者の登場。
教室が静かになる。立っていた生徒が続々と自分の席に座ってゆく。
英語の教師は決まって授業開始五分前にやってくる。
そして、授業は十分オーバーする。死ねばいいのに。
「今日はテストするぞ～」
『えーーーー』
決まってこれだ。

英語の教師の趣味は抜き打ちテスト。それもかなりの難易度だ。
まぁ、授業よりは楽だと言える。
テスト用紙が配られる。
「では、始め」
英語教師の声と共にテスト用紙のめくる音が聞こえる。
「ふふふ～ん♪」
私は順調にテストを解いて行く。さっき言った通り英語は得意だ。
那癒は……、
「……」
熟睡していた。
「はい、止め」
英語教諭が声高らかにテスト終了を宣言する。
難解な上に異常と言って良い量。とてもじゃないが時間内に解けるものではない。
私は解いたけど。
「はっ！　眠っていた」
「じゃあ、後ろから集めなさい」
テストを集め、挨拶をして英語の授業は終った。
「縫、あのテスト何だったんだ？　例文が生々しかったぞ。ちらっとしか見てないけど」
ちら見で内容を把握できる那癒の才能に嫉妬する。本当に嫉妬する。
「あの教師の今日のテスト、最近あったニュースを英文にしてただけだった」
「ああ、あれか。気絶するヤツ。確かブラックアウト症候群か」
「ブラックアウト症候群か。ちょっと興味あるかも」
最近陽ノ宮で起こっている病。ブラックアウト症候群。心臓に謎の負荷がかかりそれが原因で意識を失う病。死傷者は出ていないけどかなりの人数が掛かっている。
原因は不明で、マスコミは『世紀末の呪い』等と煽っている。

「調べてみようかな？　ブラックアウト症候群について」
私はブラックアウト症候群について調べる事にした。
「探偵モノの見過ぎだな」
余計な事を言われた。

「さて、言ったは良いがどうしたものか」
放課後の帰り道、縫は悩んでいた。
「探偵でも雇うか？　いや、お金がな……」
ふと立ち止まり、思い出す。
「あっ、今私お金持ちだ」
私は自分の家目指し走り出した。
「只今帰った！」
「姉ちゃんおかえりー」「縫ちゃんだー」
駄菓子屋と言う事もあり、賑わっている。母曰く子供がいる限りうちの駄菓子屋安泰だそうだ。
ちなみに私に弟や妹はいない。いや……いるか、ごつくて怖い大きい義理兄弟が。
「お帰り」
「突然だけど、母さん、知り合いで探偵いない？　腕良い人」
「本当に突然ね、いるっちゃいるけどいるけど」
母の人脈の広さに素直に感謝する。
「誰？　名前は？」
「鳴海縁（なるみえにし）」
「えっと、お母様、私聞き間違えましたか？」
「鳴海縁」
「私の学校の先輩だった『あの』？」
「うん」
「腕良いの？」

「腕は良い。けど金運が絶望的にない。連帯保証人になって今多重債務者。縫が一番詳しい」
「……一応行ってみるね」
「着替えないの？」
「鳴海先輩に会うなら制服の方が都合が良い。一発でわかるから」
「ああ、そうだね～。どうせ私服少な、……ないからね」
母はすぐに言い直した。
「うん。そうだね。行って来る」
「縫」
「何？」
「後悔しないようにね」
母の言葉が私の胸に刺さる。
私が向かうのは、鳴海探偵事務所。結構昔からある探偵事務所だ。
「はぁ」
気分が沈む。憂鬱だ。私は気不味い。彼は、鳴海先輩は私の……元カレだ。

第2話　4月（2）　魔導師の少女と探偵（元カレ）

「はぁ」

多重債務者探偵の鳴海縁は項垂れていた。

返せない借金の利息を払い続ける生活を送り続け、流石に疲れ切っていた。

天井に吊された縄を見つめる。いざと言うときの為にセットしてある。

そして、ついに今日鳴海縁は人生最後の日を迎える事を決意していた。

「母さん、兄さん、姉さん、タマ、マルコ、ポチ、ペケジ、佐藤、佐藤、佐藤、佐藤、佐藤、佐藤、佐藤、鈴木、鈴木、鈴木、田中、田中、田中、田中、田中、田中、田中、先に逝く事を許してくれ」

友人の名字が偏っているが、今はどうでも良い。

椅子に乗り天井から吊り下がった縄に首をかける。そして、椅子を蹴り上げる。

「ぐっ……」

思ったより苦しかった。しばらくすると、視界がぼやけてくる。

「ああ。死ぬな……」

さよなら、現世。こんにちは冥府。

事務所の階段を誰かが上る音がする。丁度良い、迷惑を掛かるが第一発見者になってもらおう。

「こ、こんにちは鳴海先輩……！」

入ってきたのは女子高生だった。見知った制服。見る限り鳴海の卒業した高校のものだった。

「命を粗末にするなぁあああああ！」

少女は鳴海の足を掴む、すると縄が首に食い込んでゆく。

「っっぐっ！」

思わず苦悶の表情を浮かべる。

縄はあまりの重さに耐えきれず、ぶちっ、と音を立てて千切れた。
「げほげほ」
咳き込む鳴海を少女は、
「せいやぁあああああ！」
蹴り飛ばした。
綺麗に宙に舞い、机の真ん中へ放物線を描いて飛んでいった。机は真っ二つ割れ、鳴海の意識は途絶えた。
数分後。鳴海は意識を取り戻した。
「落ち着きましたか？　鳴海先輩」
「縫」
「迷走鬼です」
「迷走鬼」
「『さん』を付けろ、今は依頼人だ」
「迷走鬼さん」
「てか、何で死のうとしたんですか？」
「それは、借金がありまして……」「鳴海ぃ、金返せやぁぁ」
綺麗に鳴海の声がノイズキャンセルされる。
「あ、あなたは！　おっ……」「あっ……」
白スーツの男が私を見て硬直する。縫も面識があるのか固まる。
「お嬢ッ！」
「お嬢？」
鳴海は足を震えさせながら疑問符を吐く。
「銀、久しぶり～」
「お嬢こそどういった事情でここへ？」
「えっ？　ごめん付いて行けない」
鳴海は足が震えが上半身にまで伝えっていた。
「鳴海ィ、お前、お嬢の知り合いだったのか？」
「ええっとその……」
「銀、そんなに大きな声出さないの。怯えてるでしょう。まぁ、面白いから許すけど。ああ、関節の一つ

位なら外して良いわよ」
「恐縮です」
「えっと、この人は元カ……鳴海先輩は私の高校の先輩だった人」
「鳴海ィィイ。そういう事なら早く言えよ、あと関節外すから心決めろぉぉぉお！」
「は、はい」
一瞬にして左肩の関節が外される。見惚れる程の職人技だった。
「お嬢の知り合いなら配慮してやったものの」
「そ、そうなんですか？　でも、肩は外しましたね」
「銀、話進まないからいい？」
「へい」
「俺の肩は？」
鳴海の左肩が不規則に揺れる。
「鳴海先輩にはブラックアウト症候群の調査をお願いします」
「俺の肩は？」
鳴海の左肩が荒ぶる。
「ブラックアウト症候群と言えばこっちの世界でも話題になってますぜ。関わったら死が待っていると」
「実際にはまだ、死人は出てないけどな」
「黙れや、鳴海ィィィッィイ。さっきからうるせぇぞ！」
「す、すいません」
「……借金も背負ってるみたいだし丁度良いでしょう。真相を暴いたら借金はチャラ。ミスったら……死を」
「承知致しやした」
「という事で、鳴海先輩、頑張ってください」
縫は銀達と一緒に事務所を後にする。鳴海はだらしなく肩をぶらぶらさせながら縫の方を見ていた。

第3話　4月（3）　探偵と極道の頭

鳴海縁は今、陽ノ宮の極道の頭。迷走鬼縫の父親にして迷走鬼組組長の前にいた。

何というか、連行された。流石に縫の一存だけでは借金をチャラというわけにはいかなかったのだ。

「まぁ、楽にしぃや」

「は、はい」

楽にするも何も手足を縛られて、身動きが取れない状態では何の意味もない言葉だった。まだ、左肩外れているし。

「で、今回の借金の件なんやけど、縫があんさんに依頼したってのは本当か？」

「ええ、まぁ」

「じゃあ、まず借金の件は完全に縫に一任する。上手くいけばチャラや。他に訊きたい事もあるしな」

内心ホッとする鳴海。しかし、次の言葉で鳴海は凍り付く事になる。

「君、縫の元カレだったって本当？」

屋敷内がざわつく。

「えっと、……はい」

「そうか、君があの鳴海君が、娘から色々と聞いてたよ」

「はぁ」

組長の意図がわからない以上鳴海も変な事は出来なかった。左肩も外れてるし、実際何も出来なかった。

「君、娘とは何処まで？」

組長の発言により、ざわめいていた屋敷が静かになる。皆、鳴海の発言に耳を傾ける。

「……」

言い様のない緊張感に苛まれる。

鳴海には予感があった。この男には嘘は通じないと。
周りには屈強の男達。銀と呼ばれた男もいる。何より鳴海が恐れているのは、組長。
掛け軸の下に日本刀が飾ってある。鳴海の見間違えでなければ、鞘に血が付いている。しかも、新鮮な血だ。先程使われたと見て間違いなかった。
正直に話すしか無かった。覚悟を口を開く。
「手を繋いだ、所まで、です」
覚悟を決める必要がなかった。
「小学生か己は！」
銀は立ち上がり鳴海を指さす。
『そうじゃあああああああ！』
「黙りぃや、皆の衆」
『へい』
組長の一喝で男達は黙り込む。
「悪いなぁ、悪い奴らではないんけどな」
「はぁ」
「君も見たところ悪い人間じゃなさそうや、何で別れたん？」
「借金出来て、迷惑掛かると思いまして、別れようと僕の方から」
『鳴海ぃいいいいいい』
屋敷内に拍手の音が響く。
「そうか、君は別に縫の事が嫌いで別れた訳じゃないのか」
「えっと……はい」
「大変だよ、アフターケア。現在進行形で」
よく見ると組長を始め、皆、痣がある。
「みんな、縫ににやられました」

「本当ですか？」
鳴海は辺りを見回す。どうも、嘘を言っている雰囲気では無かった。
「表には出さないけど君の事が気になっているようだ。ていうか相思相愛なら早く復縁してくれないかな？　こっちの身が持たない」
『鳴海ぃいいいいいいいいいいい！　頼む！　このままだとお嬢に殺されるぅう！』
必死だった。みんな必死過ぎて引いた。
「わ、わかりました。善処します」
別れようと言った方からやり直そうというのは難しいが、借金返済よりは簡単だろうと踏んだ。
「ふん！」
組長は目にもとまらぬ早さで掛け軸の下から日本刀を取り、鳴海の縄を切った。
「組長、ところでその鞘の血は……」
「ああ、居合いの練習してたら指切ってもうて。お恥ずかしい。銀、左肩直してやり」
「へい」
一瞬にして左肩が戻る。若干の違和感はあるが、すぐに慣れるだろう。
「じゃあ、娘を頼むよ」
鳴海の依頼がまた一つ増えた。

第4話　4月（4）　探偵と元カノ

「さて、どうしようか」
問題はどうやってまた会って話をするかだった。
メール、アドレスが変えられている。
電話、家の電話番号は知らず、番号も変えられている。
　手紙、読んでくれるだろうか？
つまり、直接会って話すしかないのだ。そのために、軽くブラッククアウト症候群について調べた。現状報告という名目で会って、「やり直そう」と言うのが今回の鳴海の作戦だ。
　自分から別れ話を切り出しておいて、やり直そうなど、あまり格好の良い話ではないが、背に腹は代えられない。元通りにならずとも、関係を修復していと想っているのは事実だ。
「そうだ、師匠の所に行くとしよう」
鳴海は師匠の所へ向かう。
鳴海の師匠の家は近所だ。メールで今から伺ってよろしいでしょうか？　とだけ打ち送信。すぐに了承のメールが返ってきた。
「おじゃまします」
「いらっしゃい。どうしたの？」
鳴海の師匠の名は赤羽癒美（ゆみ）。またの名を愛の伝道師ゆーみんである。
「今日はどうしたの縁くん」
「実は……」
鳴海は事情を話すと、癒美は考え込む。が、すぐに答えを導き出した。
「当たって砕けろ。キラッ☆」
何処ぞの銀河の歌姫の様なポーズを取る。年の割には似合ってい

た。
「それ以外に何か方法は」「ない」
即答された。
「どんな事情があったにしろ今回は縁くんが悪い。誠意を込めて謝るしかない」
「謝れば大丈夫なんでしょうか？」
「良いムードで言えば大丈夫よ」
「本当に？」
「仕方ないわね。これをあげましょう」
「こ、これは！」
渡されたのは長方形の紙。遊園地のチケットだった。
「またベタなものを」
「他に手が？」
「くっ……」
鳴海は何も策が浮かばなかったからここにいる。それに鳴海が師匠に逆らう事などあり得なかった。
「わかりましたよ」
「わかればよろしい。ちなみに期限明日だから」
「え？」
「今日誘っちゃいなさいな」
「えええええええ」
「今日誘えなければずっと誘えないと思うし。当たって砕けなさい」
鳴海は深呼吸して答える。
「はい、師匠」
鳴海は覚悟を決め、縫の元へ向かう決意を固めた。ちなみに癒美のチケットの入手先は弟子一号から。その対価は鳴海が縫の元カレだったという情報だった。

◆

数時間後。鳴海は駄菓子屋三國屋にいた。夕方だというの縫はまだ家に帰ってきていない。寄り道をしているのだろう。高校生の行動としては珍しくない。

鳴海はこうして駄菓子屋の前でうろついているのだが、

「お兄ちゃんもう一回」

「遊ぼう」

「今度はお兄ちゃんが鬼だよ」

子供達にやたら好かれてしまった。

子供達の好意を無下にする事も出来ず、鳴海は童心に戻って遊んでいた。いや、遊ばないと緊張で胸が押し潰される。

それから大概の事はした。鬼ごっこ、めんこ（駄菓子屋にあった）、ヨーヨー釣り（駄菓子屋にあった）、射的（駄菓子屋にあった）、セパタクロー（ボールとネットが何故か駄菓子屋にあった）。

サッカーはした経験があるがセパタクローは初めてだった。

子供達のセパタクローの強さは異常で、今すぐ世界を狙えるんじゃないか？　と思うほどだった。

そして、子供達を遊んでる内に日が沈んできた。

「僕たちそろそろ帰らないと」

「近所だから少し遅くても大丈夫なんだけど……」

「これ以上は怒られちゃうから……」

子供達の顔が一気に暗くなる。鳴海としても、そんな顔はあまり見たくない。

「よし、また今度遊ぼう」

「本当？」

「本当だ」

「やったー」

「名前訊いても良いかな？」

「僕は田中正広（たなかまさひろ）」

「僕は田中健太（たなかけんた）」
「私は田中良子（たなかりょうこ）」
「兄弟？　親戚？」
「違うよ」
「偶然だよ」
「あっ……はっはっは」
鳴海の知り合いにまた「田中」の数が更新された。
少年達が帰って行く。入れ替わりで縫が家に帰ってきた。
「鳴海先輩」
「ぬ……迷走鬼」
「何ですか？」
先日の様な毒のある対応でない事にほっとしつつ、勇気を振り絞りポケットからチケットを取り出す。
「こ、これ」
「何ですか？」
「遊園地のチケット」
「こ、これ陽ノ宮ランドのチケットじゃないですか！　手に入れるのに凄く苦労するのにどうしたんですか？」
「い、いやその……一緒に行かないか？」
「え？」
「それ期限明日なんだ」
「あっ。本当だ」
「明日は休日だろ？」
「ええ、まぁ」
「特に用事が無いなら是非」「行きましょう」
鳴海の言葉を遮り縫は即答する。
「本当に？」
「嫌だって行っても一人で行きますよ」
「やった」
鳴海は小さくガッツポーズを取った。待ち合わせの時刻を決め、

鳴海は事務所に帰っていった。
鳴海の姿が見えなくなると縫は……、
「やったぁあああああ！」
縫は大きくガッツポーズを取った。

第４話　４月（４）　探偵と元カノ（後書き）

文章が短い気がしてきました。次回から文字数も意識したいと思います。

第5話　4月（5）　元カップルの復縁活動

陽ノ宮ランド。陽ノ宮ショッピングモール内にあるテーマパーク。四之宮では某ネズミの国をも凌駕する人気を誇っている。本格的なアトラクション。様々なジャンルを網羅した夢の国。

この陽ノ宮ランドが人気があるのは、陽ノ宮ランド自体が映画の舞台になっているからだ。登場人物が立っていた場所に自分も立てるというのが醍醐味だ。

初期はそうでもなかったが、今ではチケットを完全抽選制にしなければ、ランド内は人で埋め尽くされ、係員だけでは裁ききれない自体が発生する。

陽ノ宮ランドクラブに入会し応募し、運良く選ばれた者だけが入る事が出来る。

オークションでチケットの値段が六桁になった事もあるとか。

そして、縫のテンションも最高潮にあった。

待ち合わせ場所は駄菓子屋三國屋。ここから陽ノ宮ランドまで約三十分。開場が十時なので、余裕を持って九時二十分に待ち合わせとなった。

「待ったか？」

「大丈夫ですよー」

鳴海が気味悪がるほど縫の機嫌が良かった。昨日の迷走鬼組の負傷者はゼロだった。

駄菓子屋三國屋から約二十メートル離れたビルの屋上から二人を覗き見る男がいた。白いスーツを身に纏いスキンヘッド。わかりやすい極道の男、銀である。

「こちら銀。順調に事は進んでいるようです。お嬢が機嫌良すぎて逆に怖いですが」

銀は無線で連絡を取る。

「よし、引き続き備考を続けろ」

「へい、組長」
かくして、鳴海と縫のデート（？）が始まった。
「こちらA班、バス停より陽ノ宮ショッピングモール行きのバスに乗り込むところを確認」
「了解。A班は車でバスを尾行しろ。B班、C班は陽ノ宮ランドを一望出来る場所を探し出せ」
『へい』

「何か視線を感じる気がする」
職業病なのか何者かの気配を感じ取る鳴海。が、縫のこの顔を見て気にする事を止めた。
心から楽しんでいる。探偵でなくても分かる。鳴海としてもそれはありがたかった。縫が楽しんでくれるならそれで今日は大収穫と言える。
このまま機嫌良く帰ってくれれば、組に八つ当たりする事もないだろう。
門の前に着く。もうすぐで入場の時間だ。丁度良い時間に着いた。すぐに門が開く。陽ノ宮ランドのテーマが流れる。

『陽ノ宮ランドへようこそ。今日は楽しんでいってくださいね』

「この声、人気声優を起用しているのか。無駄に凄いな」
「鳴海先輩早く行きましょう」
二人は門に入って行く。
中は凄かった。凄かったという言葉に限った。興味があまり無かった鳴海ですら童心に返ってしまう程に。
縫はさっきからはしゃぎっぱなしだった。これが演技だったらどうしよう。等と思ったが、これが演技なら縫は主演女優賞ものだ。疑うだけ無駄だ。
ジェットコースター五種十回、メリーゴーランド、コーヒーカッ

プ等の基本から陽ノ宮ランドの名所の陽ノ宮宮殿を周り、陽ノ宮の国民的マスコット双子少女、桝琴（ますこと）姉妹にも運良く会えた。縫はサインを貰い気分は最高潮に達していた。

気付けば昼時、良い感じで二人の腹は空いていた。

借金があるとはいえ、ここで奢らなければ格好が付かない。事前に鳴海は知り合いの医者から少し金を借りてきた。今月中に返さなければ治験体になって貰うと言われた。返す当ても無く借金をしたので、治験は覚悟しなければならない。

「迷走鬼、何か食うか？」

「はい」

満面の笑みだった。

適当な店に入る。陽ノ宮ランドはショッピングモールと連携しているため、様々な飲食店がある。店を全て回るだけで一日を使えるレベルだ。

「いらっしゃいませ。お二人ですか？」

「はい」

「二名様ご案内させて貰います」

店員に誘導され、座る。メニューを渡さる。そして、ある事に気付く。

「すいません、値段書いてないんですけど」

「全て無料となっております」

「本当ですか？」

「はい」

「じゃあ、遠慮無く頼みましょう先輩」

「ああ」

鳴海はペペロンチーノ、縫はハンバーグカレーを頼んだ。砂漠ではない方のデザートが控えているため小さめのサイズを頼んだ。

「……うまい」

「今まで私が食べて来たハンバーグカレーは何だったの！？」

最高の食材と一流のシェフによる料理。あまりのおいしさに思わず頬が緩む。

二人はあっという間に平らげる。縫はパフェを頼むためメニューとにらめっこしていた。

この店はパフェだけで種類が百ある。この陽ノ宮ランドは滅多に来られるものではない。パフェもそうだ。縫は堪能したかった。出来るだけ多くの種類を食べたい。

つまり……、

「な、鳴海先輩も食べませんか？」

こういう事だ。

食い意地を張っている事を自覚しているのかいつもより覇気がない。

鳴海は微笑みながら了承した。こういう所もあったっけ？　と懐かしそうだった。

「お待たせしました」

店員が運んできたパフェ達。計二十個。色取り取りのパフェが並ぶ。

「うわぁ」

鳴海は軽く引き、

「ふぉお」

縫は目を輝かせた。

「じゃあ、半分ですね」

縫がパフェを半分ずつ平らげてゆく。食べ終わったパフェは鳴海の方へ置かれてゆく。

「これって……」

鳴海と縫はまだ手を繋いだだけの関係である。初々しいお子様カップルだった。鳴海の考えていた事それは、間接キスになるのではないか？　という事だ。縫が気付いてないので、鳴海も気にしなければ何の問題もない。

変に意識すれば気付かれる。手にかいた汗をおしぼりで拭き、平

然を装う。
そして、
「頂きます」
パフェを口に、
「あああああああああああ鳴海先輩待った、ストップ！」
入れる事なく静止を促される。
「ど、どうした？」
「これって間接キスになるんでしょうか？」
気付かれた。安心する気持ち半分、残念な気持ち半分だった。
「なるんじゃない？　口を付けたものを接触させるわけだし」
「変な言い方しないで下さい」
「悪い」
今までの明るい表情から一転。縫はスプーンを机に置き、真剣な面持ちになる。
「鳴海先輩。私、最初は部活の後輩で、その後恋人で、今私達、どういう関係なんでしょうか？　楽しすぎて我を忘れていましたけど……」
鳴海がずっと問い掛けたかった問を縫の方から尋ねてくる。
鳴海は迷っていた。嫌いなわけがない。しかし、借金という理由があったにしろ別れを持ち掛けたのは自分だ。彼女を傷つけたのは自分。そんな自分に彼女と付き合う資格があるのだろうか？　今は答えが出せない。だから、
「縫、この依頼が終わったら答えるよ。だから返事を待って――」
その瞬間を誰も理解出来なかった。音もなく『何か』が鳴海の肩を貫通する。その場に鳴海は倒れ込んだ。
「鳴海先輩！」
縫が辺りを見回す。そこに鳴海の姿は無かった。鳴海が、消えた。

◆

銀が組長の頼みで二人を監視してから数時間。昼飯時になった。
「アニキ、あんぱん買ってきました」
「ご苦労」
「ヘイ」
この舎弟は縫の影響で探偵モノではないが刑事ドラマが好きで、差し入れは決まってあんぱんと牛乳。ヤクザと警察は水と油。何とも微妙な気分になる。
「上手く事は進んでいるようだな。これは組長に良い知らせが出来そうだ」
双眼鏡を覗く。縫がスプーンを置いた。
「こいつは……」
銀が見たその表情は組長である縫の父が母親にプロポーズした時の表情そのものだった。
「お嬢、決める気か?!」
無粋なマネは出来ない。少女であっても組長の娘。自分の立場はわきまえる。それが男だ。
「アニキ！　お嬢が覚悟決めた顔してますよ」
「ふん」
銀の渾身の蹴りが舎弟の腹筋を貫く。
「がはっ」
腹を押さえ苦悶の表情を浮かべる。
「無粋なマネするんじゃねぇ！」
「すいやせん、それよりアニキ、あっちのビルに――」
「――殺気?」
双眼鏡で向のビルを見る。
「スナイパー？　いや魔導師か」
魔導師は全身に黒いローブを纏っていた。フードで顔も見えず性別の判断は付かなかった。

その人物が構えていたのは魔導機銃ハイル１９４８。職業柄銀も銃に詳しいが実際にその銃を見たのは初めてだった。何しろ、魔導師が扱えるモノではないからだ。

銃の性能は高い。使用者の魔力を収束し対象を狙い撃つ。サイレント機能まで付いている優れモノだ。

問題は奴が何を狙っているかだった。

「まさか！」

銃声はしなかった。陽ノ宮ランドに展開されていた厳重な結界を擦り抜け、鳴海の肩を貫通させる。

「野郎！」

向かいのビルまでは大分距離があったが、銀にとっては射程圏内だった。胸から銃を取り出し狙い撃つ。

銃弾は魔導師の右手に当たった。予想打にしない方向からの攻撃。魔導師は困惑していた。それは、打たれたからでは無かった。魔導師は鳴海の方を見て困惑していた。

「アニキ、お嬢は？」

「ああ」

銀が双眼鏡で確認すると、縫は無事だった。しかし、そこに鳴海はいなかった。

「消えた？」

鳴海縁は姿を完全に消していた。まるで魔法を使ったかのように。

間　章　4月（6）　二人の魔術師

魔術師は困惑していた。自分の撃った標的が完全に消えた。鳴海の姿を認識出来ない。完全に見失った。

その後不意を突かれ右手を撃たれた。大した傷ではないがしばらく精密な射撃は出来ないだろう。

足早に現場から去る。警察に動かれると厄介だ。一人で動いている訳ではない。仲間に迷惑を掛けるわけにはいかない。

空間転移の魔方陣等も使えるが、魔力の消費量を考えるとあまり生産的じゃない。それに、痕跡も残る。

証拠されれば居場所を特定されかねない。ローブを脱ぎ捨てる。ローブを破り右手に巻く。残りは燃やした。古典的だが、これが一番証拠が残らない。

移動には電車を使う。人を隠すなら人の中。目立たずに移動するなら人の多い場所が良い。

それから二十分程で目的地に着く。

「ただいま」

「おかえり」

返ってくる声は一人の女性だけ。白衣を身に纏い、コーヒーを飲んでいる。目の下には隈が出来ていた。その様子から何日も眠っていないことが窺える。

「……その手どうしたの？」

「撃たれた。油断した。でも、心配ないよ。すぐ治る」

「なら良いけど、治癒魔術しようか？」

「大丈夫、それより心配な事がある」

「何？」

「探偵鳴海が私達を嗅ぎ回っている」

その瞬間に連想したのは鳴海縁ではなく、その父の方だった。伝説の探偵数々の魔術殺人を解決した男。彼が関わった事件は全て解

決されてい
る。短期間の間に必ず。時間が欲しい二人にとって鳴海の父は脅威だった。
「鳴海ってあの鳴海？」
「息子の方だ」
白衣の魔術師は思わず安堵の息をつく。それに、魔弾の魔術師は「でも、油断ならない」と促す。
「始末するつもりだったが逃げられた。詩衣も気を付けた方が良い」
「良かったぁ～」
「何で安心するんだ！？」
魔弾の魔術師は叫ぶ。白衣の魔術師はなだめるように「だって、玲が人を殺すの嫌だもん、私」と優しく言った。
「……ふん、甘いな。最悪の事態を想定して冷徹な行動を取ることも必要なんだ」
魔弾の魔術師は照れ隠しに背中を向ける。
「急がないとな。鳴海は優秀だから。ちょっと調べたが奴の取り扱った事件も、父親にスピードが劣るとはいえ、全て解決されている」
「そうね、私達はこの場所から離れられない。時間稼ぎに放ってる『獣』も数に限りがある」
「詩衣は甘いなぁ。人を殺せない『獣』しか作らないなんて」
「だって、私は人を殺すためにこの研究を続けてるわけじゃないもの」
白衣の魔術師はポケットから写真を取り出す。
「……急がないとね。手伝ってくれる？　玲」
「もちろん。私はそのためにここにいるのだから」

間　章　4月（6）　二人の魔術師（後書き）

短いですね（笑）。まぁ間章だから仕方ないということで。後書きも出来れば毎回書くようにしたいです。最初の方忘れてました（おいおい）

第6話　6月（1）　夜の獣と狩猟者の少女

――お前は知っているだろうか？　骨が折れたり砕けたりするときの痛みを

――狩猟者の少女

魔導師の到達点とは生命の掌握。生物の生き死にを自由に操る事らしい。

それに辿り着こうと日夜魔導師は懲りもせず実験体を作る。私は思う、生命の冒涜だと。

作るのも許せないのに問題なのが、わざわざそれを放つ馬鹿までいる事だ。

死体を利用して生物実験をするのが主流。趣味が悪いな、本当に。

月は死者に力を与え、死者は太陽に弱いと相場が決まってるとはいえ、律儀に夜に現れてくれる。

俗に、ゾンビとかアンデットとか化け物とかの大体は魔導師が作っている。

……トラウマ作るなよ、魔導師。

私達はその実験体の事を『夜の獣（ナイトビースト）』と呼んでいる。

私の仕事は、夜にしか放たれない夜の獣を抹殺し、放った魔導師を捕らえる。

生きているものの生気を奪う習性がある獣を野放しするわけにはいかないわけだ。

それが掃除屋、『夜の狩猟者（ナイト・ハンター）』の仕事だ。

私こと赤羽那癒多（あかばねなゆた）は陽ノ宮高校の二年生。職業が学生。および夜

の狩猟者。

夜にしか現れない＝夜戦う＝朝眠い、超眠い

よって、この等式が成り立つ。当然のように学校ではいつも寝ている。

単位が足りないなら退学するまで、と思っているが、流石に母はそれを許す気がないらしい。当たり前だが。

悪い魔導師がいなくならない限り、母曰く、私達の仕事は無くならないらしい。

夏、ますます夜の獣の出現が増える。魔導師を確保しない限りキリがない。

私も頑張ってはいるんだけど、今回のヤツらは私達より一枚上手だ。

「最近どうよ？」

「眠い」

「いつも寝てるじゃない」

学校が終わり縫と適当に会話しながら下校。縫はいつも元気だ。

四月に陽ノ宮ランドの前で会って、目を真っ赤にして泣いていた所を見たが、それでも元気だ。

学校で居眠りしてる所なんて見た事がない。

……あっ、私が学校にいるときほとんど寝てるからか。

「最近忙しくてね」

「仕事？」

「まぁな」

「おばさんに頼んでみたら」

「……あっ、何故だろう。その発想はなかった。そうするよ」

頭の中でピキィーンと種が割れるかの様に閃いた。

帰宅。早速母に頼んでみる。

「母よ、何とか人数増やせない？　流石に私一人じゃ辛い」

実はここの地区の仲間が食中毒やらブラックアウト症候群やら怪我でいない。
で、私一人だけになってしまっている。信じられないけど、これが現実だ。
「ちっ、気づいたか。……ごめんね～今どこも人手不足で……」
「母よ、今言っちゃったよね。舌打ちもしたよね？」
「秋になれば、飛鳥の魔術師が来てくれるから」
「うわぁ、スルーされた。母よ、飛鳥って黒陽飛鳥（くろひあすか）？」
「うん」
「陽ノ宮管理者、陽ノ宮最強の魔術師の？」
「そうね～」
四つの宮からなる大都市四之宮。それぞれ一人管理者という者がいる。黒陽飛鳥は歴代最強と謳われている。管理者には自分の魔術師を持つ事が許されていて、その管理者の魔術師というのが決まって化け物みたいに強い。下手したら一人で陽ノ宮の夜の獣を掃除出来る程だ。
「てか、母よ、どうして秋なんだ？」
「何でも鷺ノ宮に行ってるそうよ」
「鷺ノ宮？　ああ、鷺ノ宮ねー……えっ？　今鷺ノ宮は人の住めるような場所じゃないじゃないか！」
鷺ノ宮。四ノ宮の都市の一つ。エネルギーの塊、魔力の源の「龍脈」の暴走により滅んだ街。
龍脈の暴走。原因はわからない。それにによりわずか数週間で人が住めないようになった。
今もそのエネルギー暴走は止まっていない。
そんな危険地帯に一人で行けるって事は、それ程の腕なのだろう。
密かに期待するとしよう。
「てか、何で知ってるんだよ？」
「探偵に聞いた」

もうすぐ夕方。仮眠の時間だ。私は部屋へ向かい眠る。「眠くて殺されましたー」じゃ冗談にならないからな。

目を覚ます。夜の狩猟者の服に着替える。母が使っていたものを直したものだ。機能性は申し分ない。反発して他のも試した事もあったが、結局これに落ち着いた。

「行ってくる」

「今日も頑張ってきてね。那癒多」

「了解」

最近夜の獣の数の増加、加えて強さを増している。厄介だ。

他の区域でも同様の現象が見られている。

「でもまぁ、強かろうと弱かろうと関係無い」

自嘲気味に笑う。すると、夜の獣が現れる。

『ガァアアアアアアア！』

「う～ん手強そうだ」

狼の様な姿をした獣。元となったのは多分、犬の死骸だろう。それに無理矢理魔力を注入して、生物と化した。夜の獣と呼ばれる由縁。死骸を使って実験。これだけでも充分に罪深い。私利私欲のためならば尚更だ。死には敬意を払わなければならない。

狼タイプの獣ははスピードがあって攻撃も半端じゃなく強い。

「まぁ、私には関係ないけどね」

私は魔術を二つだけ使える。たった二つだ。

「強化―動体視力―」

一つは動体視力の強化。

これにより、夜狼の攻撃をかわす。この魔術、目に多大な負荷を掛けためあまり長い時間は使えない。

「ＳＰＥＬＬ　ＣＯＤＥ：ＩＭＰＡＣＴ『？』！」

『衝撃』のスペルコード。媒介は腕。シールを腕に貼る事で刻印が腕に移る。それを任意のタイミングで発動できる。

単純明快、強力。馬鹿な私でも扱えるコードだ。

一撃与えた時点で充分だが、私のターンはまだ終了していない。

基本的にオーバーキル気味じゃないと死なない。
「このままッ！！　親指を！　こいつの！　目の中に…………つっこんで！　殴りぬけるッ！」
「ぎゃおん」。夜狼の悲鳴と共にバキッ、と嫌な音が鳴る。夜狼の骨の音ではない。
夜犬は魔力原子の崩壊により元となった死骸と共に風化する。
「いったぁあああああああああああああいいいいいいいいぃぃぃぃぃぃぃぃ！」
実は、このコード安全基準を余裕でオーバーしている。母さんから引き継いだもので大量に余っているため使用している。
響き渡ったのは私の骨が折れる音だ。
この違法アイテムを超える合法兵器はやたらと値が張る。それこそ、どっかの企業や軍が買うレベルだ。他のコードや武器も試したが、結局これが一番使い勝手が良く、強力だった。
「高速治癒開始…………」
私のもう一つの力は『癒す』力。
これが無ければとっくに死んでいる。
私はか弱いんだ。……こいつら獣に比べれば。
だから玉砕覚悟で……いや玉砕してるけど、そうやって戦わないとこいつ等は倒せない。
母さんも優秀だったらしいけど、今は怪我で引退。車椅子生活を余技無くされてる。
母さんも同じくインパクトを使ってたわけだけど、どういうわけか私の苦しみをわかってくれない。
まぁ、だけど致命傷を負ってはいけないという条件下でなら私は最強だ。だから、私は獣によって傷ついてダウンって事はない。
この仕事は私に向いている。この街を守るのは今私しかいない。
夜の街を守るヒーロー。うん。何だか格好いいじゃないか。
私が実は戦隊ヒーローシリーズやライダーシリーズが好きなのは秘密だ。

フッ、私も縫の事を言えないな。
だから、今夜も陽ノ宮の平和を守るため、戦おう。
私は残りの獣の討伐に向かう。

第6話　6月（1）　夜の獣と狩猟者の少女（後書き）

誤字脱字が多いです。段落のミスとか。
気を付けるつもりなんですけどねー
もしあったら教えてくれるとありがたいです。

第7話　6月（2）　魔導師の少女と狩猟者の少女の約束

――何で学校の机で寝るとあんなに気持ちいいんだ？

――狩猟者の少女

「眠い……」

一限目は魔術の授業だ。寝よう。一時間目が魔術の授業とは運が良い。他の科目だと少なからず怒られる可能性が発生するからな。

縫がストップウォッチを手にタイムを謀る準備を始める。

そして、眠るッ！

「……０．９２秒！　那癒の勝ち！」

僅差での〇太くんに勝った。

『おおー』

『流石赤羽だな、俺達に出来ない事を平然とやってのけるッ！』

『そこにシビレる、憧れるぅ！』

私が眠る瞬間何故か教室が湧く。理由は知らないし、興味がない。

「ええー、そもそも四之宮というのは……」

「ふぁ～～」

無駄に目が覚める。眠いが。

歴史の授業？　つまり、今は四時限目という事になる。寝すぎた。

まぁ、いいか。

私は社会科教諭の声を子守唄代わりにして眠る事にした。

眠りの体勢に入る。

縫スタンバイ。

そして、眠るッ！

「……０．９４秒！　那癒の負け！」

今度はの○太君に負けた。

『くっ、の○たラインは厳しいな』

「おい、お前等、あんまり話聞かないと『赤羽ライン』取るぞ」

『……』

教師の言葉で静かになる。何を言ったかはわからない。興味無い。

「……で、やはり先生はかまぼこ派かな？」

『ははははっは！』

「な、何だ！　何が起きていたんだ？　くっ起きていればよかった。話の内容がやたら気になる」

驚き目を覚ます。クラスみんなの笑い声。一体何があったんだ？

「キーンコーンカーコーン」

チャイム。授業終了の挨拶をして昼休みに入る。

「那癒、お昼食べよう」

「あぁ、そうだな。ところで縫、さっきあの先生は何を言っていたんだ？」

「ああ、聞いてなかった。考え事してた」

「そうか、ならいい」

最近縫は考え事をする事が増えた。深く追求する事は地雷を踏む様なものだ。ていうか、踏んだ。この間は不発弾だったけど、今度踏めば必ず死ぬ。骨も残らない勢いで。

私は母が作ってくれた弁当箱を取り出す。私と同じくらいの歳の時に夜の獣との戦いで足を負傷してからずっと車椅子生活を送っていて、料理ばかりしていたという腕は伊達じゃなく、栄養バランスも見た目も良いものだった。

――という夢を見た。

現実は厳しい。

残酷だ。

酷い。酷すぎる。

弁当の中に入っているのは暗黒物質。犬の餌？　そんな言葉で表現したら犬に失礼だ。犬だって食べるものは選ぶ。

「……な、那癒の弁当って前衛的ね……」

無理な作り笑顔。顔が引きつっていて額から汗が噴出している。てか、料理に前衛的とかあっちゃいけないと思う。安定した味が欲しい。

それにしても偉いな、縫は。私だったら「何それ、テロ？」とか言ってしまいそうだ。

テロはまだ良い。やり方は少しアレだが一応目的がある。これは無邪気の産物。悪意が無い。それがまたタチが悪い。

普段の母の行いは悪意に満ちたものだが、こればかりは違う。母は料理の不適合者だ。

だが、学校があるときはこうして毎日弁当を作ってくれる。毎回処理に困るが……。

夜の獣に罠として使った事もあった。こうか　は　ばつぐん　だった。

「いい加減慣れろ縫。もういいいぞ。毎回縫がそう言ってくれるだけで私は感動して涙でが出るぞ」

この弁当を食べていると、涙腺が緩くなる。

「縫の弁当にはいつも駄菓子が入ってるな」

ごはんにはふりかけの代わりにう〇い棒を粉末にしたものが入っていた。今日はたこ焼き味だった。

いいなー、と正直に思う。

「食べる？　あるけど」

鞄から駄菓子を大量に取り出す。質量保存の法則は何処へ行った？　鞄の量を超えた駄菓子が出てくる。

「ありがたい。ふわぁぁああ」

私は手で口を押さえる事もせずにあくびをする。

「そんなに眠いの？」
「眠い」
「夜更かししてるからじゃない？」
「仕方ないだろ。そういう縫はいつも何時に寝てる？」
「寝てないけど」
「はっ？」
「一週間に二回。基本的に土日ずっと寝て平日は寝ない」
「早死にするぞ」
「大丈夫。そこら辺は薬で……」
「うわぁ、問題発言。流石ヤクザの娘。私が夜寝るのが遅いのは仕事の関係で」
「でも、那癒のお母さんは授業中一度も寝なかったって聞いたけど」
「うっ、そこを突かれると痛いな」
母が学生の頃は完璧超人だったらしい。同じ生活を送っていても母は優秀だった。
私と縫が仲が良いのは、母親同士が友達だからだ。今でも良く親子ぐるみで遊びに出掛ける事も多い。
伝説の魔導師と天才掃除屋。私達の親は一部で伝説になっている。縫の母さんなんてミレミアム１３解いた伝説の魔導師だし、母もとんでもなく危険なコードを使いこなしてた。あのインパクトシリーズを。
それは実感している、体感している。アレは無いわ。心から感心する。どうやってアレを使いこなしていたのだろう。
「この駄菓子うまいな」
「そうね～。駄菓子って毎日の様に食べてるけど飽きないのよね～」
「その割には腹回り変わってないな」
「体質体質～♪」
「……体重は増えてるがな。去年比で一・二キロって所か。私の魔眼が火を噴くぜ」
「ナンノコトカナー」

棒読みだった。
「適当に言っただけなんだが……案外当たるものだな」
「もう」
「縫なんて太ってしまえ。肝心な所にだけ脂肪が集中してる」
「へっ何？」
「何でもない」
縫には皮肉も通じない。可愛くないヤツめ。
私の胸回りももう少し増えてくれることを希望してる。身長は諦めた。
「最近仕事どう？」
珍しいな。縫が私の仕事に興味を持つとは。
「う～ん。最近はブラックアウト症候群のせいで同僚がバッタバッタ倒れてね、なんと！　陽ノ宮の掃除屋は只今私一人だけです。まぁ、私の担当区域の話だけど」
「それって大変なんじゃ……」
「問題ない。私を誰だと思っている。那癒多様だぞ。そこら辺の雑魚に負けるものか」
一瞬縫の目が私の見た事のないものになった。
いや、見た事がある。あの日の陽ノ宮ランドで見た目だ。悲しい目だった。
誰かと死に別れた様な、そんな切ない表情をしていた。
「そう……よね。那癒はいきなり消えたりしない、よね。じゃあ、約束して。絶対に無事で帰ってくるって」
「ああ、約束だ。だから、もっと駄菓子くれ。戦う前に餓死する」
縫のその顔を見て私は思う。
……何だかな、縫の心配する顔は見たくないんだな、これが。
大丈夫、私は負けない。どんな敵にでも絶対に負けるわけにはいかないんだ。
今この街のこの地区を守れるのは私しかいないのだから。

「ただいま」
「お帰り」
私が帰宅して開口一番母に言った事は弁当の件だった。
「母よ、弁当は……料理は作るなと言った筈なんだが。気持ちはありがたい。
が、死ぬ。戦う前に死ぬ」
「いつも残さず食べて来るじゃない」
「食材に謝ま……何だ、それ？」
いい香りがする。とても良い香り、食べ物の……。
「ピザだけど」
「いや、何でピザがここに」
「お腹減っちゃってさ～」
「母よ、私には暗黒物質で、自分はピザか。良いご身分だな。しかも掛かっている金額はほぼ同じ……ふざけるなよ！」
「まぁまぁ、那癒多の分もあるから」
「くっ」
駄菓子の食べすぎ及び、暗黒物質による胃の負担で食欲が無い。
失敗した失敗した私は失敗した駄菓子など食べなければ良かった。
弁当も大人しく捨てるべきだった。
失敗した失敗した私は失敗した。もし、過去に戻れるなら弁当は食べるな、駄菓子は控えるように伝えよう。
「後で食べる」
私は自分の部屋に向かい睡眠を取る。夜に備え仮眠。胃のダメージがでかい。胃に穴が開いてるんじゃないか？　比喩じゃなく本当にそう思った。
「光速治癒」
胃の痛みが治まる。
「待てよ！　本当に胃に穴が！」
暗黒物質は胃を溶かす。記憶しておこう。

「母よ、目覚めた。さっきのピザ……」
仮眠を終え、部屋を出る。良い感じで空腹感が湧いてくる。
「ざ、残念ながらピザはお亡くなりになりました。羽根を生やして天国に……」
「口元についたケチャップとチーズを拭いてから言うんだな」
「……まぁ、いい。駄菓子食べる」
「私にも頂戴」
「ピザ、トッピング暗黒物質でも食ってろ！」
私はポケットに入ってる駄菓子を取り出し口に放り込む。
ここ数週間で一番おいしかった。
「行って来る」
戦闘服に着替え外に出る。さぁ、戦いだ。きっと母より手強い敵はいない。そう考えれば楽勝だ。

私の夜が始まる。

今日の獣の出現予想場所は陽ノ宮森林公園。ちなみに夜の獣の体は魔力の塊なので、家にある探知機（レーダー）で場所を特定出来る。夜の狩猟者のホームページでもわかる。
便利な時代になったものだ。
私は携帯からそのサイトをいつも見ている。家のヤツは最近故障気味で正確な場所を割り出してくれない。直す余裕も必要も無い。
「さて、今回の獣は～？」
どっかのクイズ番組みたいに大声で叫んでみる。結構この声で獣がこっちに気付いてくれる事も多い。
「ガァァアアアアアアアアアア！」
「あ～やばい。今回は単純に強いタイプか」
今回は熊がベースとなった夜の獣っぽい。わかりやすくて結構。
距離を取る。二メートルは離れてないと怖い。即死及び心臓の負傷が私の敗北（＝死亡）条件だ。

「グゥゥゥルゥゥゥゥゥゥウゥウゥァアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

熊型の獣が腕を振り落とす。距離があるから安心していたが、違った。

切り裂いた空気によってかまいたち現象が発生している。

咄嗟にかわす。すると、背後にあった木が真ん中から裂ける。

「……」

理解するのに数秒かかる。

「ひぃぃぃいいいいいいい！」

理解する。恐怖のあまり情けない声を出す。結構太い木だった。

この森林公園の木は平均樹齢百年の木がずらっとある。細い若木じゃない。百人乗っても大丈夫な強度を持つ。その木が真っ二つに裂けた。

~なゆたちゃんの敗北条件変更のお知らせ~
・傷を受けても治癒出来る。→当たれば即死。

私の利点が潰された。

「あれ？　今回マズくね？」

今思えば縫とのあの約束は死亡フラグだったのかもしれない。

取り敢えず、木々に身を隠す。もっと距離を取らないと。

「グルゥァアア！」

夜熊は私の気配を察知してかまいたちを放ってくる。

「マジで？」

急いで回避行動に移る。私がいたのは大樹の上。木登りは割と得意だ。木から木へ飛び移る。

「ほわっつ？」

目測だけど、五十メートルは離れていた。それでも尚、大樹は真

っ二つになった。
「どうする？　私？」
逃げちゃおうか？　いや、逃げちゃ駄目だ。どっかのアニメの主人公も言ってたじゃないか。境遇は違うけど、自分が戦わないといけないっていうのは同じだ。
でも、どうしよう？　あれは一発じゃ倒せないだろうし、困った。気配を察してくるというのがやっかいだ。
……待て、気配？　それだけ高度な知能を持ってるならいけるかもしれない。夜熊は無差別に攻撃はしてこなかった。狙いを澄ました。
なら、それにかけるしかない。
私は木から降りて夜熊と向かい合う。
「ＳＰＥＬＬ　ＣＯＤＥ：ＩＭＰＡＣＴ『？』！」
私が殴ったのは地面だった。
「グラァァァァァァァァァ！」
夜熊が叫ぶ。地面を殴った事により、砂が舞い散る。視界は砂で遮られた。夜熊は魔力を感知したわけではなく、動くものに反応しているはず。そうでなければ本格的に私の負けだ。
だから、目を封じれば良い。
「グラァァァァァァァァァ！」
それでも、まだ危険だ。だから、もう一手必要だ。
「ゴォオウウウウウウ、グラァァァァァァァァァァァ！」
夜熊が狙いをさだめ、腕を振り下ろす。かまいたちが発生する。
かまいたちは命中する。
それは、私が視界を遮り、作ったもの。『大木』だった。
インパクトのコードは何も相手に直接当てるだけのコードじゃない。衝撃を伝える事が出来る。そう例えば地面を経由して、木に衝撃を伝えるような事も。
夜熊が当てたのは打ち上げた大木。

「高速治癒、ＳＰＥＬＬ　ＣＯＤＥ：ＩＭＰＡＣＴ『？』！」
右足に付けたコードを発動する。その衝撃により加速し、瞬時に間合いに入る。
「らぁあああああああああああああああ！　インパクト『？』！」
左、右のコンビネーション。嫌な感じの音を立てて骨が折れてゆく。それでも倒れない。
「私にはまだ”左足”がある！」
左足のコード発動。蹴りが夜熊の顔面を直撃する。それにより夜熊は吹き飛ぶ。木々をなぎ払いながらも吹き飛ぶ。
四肢が悲鳴を上げる。
でも、夜熊を倒したか確認しない限り、声を上げるわけにはいかない。隙を見せるわけにはいかない。ヤツらはしぶといのだ。
「高速治癒、開始」
数秒で骨が再生する。視界がクリアになる。そして、夜熊が完全に消滅した事を確認する。
手強かった。二匹いたら死んでいた。
……作ってる人間が違う。この獣は完全に殺しに来てる。いままでのとは違う。最近の夜の獣は数だけ多いのとやたら強いのどちらかだ。気を付けないと危ないな。
だが、関係ない。私は負けるわけにはいかないのだから。縫との約束を守るために。

第7話　6月（2）　魔導師の少女と狩猟者の少女の約束（後書き）

文章力の低さがあらわになってますね（汗）
修正も細かくしていきたいです。
前にも書いた気がしなくもないですけど、大事な事なので複数回言いました。いや書きました。

第8話　8月（1）　ごめん

――ごめん

――赤羽　那癒多

8月、夏も末。9月になればやっと待ちに待った秋だ。暦的には。

陽ノ宮も大分涼しくなって来た今日この頃、夜の獣は相変わらず出現する。

夏くらい休めば良いのに。

魔導師も休んで良いぞ。いや、休め。

さて、最近の傾向として数が少ない分強い。殺しにかかる方がほとんどって事。

夜熊の後、様々な獣と戦った。夜虎、夜猿、夜鷹、夜鮫。空中戦、水中戦をこなし、あとは地中戦くらいだろう。心なしか自分の体が強靱になってる気がする。気がするだけだと思うけど。

「インパクト・？」が通じない敵が出ると苦戦を強いられる事になるだろう。幸いなのか今のところは出会った事がないけど。

正直それが一番困る。ただでさえ力の差があるのに攻撃が効かない事態が発生すれば、撤退するか、朝まで引きつけるしかない。日光に当たれば、奴等は勝手に焼け溶ける。ただ、私の体力がもたない。最近の奴等は速くて強い。夜猿戦では、足でインパクトを使うことでの加速を使ってもその速度に対応出来なかった。夜熊戦の時のように、一撃当たれば死ぬとか、そういうの相手に一晩はちょっときつい。だから、無理なんだ。

最近縫は一人で何かを調べているようだ。迷走鬼組も総力を挙げているらしい。試しに訊いてみても何も答えてくれない。きっと地雷なのだろう。

家に帰る。郵便受けには封筒に入った手紙があった。切手もない。直接ここ入れたという事だろう。

汚い字で、「師匠へ　弟子より」とだけ書いてあった。

師匠？　弟子？　取り敢えず母に渡してみよう。母の人脈の広さは侮れない。何で舛琴姉妹とまで交友があるんだ？　意味がわからない。サイン入りのグッズが送られてきた時は流石に「この人何か悪い事してるんじゃないか？」と疑わざるを得なかった。

「母よ、手紙だ。何か師匠へって書いたんだが」

「おおー生きてたか。消息を絶って約四ヶ月。死んでるかと思ったけどそうかそうか」

手紙を受け取るなり中身を開ける。手紙には何も書いてないように見えた。

しかし、母には何か見えているようだった。何か、魔術でもかけて加工しているのだろうか？

「ふむふむ。そうか、ついに本格的に身を隠す事にしたのか。手紙もこれが最後になりそうか。陽ノ宮ランドの件はありがとうございます、か」

手紙は読み終えると消えた。崩れるかの様に消えた。

「流石優秀ね、うん」

「何だったんだ？」

聞かずにはいられなかった。母は「弟子よ」とだけ答えた。

母に弟子がいた事は初耳だった。

何の弟子何だろう？

「ふぁああ」

どういう事だろう。最近太陽が昇っていると眠い。生者に力を与えるはずの太陽が私の障害となっている。月が昇っている時の方が力が出る。もう、死者に奴等に近いのかもしれない。

「ただの昼夜逆転よ。引退して一年位規則正しい生活をすれば元に戻るわ」

「師匠！」

心を読んだ上でのある経験談。無条件に師匠と叫ばずにはいられなかった。

つか、人の心まで読むなよ。

「ちなみに人の心まで読めないから安心して」

読んでやがる。

夜が来る。携帯を開き、獣の居場所と数を特定する。

「ええー多くない？」

うざい女子高生っぽい口調で言ってみた。我ながらきもい。

……そんな事は関係無い。だが、今回は多い。頭おかしい。

「はぁあ、それじゃあ今日も行って来ますか」

あと、一ヶ月だしいっか。

私は夜の街を駆ける。

今回は空き地に反応があった。

空き地とは名ばかりで、ゴルフ場が作られる予定だった場所だ。

その資産家は鷺ノ宮の資産家だったらしく、災害で死んで、計画は白紙に。ただの空き地となっている。

それにしても広い。野球とサッカーとドッチボールとセパタクローを一斉にしても場所が余りそうだ。

「セパタクローしてぇえええええええええええええええーーーーーーーー！」

叫んでみた。

「グワァアアアアン」

案の定現れた。アレは返事として受け取って良いのだろうか？

セパタクロー……したいです。って事なのだろうか？

そうすると早速奴等が涌いていた。

亀の甲羅に蛇の頭。甲羅に翼が生え飛んでいる。

その数ざっと十匹。

「私入れて十一人。サッカー出来るじゃん」

硬そうだ。これはもしかすると効かないかもしれない。まぁ、関係ないけど。

しかし、今回の名称どうしよう。困るな～こういうの。夜亀？夜蛇？

考えたら負けか。　そんな余裕ない。今回は史上初の数だからな。

「先手必勝！　ＳＰＥＬＬ　ＣＯＤＥ：ＩＭＰＡＣＴ『？』！」

気付かれる前に放つ。

「バキッ」

いつも通り自分の骨が折れる音がする。だが、いつもより音が一つ足りなかった。

「あれ、効いてない」

「ガゥゥゥウウウウウウン」

奇妙な遠吠えをしながら十匹の一匹が突進してくる。

「高速治癒完了。大丈夫。もう治癒は終えた。それに、あんな単調な動きなら簡単にかわせる」

動体視力を強化するまでもない。それほどゆっくりな動きだった。

余裕を持ってかわせた。

「さて、奥の手を使う事になるとは……」

私はポケットに入れておいたグローブをはめる。

「ＳＰＥＬＬ　ＣＯＤＥ：ＩＭＰＡＣＴ『？』」。媒介はグローブ。母はこれを主体にして戦っていたという。回数有限、インパクト・？の上位互換。

私が何故これを常に使わないかは理由がある。

それは……。

「喰らえ！　ＳＰＥＬＬ　ＣＯＤＥ：ＩＭＰＡＣＴ『？』！」

夜亀の頭に右ストレートが入る。

「グルゥワゥゥッゥゥゥウワァアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

夜亀が木っ端微塵になる。黒い霧が発散された様に広がってゆく。

「いったぁあああああ、痛い痛いたたたたた！」

私の右手も木っ端みじんになる。文字通り粉微塵だ。
「砕けた」。「折れる」と「砕ける」では治癒速度も違うし、痛みも違う。
ひるまず私は次々と夜亀を粉砕して行く。
「……五匹目、六匹目！」
右手、左手が砕ける。インパクト？の弾数は数えられない程に残っている。
早くなくなってしまえ。諦めがつくから。
……でも、母は「あと百発は放てる」とか言ってたな。
痛覚が麻痺してくれると助かるのだけど、私の身体のは健気にも私に痛みをくれる。
ああ、生きてるんだな、私。
夜亀にも感情というものがあるらしい。目の前で同胞が木っ端微塵になる姿を見て身体を震わしている。
夜熊でもそうだったけど、頭が良いというのも考えものだ。……感情がある、だと？
今までこんな事は無かった。それほど高度な獣を作り出しているってことか？
「あと……四匹……」
息を切らしながら残りの獣共を睨む。
「パァアアアアアアアアン」
「いったぁあああああああああああああああ」
「パァァァアアアアアアアアアン」
「ふっうおおおおおおおおおおおおおおおお！」
骨の砕ける音と夜の獣が砕ける音が混じる。
あと、私の悲鳴。
「あと、二匹……」
「パァァァァァァァァァァァァァァァァァァン！！」
残り一匹。
「キャ――――！」

「！」

悲鳴、それも一般人の声。誰だ？　こんな時間に外にうろついているのは。

四之宮では一定の魔術ランクがないと夜、外に出ちゃいけないっていうルールがあるというのに。

何度となく腕が砕けた事による痛みのよって私は辺りにかける集中力を切らしていたみたいだ。そんなのはどうでも良い。助けないと。

間に合うか？　私は全力で走る。

「インパクト『？』！」

足のコードを発動。夜熊と戦った時の様に加速する。この際痛み等二の次だ。

だが、ヤツも早い。今まで遅さは何だったんだ？　仲間が死によって眠ってた力が目覚めたのか？　厄介な。

「なっ、何その速度？　亀の癖に……」

更に速度を上げて来る。

「グゥルワァァァァ！」

女性に夜亀が襲い掛かる。

「危ない！」

私は女性を思いっきり投げ飛ばす。あそこまで飛ばせば何とか逃げれるだろう。

何とか間に合った、か。

～なゆたちゃんのの敗北条件～

・即死。

・心臓を負傷する事。

心臓、魔術炉。魔術師が魔術を使うための器官。魔術師の生命線。

つまり、

「高速治癒……ははは」私は力なく笑った。「……流石に出来ない

か」

心臓を負傷した魔術師は魔術を使用する事は出来ない。

夜亀の牙が私の心臓を貫いた。他の内臓もまとめて破裂する。

「ゴフッ」

ゲームセット。

口から大量の血。ああ、私死ぬな。ここで死亡フラグ回収か。わらえ……ないな。これは流石に無理か。

「ごめん、縫。約束……守れなかった」

最後に想ったのは友達との約束。

痛みで前進が熱い。何だか、眠くなってきた……な。

徐々に私の意識は薄れ、消えた。

第8話　8月（1）　ごめん（後書き）

これからペース遅くなるかもです

間　章　8月（2）　獣を放つ者

「どういうこと？」

水晶を眺めながら白衣の魔術師は声を荒げていた。水晶に映るのは血まみれの少女。夜の狩猟者の少女だった。

白衣の魔術師は使い魔を至る所に配置しており、自分の”目”として使う事が出来る。

彼女が驚愕したのは、獣の数と戦闘能力だった。

彼女達も獣を放つが、その理由は時間稼ぎ。夜の狩猟者は獣退治の他に、街のパトロールもする。獣退治に専念すれば、研究の邪魔をされにくくなる。だから、あえて、弱い獣を放っている。質より量。数での時間稼ぎ。勝つ事など考えてもいない。

『夜の獣』を放っているのは自分達以外にもいる。そんなことはわかっていた。だが、ただの死体を用いてあそこまでの戦闘力を備えた夜の獣は作れないのだ。

”普通”ならば……

「……おかしい……何か……」

白衣の魔術師は爪を噛みながら考える。小さい頃から、混乱したときは自分の爪を噛み気持ちを落ち着かせるのが癖だった。

魔弾の魔術師、小折玲（こおりれい）はいない。自分たちの邪魔になりそうな人物を捜し、病院送りにいるのだ。小折の手加減は絶妙なもので、実際、鳴海が撃たれても死ぬことは無かった。

静寂が続く。思考するには適した静けさだった。あらゆる可能性を辿る。偶然、突然変異による強化、ドーピングによる一時的強化、神話の生物や妖怪の遺骨でも使ったか……。

何分か考え、一つこ可能性に辿り着く。

「……まさか！」

白衣の魔術師は自分が違法な研究を進めている。
研究には金が必要だ。しかし、堂々と資金提供を頼める訳がない。
そんな事をすればすぐにお縄に掛かる。
だから、裏の組織に情報提供する代わりに出資して貰っていた。
同じく違法研究をしている様な連中に……。
「……資金提供者が獣を放っている？」
自分たちの研究結果の末作った獣は化け物と言うのに相応しい戦闘能力を持っていた。誰も殺したくないから、彼女はその獣を使わなかった。
その戦闘能力は最近見た獣と同等のものだった。だからこそ怪しい。
もし、そんな事を気にしない魔導師がいたとしたら？　人を襲わせる事に何の抵抗もない人間が放っているとしたら……。その責任は間接的にではあるが、自分に降り注ぐ事になる。
（充分に有り得る……止めないと……私のせいでこれ以上犠牲者を出すわけにはいかない）
狩猟者の少女の少女は即死と彼女は判断した。心臓大破。この時点で人間だろうが魔術師だろうが致命的だ。仮に一命をとりとめても、臓器が無い以上どうしょうもない。
（犠牲になったあの子のためにも研究を急がないと……）
白衣の魔術師は焦っていた。しばらく歩き回っていると、研究仲間の小折玲が帰ってくる。
手の怪我は完全に治っていた。
「ただいま」
「おかえり」
「どうした？　落ち着かないなぁ」
冷静に、なだめる様に声をかける。
「どうしよ、私が情報提供したせいで……」
「何があった？」
「まだ……推測の域を出ていないんだけど、もしかしたら私達が情

報を提供した魔導師が夜の獣を放っているかも知れない」
「！　そうか……」
玲は一瞬驚いた表情を見せるだがすぐに、
「わかった。調べてみる。もし、そうだったら狩ってくるよ」
と言い、準備に取りかかった。
「お願い」
「ああ」
すぐに準備を終え、玲が外に出て行く。
玲は「大丈夫。極悪人だろうが殺さないよ」と言って去って行った。
「ありがとう……玲」
白衣の魔術師は、見えなくなった玲に向かって感謝の言葉を述べた。

間　章　8月（2）　獣を放つ者（後書き）

文字数が少ないのは間章だから文字数が少ないのは間章だから……。謎に復唱してました（笑）

参考までにこのサイトの小説や、普通の小説も読むのですが、その度「おもしろいなぁ」と思う前に、自分の語彙力の乏しさを感じます。まぁ、素人に毛が生えたようなものなので、その内上達して書き直せば良いんだ！　と開き直って、更新していきたいと思います。

第9話　6月（3）　召喚師の少女と陽ノ宮の管理者

「数日後、鷺ノ宮（さぎのみや）行って来てくれる？」
朝食の席でいきなり言い渡される。脈絡が全く無かった。さっきまで昨日のテレビの話をしてたのに。
「鷺ノ宮って、私がですか？」
「そうです、祢衣（ねい）ちゃんにです」
鷺ノ宮は今や一級災害地域の一つに数えられるほど混沌としている。そんな所へ行けなんてどういう事だろう。
「鷺ノ宮に知り合いが居てね。ちょっと様子を見てきて欲しいのよ」
「？　人間どころか夜の獣を始めとする化け物達さえ立ち入る事が出来ないのに、人なんているんですか？」
「朱鷺羽咲岐（ときわさきざき）」
「鷺ノ宮管理者の？」
鷺ノ宮の管理者は流れ星を素手で受け止めたとか噂される程常識外れの戦闘能力を持っている。
だから、彼が何をしても”大概の事”は有り得ないとは言い切れない。
「その通り。そして彼はあの災害が発生したにも関わらず、鷺ノ宮から離れず”アレ”と戦っている」
「えっ？」
「そんな、鳩が豆鉄砲食らった顔しなくても」
「でも……、」
でも、それとこれとは別だ。『無限の影』、『黒い炎』と呼ばれるそれは、龍脈の暴走により具現化した魔力の塊。意志を持ったように生気を奪い全てを喰らい尽くす「現象」。スペル・コード研究で解明出来てしまったら史上最悪の殺戮兵器が出来ると言われている。
そんなものと対峙しているという現実がまず理解の範疇を超えて

いた。
「……鷺ノ宮の災害が起きたのって何年も前ですよね」
「そうね」
飛鳥さんは平然と答える。
「そんな昔からたった一人で戦い続けているんですか？」
「そうね」
飛鳥さんは淡々と答える。さも当然の様に。
「そんなのって有り得ないですよ。何か根拠でもあるんですか？」
生きてる根拠がない。それに、私も出来れば生きたくない。あの炎は触れたら最後、魔力が尽きるまで嬲り、死ぬまで焼き尽くす。目的を果たすまで死ぬわけにはいかないんだ。
「これ何かわかる？」
「……スペル・コードですか？　その独特の紋様は」
媒介は湯飲み。湯飲みには朱鷺が描かれていた。
「ほら、ヒビ入ってないでしょ？」
「まさか……そんな下らないコードあるんですか？」
「昔、悪ふざけでみんなで作った。本当にヒビ入るのよ」
要するにこのコード、対象に危機が迫ったらヒビ割れを起こす様になっているらしい。
無駄に必死になっているところを見ると本物らしい。飛鳥さんが嘘を付く時はもっと感情がこもらない。
「で、この手紙を渡して欲しいの」
一通の手紙を渡される。何の変哲もない手紙だ。
今回の私の仕事は手紙を届ける事だった。
「手紙配達ですか？」
「そう。簡単でしょ？」
「まぁ……今までの任務に比べれば」
違法研究をしている研究所の破壊、盗賊団を壊滅……数えればキリがない。
「わかりました。じゃあ、休学届けお願いします」

「ごめんね～、学業優先にすべきなのに」
「まぁ、私の魔術が汎用性に富んだ魔術だというのは自分でも理解してますけど、まぁ直属だからしかたないです」
「ごめんね、本当は私が行けたら、一応管理者だし。何か忙しいし……櫻井に押しつけられたら良いんだけど、有給取っててしばらくいないし……くぅーー」
本当にサボりたいらしい。櫻井さんは管理者補佐官で、いつも飛鳥さんがサボった時の後始末をしてる。飛鳥さんは櫻井さんがいるからサボるわけで、だから、サボれないという訳だ。
代わりがいるからサボルっていうのも少しアレだけど。
魔導師の街、陽ノ宮の管理者、黒陽飛鳥（くろひあすか）。それがこの人の名前。
私の保護者であり、育ての親。今、わたし、葵祢衣（あおいねい）は飛鳥さん直属の魔術師をしている。
だから、学校も休む事が多い。私が飛鳥さんの任務を受けるのは、私の代わりがいないのと、
「大丈夫ですよ。それに――会えるかもしれないですから」
探している人がいるからだ。四之宮のどこかにいるという事だけがわかって
て、もしかしたら鷺ノ宮にいるかもしれない。そう思うと断れない。
「そうね、見つかるといいね」
飛鳥さんは笑いながらそう言った。

――数日後

「これで、よし」
鞄に道具を積み、帽子を被り準備を終える。
「じゃあ、行って来ます」
「うん、いってらっしゃい」
飛鳥さんは私に向かって手を振る。しばらく会えないのか、この人はいつも愉快だから、その分寂しい。

（早めに終わらせよう）
私は心に念じた。

私の魔術は召喚。別の世界から生物、物質を呼び寄せる魔術。
「召喚……来て、鵺！」
私の側に大きな魔方陣が展開される。
魔力で構成された身体は最初粒子の粉の様なものだったが、徐々に形がはっきりしてゆく。
「召喚ニ、応ジ参上シタ」
鵺。虎の様な胴体に、蛇の尻尾の姿をした妖怪。私のパートナー。
それほど高い戦闘能力は持っていない。移動速度も速い方じゃない。
じゃあ、何故私のお気に入りかというと……ふかふかの毛が気持ち良いからだ。体は霊体だから毛も服には付かないし寒い日には重宝する。
戦闘能力だけ高い召喚獣なら沢山いる。それこそ数えられない程に。私が使役している召喚獣のほとんどは、はっきり言ってしまうと戦闘能力は低い。
だけど、対話が出来る程温厚な者が多い。そういった召喚獣の方が詠唱無しで呼べて便利だ。気性の荒い召喚獣だと、詠唱してしっかりと束縛して『使役』しなければならない。
私は召喚獣の事を家族だと思ってるから、あまりそういう事はしたくない。
「鵺、鷺ノ宮へ」
「承知シタ」
私は鵺の背中に乗る。ふかふかもふもふだ。
鵺は走り出した。

陽ノ宮を出てすぐに、鵺は立ち止まった。

「えっ？」
そこに、
奇妙な事に、
”それ”が、
いた、
「ドウイウコトダ？」
『夜の獣』。魔導師の生物実験体。
「今は昼なのに……」
奴等はそこにいた。
「熊の夜の獣？ ……いや、違う。角も、翼まで生えてる」
クマイラかな？ この場合。
「耳ヲ塞ゲ、ネイ」
私は耳を言われるがままに塞ぐ。

『ルゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥウウウウウウウウウウウウウウウ』
空気が揺れる。これは、超高周波？ 危うく鼓膜が破れる所だった。
「クッ……」
鵺は耳からも血を出していた。耳だけではない。この獣の声は全身を蝕む。
なら何故私は今無傷なのだろう？
「ネイ、コノ獣ハ、耳カラ攻撃ヲ経由サセテイル」
「そうか、それなら」
私は思い浮かべた。この獣に対して有効な召喚獣を。
私の魔術が汎用性が高いというのはこういう事だ、あらゆる事態に合った召喚獣を召喚し対応する。いわば、私一人が軍隊だ。
私は、その姿をイメージする。久しぶりに呼ぶから来てくれるかわからないけど、こういう時はやってみるしかない。
「召喚――来て、デュラハン！」

魔方陣が展開され、その中から甲冑の騎士が現れる。顔の無い騎士デュラハン、彼ならクマイラの超音波攻撃は効かない。
「来てくれてありがとう」
「（いえ、大丈夫です）」
召喚獣と私は見えない糸の様な物で繋がっている。そのため、言葉を用いらなくても、会話が出来る。
「じゃあ、お願い」
「（承知致しました）」
クマイラに襲いかかるデュラハン、しかし、クマイラは……、
「そうだった！」
空に逃げた。
「守護結界！」
私は、鵺と自分の周りに結界を作る。これなら、私も鵺も大丈夫だ。

『ルゥウウウウウウウウウウウウウウウウウウ』

咆哮。良かった。デュラハンに効果はない。結界も破られない。やっぱり、耳を通してからじゃないとあの攻撃は無効だ。
「！」
私は目を疑う、クマイラの方の部分から八本ずつ触手が出てきた。その触手は金属のような光沢を放っていた。急降下、デュラハンに襲いかかる。
「――――！」
声にならない驚き。しかし、私には聞こえた。その声が。
「（馬鹿な！）」
デュラハンの剣は真っ二つになり、甲冑も貫かれていた。
「デュラハン！」
「ネイ！」
「わかってる」

この世界での死も彼等にとっての死になる。
「――召還、デュラハン」
デュラハンは光に包まれ、消える。良かった間に合った。
しかし、どうしたものか？　あの機動力、超音波による攻撃、八本の触手。
それに上回る召喚獣なんて……――あっ。
いた。だけど、あの人苦手なんだよなー。
「仕方ないか、召喚、メドゥーサ！」
石化の目を持つ彼女なら、近づくこともなくアレを倒せる。
「あら、祢衣ちゃんじゃない。とぉーう」
呼び出した瞬間抱きつかれる。ちなみに、私も目を見たら石化する。だから、目を瞑る。
「ほうほう、少しは育ったみたいね」
メドゥーサは私の胸を揉みしだきながらそんな事を言い始める。
「何、めぇ瞑ってんの、鵺？」
「オ前ト目ヲ合ワセタラ石化スルカラナ」
「あらら、そうだった。忘れてた」
『ルゥウウウルゥウウウウウウウルゥウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ』
「何、あれ、うるさいわね」
カキン、と音がする。クマイラは喋らなくなった。石化の魔眼が発動した事が目を瞑っていてもわかった。
「さて、今度は何処を触ろうかしら――」「召還、メドゥーサ！」
「ああ、ずるい、もう少し戯れたかったのに――」
本当にメドゥーサは苦手だ。
「行こう。鵺」
「アア」
気を着けよう。注意しないと、今度は死ぬかもしれない。ううん、大丈夫か、私にはみんながいるもの。
不安を切り払い、私達は改めて鷺ノ宮へ向かった。

第9話　6月（3）　召喚師の少女と陽ノ宮の管理者（後書き）

ここらへんから難しいです。書く方としては。
あとで矛盾が発生しないよう慎重にチェックしていきたいです。

第10話　7月（1）　召喚師の少女と鷺ノ宮の管理者

出発してから早一ヶ月。予想より大分掛かってしまった。
何しろ、ここに来るまでに様々な夜の獣に遭遇してしまった。
その度デュラハンやメドゥーサを駆使して倒していった。メドゥーサのお陰で結構体力を消耗した。
鷺ノ宮の入り口。そこに着くと、私はその光景に驚く。
「何、これ？　嘘でしょ……こんな……こんなに、こんなに酷いなんて……」
死臭が漂っている。まだ、入り口だというのに言い様のない負の力を感じる。
これが死んだ者の無念や妄念なのか？　そこにいるだけで生気を吸われているみたいだった。
龍脈の暴走により起こった災害。陽ノ宮でも起こる可能性を考えるとぞっとした。
「ネイ、大丈夫カ？」
鵺は私の不安にしていることに勘づき、声を掛けてくれた。
「うん、大丈夫。ありがとう」
大丈夫、一人じゃない。鵺もいる。
入り口の門を通り過ぎる。
「　　！」
言葉に出来ない驚き。
入って更に障気が強まる。
そこは地獄だった。今までいろんなものを見てきたけど、その中のどれよりも酷く、救いがなかった。
「影」の……黒い影の炎の化け物が鷺ノ宮を「侵食」していた。
あらゆる生き物の生気を奪って、それでもまだうごめいている。
（そんな状況が何年も続いているなんて……）
「ここに人が住めるわけがない」。と私は思った。

もっと召喚しておこう。用心に超した事はない。
「召喚に答えよ、赤鬼、青鬼」
魔方陣が発生し、現れる。
「祢衣ちゃんお久しぶりッス」
「こら！　赤、ちゃんと挨拶しろ……。すいません祢衣様、いつもいつも…
…」
口調の軽い赤鬼に生真面目な青鬼。この二人は何だかんだで良いコンビだ。
ここでの物理攻撃ならこの二人が担当するのが妥当だと思う。デュラハンは消耗しすぎたし、メドゥーサは視覚が無い相手に対して無力過ぎる。
「大丈夫だよ、青。それよりも私の警護頼むね」
「合点承知」
「死力を尽します」
「ハッハッハ、青、お前のその言い方重い」
「ははは、青らしくていいじゃない」
二人も私のお気に入りだ。
鵺に乗り鷺ノ宮の探索を始める。探索を始めて少しして、赤が口を開けた。
「鬼の俺が言うのもなんだが、こいつは酷ぇなぁ。地獄でもまだ慈悲深いぜ」
「私もそう思います。地獄にも希望はあります。そんなに地獄は悪い所ではないのですけど……」
「我モ、コノ様ナ光景ハ、百年前ノ飢饉以来ダ」
三者三様に感想を述べる。この二人と一匹が口を開いたのは、この状況が滅多に無い程酷いという証明だった。
「祢衣ちゃん大丈夫かい？」
赤が声を掛けてくる。私がこの光景を見て、気分が悪くなった事を察してくれたらしい。　何だかんだで優しいな、赤は。

「大丈夫、ありがとう」
「本当かい？　何なら入り口で待ってて良かったんだぜ、俺と青だけでも充分だからよ」
「赤の言う通りです。祢衣様が無理する必要もないのですよ」
「大丈夫。それに、ここにならあの人がいるかもしれないじゃない」
「それを言われるとこっちは何にも言えねぇな。祢衣ちゃんの生きる目的だもんな」
「タダ、無理ハスルナ、死ンデシマエバ、全テハ無駄トナル」
「ありがとう、みんな」
もし、私の魔術が召喚じゃなかったら……。たまにそんな事を考える時がある。私にとって召喚獣は家族。召喚の魔術でなければ、辛くてどうにかなっていたかも知れない。それこそ、

――冷酷な魔術師みたいに。

だから、
「さぁ、行こう」
私は、みんなと一緒に居る事を幸福に感じる。一人じゃない。みんなが居る。だから、何も怖いものなんてな無い。寂しくない。そう思うんだ。
「何これ？」
黒い”何か”が私の方へよってくる。
「あぶねぇ！　鵺飛べ」
赤が叫ぶと鵺もその指示に従い飛び跳ねる。
羽根を生やし、空中に静止する。
人の言霊から生まれた妖怪や幻想種は本来決まった姿を持たない。故にこの程度の事は難しくはない。特に鵺は自らの姿を覚えていないため、他の召喚獣より肉体を容易に変化させる事が出来る。

足元には影。先程見たものとは違う形態で反応が遅れた。そもそも、こんな攻撃的な影をここに来て始めて見た。

見るだけで気分が悪くなる。触れれば『死ぬ』絶対に本能がそう叫ぶ。

圧倒的な「死」というものを具現化したような影。

あれと鷺ノ宮の管理者は戦っている？　馬鹿な。あれは現象だ。現象とは人の手に負えない物の事を言う。あれと戦っているという事は「死」という現象そのものと戦っている様なものだ。

「青、行くぞ！」

「おうよ」

二人は手を空にかざす。すると何もないところから金棒が出現する。私の召喚は彼等の武器も取り寄せられる。取り出すタイミングは任せている。

「赤金鉄・粉砕塵（せっきんてつ・ふんじんさい）！」「青銀鉄・粉砕塵（せいぎんてつ・ふんじんさい）！」

ゴーン、と二つの轟音。影が潰れる。

「赤！」

「どうした、青」

「我等の金棒が……」

「！」

金棒が溶けていた。影は何のダメージも負っていなかった。

魔方陣が発生させる。召還の魔方陣。二人を元の世界へ戻すために発動した。

「っち、しゃあねぇな」

「鵺、祢衣様を頼みます」

「アア」

そういうと二人は消えていった。

仕方ない、呼ぶか。魔力の消費が激しいけど背に腹は変えられない。

「何ヲ呼ブンダ？」

「幻想種を呼ぶ。詠唱に時間掛かるから時間稼ぎお願い」

「承知シタ」
幻想種は私の呼べる中でも最高位の力を持つ召喚獣。
神や悪魔まで幅広く存在し、召喚の対価に魂を請求するものまで存在する。そのため、召喚の際には詠唱に条件束縛の魔術を乗せ、自分の身を守らなければならない。
「地獄の門を叩きて召喚に応えよ。地獄の業火を纏い、駁天（ばくてん）の彼方より来たれ。灼炎幻獣ケルベロス！」
赤鬼青鬼の時とは違う魔法陣。地獄の門番が召喚に応える。辺りが紅く染まる。その幻獣は周りの空間を”炎”で塗り替えてゆく。
「ああ、祢衣か。どうした？」
紅い瞳に鋭い牙。幻獣と呼ばれるのに相応しい姿。あまりの強大な力により
空気が震えている。
「……あの影を焼き払って」
「へぇ……一応聞いておくが、加減はしなくていいんだな」
「いえ、少しは加減して。あと、私に危害を加えたり命令に逆らうような事をすれば……」
条件確認。加減なしで放てば、ここの管理者まで殺しかねない。
……生きて
いるおとは思えないけど。
「わかってるよ。呪術が発生して俺様は氷結の封印術を掛けられるんだろ」
「その通り」
「その歳でよくもまぁそんな恐ろしい術式組んだねぇ。……良いだろう、焼き払ってやるよ」
ケルベロスは口から炎弾を放つ。その攻撃により辺り一帯を焼き払った。全てが灰に還る。この地獄の様な景色を炎で塗り潰した。
「やりすぎたか？　ついでに全部燃やしちまうか？　何かくせぇぞ、ここ」
きっと死体の臭いだと思う。あの影は風化すら許さないらしく、

死体は腐っているのにも関わらず、黒い炎に焼かれた姿のまま残っていた。
「お願い。侵食されてない死体もまだ沢山あったし。死体を放置しておくとあの影に死んでなお侵されそうで不憫だわ。火葬して頂戴」
「地獄の門番に火葬して貰うなんて、こいつ等光栄だな」
空中から鷺ノ宮、死の街を見渡す。
「この人達は幸せな人生を送ったのかしら。こんな死に方したら死んでも死に切れないよね」
この惨状を見てそんな事を口走ってしまった。この地獄の番犬に何を言っても無駄なのに。
「……まぁ、こいつ等は地獄には行ってねぇよ。すぐに輪廻の輪に入ったさ。
だから……幸福な来世を送ってる。この俺が言うんだ。信じろ」
この番犬、私の事を気遣ったのだろうか？　あまり話した事は無いけど以外と良い奴なのかも知れない。
「ふぅ――っ！」
突然身体に疲労がのしかかる。
「ネイ、魔力、ヲ使イスギテイル」
魔力。つまり生命力を一気に使ったのだから当然の結果だった。
「そうね、ご苦労様ケルベロス」
「おう、また呼べや。次からもっと緩い魔方陣で頼むぜ。窮屈でしゃあねぇよ」
「考えておく」
私はそういうとケルベロスを還した。
「ふぅう。疲れるなぁ、幻想種は」
「ムリモナイ、コレダケノ『力』ヲ持ツノダカラ」
「あはは、ちょっと休憩。空中なら大丈夫でしょう」
一瞬の油断。それを「影」は見逃さなかった。
「ネイ、ユダンスルナ！」
『――――――――――――――――』

影は何も出さない。音も気配も。
ただ、そこにある生者の命を奪うために存在している。
鵺が必死に旋回する。
しかし、どういう事だ？　あの影は焼き払われたはずだ。どうして？
「……そうか、だから『無限の影』と呼ばれるのか」
この影はケルベロスの灼炎でも焼き払う事の出来ないものだった。
焼かれた影は炎の影から再生し、やがて作り出していた炎を侵蝕していった。
殺られる。そう思った時だった。
「――黒印」
男の人の声がした。
影は、黒い「何か」によって防がれる。影とは違う何かに。
「黒印、腕部へ」その影は男の人の腕へ這い回る「朱鷺羽流、手刀・椿！」
その手刀によって影は消滅する。ケルベロスの業火さえ焼き払えなかった影を倒したのだ。倒された影がその男の人の中へ入ってゆく。まさか、弱らせて自分のものにしているのだろうか？
その人は私の方に向かって歩いてくる。
『名門』朱鷺羽家の伝統衣装。間違いない。この人が鷺ノ宮の管理者だ。
「そろそろ来ると思っていたよ。黒陽の使いかな？」
「は、はい」
「僕は朱鷺羽咲嵜。朱鷺羽家当主で鷺ノ宮の管理者。君は？」
「葵祢衣です」
「へぇ、葵か。かの魔導師を思い出すなぁ」
「知ってるんですか？」
私の目的は両親……母さんを捜すことにあった。
「詳しく聞かせてもらえませんか？」
父は私が生まれる前に死に、私は母さんを捜すため今まで生きて

きた。そのために色んな情報を集めた。だけど、どれも信憑性に欠ける虚実ばかりだった。

「いいよ」

だが、この人は知っているようだった。とても、嘘を付いてるようには見えない。この人が嘘を付いているならみんな嘘つきだ。そう感じた。

咲嵜さんを追う様に影が集まってくる。

「ああ、そうだね。ちょっと待って、影が邪魔だね」

そう言うと構える。

「朱鷺羽流、奥義・鷺烙印！」

掌で空を切る。それによって放たれる魔力で影が跡形も無く消えてゆく。

影は弱々しくなって咲嵜さんの身体の中へ入っていった。

「すごい……」

「そんな事ないさ。この程度なら誰にでも出来る事だからね」

「そうなんですか？」

「それは良いとして、そうだな、結界位は張っておこう」

そう言うと咲嵜さんは、印を組み始める。

「黒印、形状変化『結界』」

咲嵜さんの身体の黒い刺青が具現化されてドーム型の結界になる。その黒の結界は太陽の光さえも遮る。

刻印魔術。飛鳥さんも使うから少し教えて貰った事がある。魔力そのものを刻印に変える事で魔力を貯蔵出来る魔導技術。

でも、あの黒の刻印は刻印そのものに力が備わっている様に見えた。通常の刻印はそのものに力がない。刻印から魔力に変えて使うのが普通だ。刻印そのもので戦うのが咲嵜さんの魔術という事なのかな？　それとも『影』を操っているからなのか、それは本人に訊くしかなかった。

「暗いけど勘弁してね」

「あ、はい」

「あと、彼、結構消耗してるから一回還した方が良いかもね」
「あっ」
その通りだ。鵺は赤と青との約束どおり私を必死で守ってくれた。
召喚獣はこの世界に存在するだけで消耗する。
「ありがとう、鵺。帰りも頑張ってもらう事になると思う。ゆっくり休んで」
「ワカッタ」
それでだけ言うと、鵺が還ってく。
「じゃあ、話の続きだ」
「はい」
「え～とその前に誰かから聞いた事は？　黒陽とかから聞いてない？」
「はい、飛鳥さんも教えてくれなくて。他に両親を知ってる人もいなくて」
「う～ん、僕が話して良い事なのかな……」
少し悩む、咲嵜さん。聞いた年齢より若く見える。見た目だけなら私と同年代じゃないかと思う。関係ないけど。
「まぁ、核心に迫らなければ大丈夫だよね、うん」
何やら一人で納得する。話してくれるみたいだ。
「お願いします」
「えーとねぇ、鷺ノ宮にずっといた僕でさえ「葵」の名は知っていた。それくらい彼、いや彼等は優秀な魔導師だった」
そこまでは、少し調べればわかる事だ。
「で、優秀過ぎて危険視されていた」
私が知りたいのはこの先、
「危険視？」
飛鳥さんですら教えてくれなかった秘密。
「魔導師の目標とは何だろう？」
咲嵜さんは急にそんな事を語り始めた。
「ミレミアム１３の解かれていない残り七問を解く事かな？　それ

とも、我が名を世界中に馳せる事かな？　君はどう思う？　魔導師の到達点。魔導師の目指す場所とは」

「えーと……」

私は魔導師じゃないから良くわからない。何だろう。

「僕は魔術師だから魔導師の気持ちは理解出来ないけどね、知り合いの魔導師はこう言っていたよ。魔導師の到達点、魔導師の夢。それは生命の掌握」

「……生命の掌握？」

「自由にこの世界の命全てを操る事。創る事も殺す事も自由自在。『生きる』という現象を解明することだ。例えば不老不死。だれも老いたいとも、ましてや死にたいとは思わないだろう？」

「そんな、神様じゃあるまいし」

「それが出来たなら魔導師は神だ。魔導師の目標は神の隣に座る事。神と同等の力を得る事。『葵』はそれを実現する原理を解明してしまった。どうだろう？　そんなものが本当に生み出されたら、この世界は確実に混乱する。そう思わないかい？」

「確かに……」

見えてきた。真実が、そうか……それなら飛鳥さんも話してくれないか。

「例え開発者が悪用しなくても他の誰かが悪用するかもしれない。原理を知っている人間がこの世に居る事は危険すぎる」

「まさか……」

「君のお父様の葵文祢（あおいふみね）がそれを完成させた」

「父さんが？」

「後は……わかるよね？」

咲嵜さんが言葉を詰まらせる。つまり、そういう事。

だから、父さんは殺された。

「枢機卿（すうききょう）……『四之宮』には気を付けなさい。君の命も狙っているかも知れない」

「はい、お気遣いおりがとうございます」
枢機卿、闇に暗躍する機関。本当にあったなんて驚きだった。
母さんが姿を消した原因もようやくわかった。生命を自由に操る事が出来るもの。それがあれば父さんを生き返らせる事が出来る。
「ところで、黒陽から何か預かってない？」
そうだった、そのために私は陽ノ宮から鷺ノ宮に来たんだった。
「あ、はい。咲嵜さん、飛鳥さんから手紙を預かってます」
「ほぅほぅ」
咲嵜さんが手紙を読み終える。本当に読んだのか？　という位の速読だった。
「ちょっと待ってね」
咲嵜さんは紙を取り出し何やら書き始める。物凄い速度でだった。多分手紙だろう。
すぐに書き終え、渡されたのは手紙の数は三枚だった。
「その三枚を黒陽に渡してくれ」
「わかりました」
手紙には、
黒陽へ
咲夜へ
咲炉へ
と書かれていた。名前からして子供さんかな？
「影はあと数年で殲滅できると思う。やっと目処が立ったよ。ついこの間までは終わりのない戦いって感じだったんだよ、本当に」
咲嵜さんは溜め息をつき、感慨にふける。
「苦労が実になって本当に良かったです」
「うん、ありがとう。鷺ノ宮が元通りになったら遊びに来てくれると嬉しいな。案内するよ」
「その日を楽しみにしています。咲嵜さんこど陽ノ宮に今度遊びに来て下さい」

「その日を楽しみにしてるよ。……黒印、解除」
ドーム形の結界を解き、黒い黒印が氏の身体に戻ってゆく。
「じゃあね」
「はい」
「ふっ、」咲嵜さんは飛び上がる。「黒印―黒羽―」
咲嵜さんは黒印を羽根の様に使い、空を駆ける。その姿は悪魔の様だった。
でも、この地獄では、悪魔こそ救世主なのだと私は思う。鷺ノ宮は咲嵜さんがいる限り鷺ノ宮が無くなる事はない。どんな神や悪魔が攻めて来てもきっと大丈夫だ。
「鵺、来て」
鵺を召喚する。毛のツヤが良い。見た限りでは元気そうだ。
「もう大丈夫？」
「アッチトコッチの時間の流レハ違ウ。問題ナイ。充分ニ休メタ」
「じゃあ、行きましょうか」
私は陽ノ宮へ向かった。

第１０話　７月（１）　召喚師の少女と鷺ノ宮の管理者（後書き）

少しペースが遅れました。次の話も急いで書かないと……。
夜に書くと眠くてミスが出来る。朝は起きれないから書けない。この悪循環を破るために、今日も夜更かしです！

第11話　8月（3）　召喚師の少女と魔術師の少女

葵祢衣が陽ノ宮に着いたのは夜の事。もうじき秋になるという時期だった。片道一ヶ月、往復二ヶ月掛かったことになる。
期限ギリギリ。夜の狩猟者の手伝いは9月からだから何とか約束には間に合った。前日になるとは本人も思わなかった。
「鵺！」
祢衣は声をあげる。ある臭いに気付く。鷺ノ宮で沢山の『死』を目の当たりにした祢衣は『死』の臭いに過敏になっていた。
「アア、血ノ臭イダ。ソレモ近イ」
「現場に急ぎましょう」
祢衣は夜の街を駆ける。嫌な空だ。陰鬱な気分になる。
「何も無ければ良いけど……」
祢衣は嫌な予感が当たらない事を祈った。

『グルァァァァァ！』
夜亀が吠える。
辺りには狩猟者の少女と女性。女性は気を失っていて、狩猟者の少女は血塗れになっている。
『グルァラァアアアアアア』
狩猟者の少女はゴミのように捨てられ、夜亀は次の標的に狙いを付ける。
夜亀が女性を襲う。その時だった。
『ガァアアアアアアァウウウウウウウウ！』
その寸前、夜亀は吹き飛ばされた。
「祢衣ちゃん、思ったより早く召喚(よ)んでくれたな」
「ご無事で何よりです」
葵祢衣が召喚した赤鬼の金棒によって夜亀は吹き飛ばされた。
「二人とも、トドメ」

「赤金鉄・粉砕塵！」「青銀鉄・粉砕塵！」
二つの轟音が重なる。空気が揺れる。
最後の夜亀が消滅する。
「祢衣様、犯人の魔導師近いです。どうしますか？」
「追わない」
「何でだよ～」
「この子とこの人が優先」
瀕死状態の狩猟者の少女と女性を鵺に乗せ、病院へ向かう。

＊＊＊

瀕死の少女、那癒多が手術室に入ってから数時間。
深夜の病院の待合室には四人。祢衣、那癒多の母、癒美、那癒多の友人の縫とその母、裁がいた。
祢衣が飛鳥に連絡を取り、飛鳥経由で両家に連絡を取った。
飛鳥や癒美、裁が友人であったのは幸いだった。そのおかげですぐに知らせる事が出来た。
那癒多の負った傷は深刻で、絶望的な状況だった。何しろ心臓大破に内臓破裂。治しようがない。
むしろ、即死じゃなかった事が奇跡だった。
「ひっく、う、うう。こんなのってないよ……」
夜の病院。手術室の前の廊下。そこに響くのは縫の鳴き声だけだった。
「私はこれで」
祢衣が沈黙を破る。素直に悔しかった。あと数時間、数分早く着いていればこんな事にはならなかった。自分を責めても仕方ないとはいえ、自分を責めずにいられなかった。
「あなたどうするの？」
癒美が問い掛ける。
「……私は臨時とはいえ夜の狩猟者ですから。飛鳥さんから頼まれ

た事です遂行します。癒美さんにはお世話になっていますし。それに那癒多さんがこうなったのも私が遅かったからで……」

祢衣の携帯が鳴る夜の狩猟者のサイトからメールだった。夜の獣が新たに発生したらしい。

「だから、せめて獣は狩ります」

「そう、だからってあなた”まで”死なないでね」

「ええ――」「死んでません！」

縫が祢衣の言葉を遮る。

「まだ死んでません。那癒はまだ……まだ……」

「……ごめんなさいね、縫ちゃん。不謹慎だったわね」

癒美の声は何故か軽かった

「何で娘が死にそうなのにそんなに冷静なんですか？」

「何でって言われても……」

癒美の言葉に危機感は無かった。

縫を無視して癒美はとんでもない事を言い始める。

「裁、臓器って作れないの？」

「また難しい事を」

癒美の申し出に裁は肩をすくめる。

しかし、その顔には余裕があった。「難しい」？　不可能では無いと言う事だろうか？

「えっ？」

縫は目を見開く。そう、この状況を打破するには代わりになる臓器が必要となる。

「まぁ、出来ない事もないけど」

「けど？」

癒美は首を傾げ訊く。

「生きていれば、何とかなるって意味」

「何だ、なら条件はクリアね」

「命、なんとか繋ぎましたよ」

医者、須久井衛（すくいまもる）が手術室から出て来た。
「「えっ？」」
縫と祢衣は驚愕する。心臓大破、内臓破裂。どう考えても助かる状態ではなかった。
「流石ね、須久井の医者の腕は」
「ふぅ、ここまでは予想通りね」
それを救ったのだ。
須久井衛、陽ノ宮で最も優秀な医者。生きていれば命を繋ぐ医者。過去、那癒多の母癒美も須久井衛の父親に世話になった事がある。親二人は手術の結果に驚かなかった。むしろ必然だったという感じで須久井の報告を受ける。
「驚くなよ、衛は四之宮の四人の名医の一人なんだぞ」
「アイ、今から説明するから黙って」
「はーい」
助手の少女は衛にあっかんべーをして走り去った。
「処置完了しました。あの出血量に心臓の損傷。正直駄目かと思いましたが延命魔術が掛かっていました。着ていた服が一時的にですけど臓器の役割果たしてたみたいですね」
延命魔術とは、そのままの意味で、命を繋ぐ魔術。即死を避け、治療を受けるまで延命を施す魔術である。
「はいはーい。犯人は私です」
裁は手を上げ説明を始める。「あの服って特注でね。何かあった時のために”作ったコード”を仕込んでおいたの。もっともそれが癒美の娘のために使われるとは思わなかったけど……」
今、あっさりととんでもない事を言った。この母親は化け物だ。コードを”狙って”作った。計算とかそういう次元ではない。神の領域、自分の起こしたい現象の作り方を理解しているのだ。そうでなければ今の状況はない。
「ちなみに癒美が昔入院した時に埋め込んでおいた。まさか、その

まま引退するとは思わなかったけど」
「やっぱりね、そんなものを服に？」
「ちっ、勘づいてたか。まぁ役に立って良かったわ」
「母さんの……お陰なの……？」
今那癒多が辛うじて生きているのは母のお陰、それは理解する。
だが、まだだ。まだ助かるというわけではない。
「母さん、じゃあ臓器作れるよね、生きてるんだから」
「問題はここからよ」
癒美は重い口を開く。
「那癒には麻酔が効かない。そういう体質なのよ。ところで先生、麻酔は使えましたか？」
「いえ、使ってません。効かない事に驚いて麻酔との相性を調べましたが本当にこんな体質があるんですね。まさか、麻酔が効かない体質なんて」
「それじゃあ、もし臓器を作っても手術出来ないんじゃ……」
「手術の途中で目覚めてしまったら激痛が彼女襲う。即死クラスの痛みが」
「どうしたら……」
裁は淡々と語る。それは縫にとって重すぎる内容だった。
「ミレミアム１３未解明の問題の一つ。時を止めるコード、―完全時間制止―。縫、私は臓器を作る。だからその問題を解きなさい」
「時間を止めるコード？」
ミレミアム１３未解明問題―完全時間制止―。存在は理論的に証明されたが、その問題を解いたものは未だ存在しない。今まで多くの魔導師がこれに挑み絶望した。
――この問題に解は存在しないのでは？
そう囁かれる程だった。
裁が縫に話した内容はそういう事だ。多くの魔導師が解けなかっ

た問題をこの短時間に解き、さらに適合物質を見つけ出せと言ったのだ。

「そう、それなら手術中に目覚める事はない。那癒ちゃんの時間を止めてる間に手術が出来る。しかも、時を止める事で、手術も簡単になる」

「でも、私に解けるかな？　ミレミアム１３なんて……」

「あんたがそれを作れなかったら那癒ちゃんは死ぬよ。あの腹黒女がアンタを挑発したのはそのためだと思いなさい」

癒美は笑みを浮かべる。自分がわざとあの様な発言をし、それに対し、栽が理解していたことに。

「解きなさい縫」

縫はもう泣いてなどいなかった。目には決意の炎を燃やしていた。

「……わかった。先生、紙と書くもの下さい」

「えっ？」

「計算をします」

衛が紙とシャーペンを渡すと物凄いスピードで計算を始める。

「さて、作りますか。えーと、この臓器を作るための魔力配列は……」

縫は魔導師達がミレミアム１３に挑む専門誌『１３フライディ』を開く。常時持ち歩いているが、こんな時まで持っていて役に立つとは夢にも思わなかった。

「迷走鬼さん」

衛は思わず尋ねる。

「はい？」

「もしやと思いますけど、何問解きましたか？」

「ミレミアム１３？　ああ、四問だけよ」

「あの噂は本当だったのか……」

伝説の魔導師の伝説を確認した衛。

彼女は解かれている問題の六問の内、四問を解いてしまった事により伝説となっていた。

「裁、助かったわ」
「あんたには大きな借りも負い目もあるしね。旦那の事とか足の事とか……」
裁は癒美の足を見ながら呟く。
「……じゃあ、私は今から臓器の製造に取りかかるから」
「よろしくお願いね」
迷走鬼の、二人の親子の戦いが今ここにに始まった。

◆

「私がすべき事は結局これしかないのよね」
夜の街を葵祢衣は歩いていた。街灯と月だけが街を照らす。
今日の月は死者にとって、夜の獣達にとっては最高の月だった。
力が無限に湧いてくる。夜の狩猟者では手に負えない場合、魔術自衛軍（ガス）が動く。それ程の規模の獣達が湧いていた。
場所は陽ノ宮海岸。出現場所を見た祢衣は思わず笑ってしまう。
「加減をする必要がない」と。ここならば、他に人も居ない。存分に戦える。「あの」召喚獣を召喚（よ）べる。
サイトの夜獣マップは赤く染まっていた。見るまでもない。目で確認できる。
深呼吸。手を構える。今回の召喚獣は、今まで召喚してきたのとはわけが違うのだ。
「……召喚、天に臨む龍の煌き、轟く事大地のごとし、囁くは冥王の歌声、飛翔するは神風、破格の規格を持って君臨せよ、龍神王サイフォス！」
祢衣が召喚したのは召喚出来る中でも、いや存在する召喚獣の中でも最強の召喚獣。クラスＳオーバーの最強の幻獣。龍神王サイフォス。

人の様な姿をしているが、それはこの星に合わせているためである。本来の姿で降臨すれば、この星に影響を与えてしまうのだ。

「祢衣か、久しいな」

「はい、王様。どうか私に力をお貸し下さい」

祢衣は最高位の敬意を払い接する。相手は王族なのだ。無礼な事は出来ない。

「良かろう。今のそなたの目には為せば成らぬという決意の意志が宿っておる。全力を持って応えるとしよう」

病院から出て行く時に縫に渡された五本の瓶。「ＳＰＥＬＬ　ＣＯＤＥ：ＲＥＣＯＶＥＲＹ」。魔力回復効果を持ったコード。

幻想種クラス。ケルベロスやサイフォスになると常に祢衣から魔力の供給を必要とし、魔力が蒸発するかの用に消費される。

そのため、サイフォスを使うには膨大な魔力が必要となる。祢衣は朱鷺羽咲夜と同じく魔力消費の欠点をコードによって補ったのだ。

魔術自衛軍（メイガス）に認められしコードの力は伊達じゃ無かった。

「来ます」

夜の獣が特攻してくる。今度は夜亀の時の様に十匹等ではない。百……千……万、数え切れない量の夜の獣がいる。

「王の前で無礼である。散れ！」

サイフォスが指を鳴らす。

パァーン、と乾いた音が響く。獣達が破裂する音だ。

指を鳴らし夜熊の様な攻撃をしたのだ。威力も範囲もその比では無い。

「ふん、喰らうが良い。王天の歌声！」

高らかに歌う王。その歌は空気を振動させる。歌声により身体の素子を分解する。夜の獣の体は魔力で構成されている。王はそれを空気の振動によって崩している。

「天界より舞い降りよ、あの悪魔の微笑みをもう一度、キャメロット」

もう一体の召喚獣の召喚。流石に身体への負担は大きい。
小さな魔方陣が展開される。
「祢衣お嬢様どうしました？」
小さな妖精の姿をしている召喚獣。戦闘能力は無いが、その感知能力は祢衣の召喚出来る召喚獣の中でも随一だ。
「こいつらを放っている魔導師を探して」
「承知いたしました」
キャメロットが姿を消す。
「祢衣、殲滅する。魔力喰うぞ。存分に備えろ」
「良いよ、放って！　出し惜しみはしない！」
一気に四つの瓶を割り発動する。
「ＳＰＥＬＬ　ＣＯＤＥ：ＲＥＣＯＶＥ　！」
それでも一瞬で蒸発するかの様に魔力が尽きてゆく。
祢衣も一応刻印魔術を使える。全刻印を魔力に変換する。
「刻印変換！　行けます！」
「龍翼喝采、破滅の光！　龍覇導！」
閃光が獣達を消し去ったのだ。全ての夜の獣を殲滅する。
刻印を全て使い切る。サイフォスをここまで酷使したのは初めてだった。
同時にキャメロットが感知を終え帰って来る。
「あ、あの……」
「どうしたの？」
「申し上げ難いのですが……感知……出来ませんでした」
「どういう事？　あなたが見つけられないなんて」
「私が感知出来ないとなると余程の魔導師となりますよ」
「陽ノ宮にそんな魔導師が……あ！」
そう、祢衣には心当たりがあった。一人だけ、陽ノ宮にキャメロットが感知出来ないような魔導師を、生命掌握の研究をしていた魔導師を。
「母さん……なの？」

祢衣は虚空を見上げ空に問い掛ける。

「さぁ、どうでしょう」

問いに答えたのは左手に銃、右手にナイフを持った少女だった。

第１１話　８月（３）　召喚師の少女と魔術師の少女（後書き）

やっと四人出せました（・ｗ・）
これからも誤字脱字があったり、表現がわかりにくかったり矛盾が発生したり……ｅｔｃ
何かあれば気軽に教えて下さると助かります。

間　章　8月（4）　魔弾の魔術師と可哀想な人

魔弾の魔術師、小折玲が外に出て驚愕した。
「何だ……あれ？」
海岸の方に大量の夜の獣。もはや一つの大きな生き物の様にも見える。
普段表情を崩さない小折も思わず驚愕する。
「やばいな、しかもなんでここにあの子が……」
そこにいるのは召喚師の少女。
「非行だったら良かったんだけど……」
自分でも良くわからないことを口走っている事は理解していたが、それでも声に出さずにはいられなかった。
「母親に似たか……。急がないと。キャメロット出される前に始末しないと……」
キャメロットの感知スキルなら、自分もあっという間に見つかることはわかっていた。
玲は近くのビルに入る。階段を使い、屋上へ向かう。
「ちっ」
屋上へのドアは当然の様に鍵が掛かっていた。
「ばーん」
玲は指で銃で撃つようなポーズを取り、効果音を付ける。

『バーーーン』

扉が吹き飛ぶ。
魔弾の魔術師の玲は例え銃が無くてもこの程度の能力を発揮する事が出来る。
屋上に出る。「うん、良い見晴らしだ」
絶景。夜の街は美しかった。あれらを除いて……。

背負っていたケースから銃を取り出す。
魔導機銃ハイル１９４８。玲愛用のスナイパーライフル。普通の魔導機銃は、使用者の魔力を放つことしかできないのに対して、このライフルには他の魔導機銃には無い機能が三つほどがある。
一つ目は、魔力収束機能。使用者の魔力を収束する機能。これにより、銃無しの魔弾攻撃よりも数倍威力を上げる事が出来る。自分の力量を超えた力を発揮出来るという事だ。
二つ目は、魔力集約機能。大気中に漂う魔力を集め、玲の魔力に変換することが出来る。ただ、その魔力集約量は微々たるもので、普通の場所ではあまり意味を成さない。
三つ目、魔力探知機能。二つ目の機能と関連するが、この銃には魔力を識る力を持つ。大気中の魔力を測る事で、玲に辺りの情報を伝える。第三の目とも言える機能である。
「さて、始めるか」
ハイルの弾倉に魔力を込める。実弾を込めるとさらに殺傷性が増すが、殺すのが目的で無い以上、必要ない。
だが、玲は実弾を込めた。
『　　』
音は無い。発生する筈の音は玲が魔術で消す。ハイルにももちろんサイレント機能はあるが、念には念を押すのが玲の信条だった。
「ちっ、魔導師め、私に気付いたか……」
自分が相手の範囲内に居たのは幸いだが、自分まで狙われるのはあまり好ましくない事態だった。何しろ、玲は遠距離タイプの魔術を得意とするからだ。
だから、こちらに来る夜の獣を一匹残らず撃ち落とさねばならなかった。
銃弾には残りがある。耐久に優れていそうなものに弾を使う。
「――っ、キリが無い」
（こんな事していても意味が無い。さっさと犯人を捜すそう）
心の中でそうつぶやき、ハイルに意識を集中させる。

（うるさいうるさいうるさい）
夜の獣がノイズとなって玲の邪魔をする。
（もっと集中しないと……）
意識を集中、感覚を尖らせる。
（……いた！）
玲はハイルの照準を合わせる。
「喰らえ！」
打ち出された魔弾は空気を裂き、魔導師の左胸に直撃する。痙攣を起こし倒れる。これで、しばらく目覚めることは無い。
「さて、もう一仕事だ」
逃げる様にビルを下り、犯人の元へ向かう。
「……こいつか」
いかにも研究者の下っ端のような男だった。大きな黒縁眼鏡の男がそこに倒れていた。
「さて、所属組織は、っと」
白衣のポケットを探ると面白いように手帳が出てきた。
「……はぁ？」
その内容は日記だった。

駄目だった。一流大学の連中が待遇される。そのせいで、目当ての会社に就職出来なかった。

ようやく職に就けた。少し妥協したが、無職よりマシだ。親に不安をかけるわけにもいかない。……両親喜んでくれたな……。

この職にも慣れてきた。嫌な上司が居るけど、それを抜けば最高
の職場だ。
意地をはらないでこの会社に入って良かった。

両親が交通事故で亡くなった。

嫌な上司に横領の罪をなすりつけられて首になる。殺したい。殺
してやりた
い。

無職になった。うじうじしていてもしかたない。明日の事を考え
よう。

就職活動を繰り返すが、横領犯の烙印が押されているため何処も
雇ってくれ
ない。おれは何も悪い事をしていないのに

死にたい死にたい死にたい死にたい死にたい死にたい死にたい死
にたい死に
たい死にたい死にたい死にたい死にたい死にたい死にたい死にたい
死にたい死
にたい死にたい死にたい死にたい死にたい死にたい死にたい死にた
い死にたい
死にたい死にたい死にたい死にたい死にたい死にたい死にたい死に
たい死にた
い死にたい死にたい

もう、生きていてもしかたない。もう終わったオレノジンセイハ
オワッタ

死ぬ直前にこの日記に書いておきたいことがある。おそらく、この日記はおれの遺品として扱われる。それであの上司が苦しむならそれで良いか。

さよなら

生きていれば良いことはあるんだ！

縄で首を吊ろうとしていた時、インターホンが鳴った。出ないのも気持ち悪いし、出なかったら出なかったで自殺が失敗しそうなので出ると、「仕事をしないか？」と言われた。喜んで引き受けた。仕事の内容は簡単。決められた日に決められたエリアに夜の獣を放つ事。こんな簡単な仕事で今まで働いてきたのがばかばかしくなる位の大金を貰った。何だが悪い気がしたので、半分は寄付した。実際悪い事をするのだからこれ位しないと駄目だよな。

――

（……）

その日記を見て思わず玲は目頭を押さえる。

（……悪い事したかな？）

「要するに使い捨ての一般人に仕事をさせたか。大金を積めば、口も割らないだろうし、組織の尻尾も掴めない。高等手段だな」

玲はその場を去る。もし目覚めてしまったら同情せざるを得ない。

（……いつか、いや早めにこの事件解決出来るよう尽力しよう）

玲は勝手にそう思った。

しばらく歩くと爆音がした。
「！　……召喚獣！？」
龍神王サイフォスが獣を粉砕していた。
「……まずい、あのままじゃ私もばれる」
（さっきの（可哀想な）人には魔力が無いから一般人扱いされるから良いとして、私の魔力を探知されたら面倒だ）
探知スキルを持った召喚獣ならば、移動用の魔術を使っても痕跡を残す事になる。
「さて、どうしよう」
玲が顎に手を当てながら考えていると、声がした。
『玲、こっち』
「……詩衣？」
声は使い魔から発せられていた。白衣の魔術師の使い魔が玲を誘導する。使い魔に着いて行くと、そこには壮大な魔方陣が描かれていた。
『ここに居れば魔力が遮断されて、玲は見つからない』
「助かったよ」
『いえいえ』
「詩衣、少しやることが増えた」
『何？』
「ちょっとした野暮用だ。だから、帰るのが遅くなる」
『わかった。……玲、何だか優しい顔してるね』
「……っ」
顔を赤くしながら俯く。
「そんな事無い、私は優しく無い。……冷酷な魔術師だ」俯きながらそう語ると、白衣の魔術師はこう、返した。
『そんなことない。玲が冷酷な魔術師なら、私を手伝ったりなんかしてないもの。玲の優しさのお陰で私はここまで来れたんだから』
「詩衣……」
『だから卑下しないでね。私は、優しい玲の事が好きだから』

白衣の魔術師、葵詩衣（あおいしい）は使い魔越しに玲に微笑み掛けた。

間　章　8月（4）　魔弾の魔術師と可哀想な人（後書き）

沢山の人に読んでいただけてるようです。ありがたい。
でも、感想無くてちょっぴり寂しいです。何でも良いので、感想くれれば、作者のやる気が通常の三倍になります。
という事で、感想をお待ちしてます。
（これで、来なかったらどうしよう（ドキドキ

手術後録　8月（5）　魔術師の少女の手荒な自己紹介

「……出来た」

静かに立ち上がり、コードを助手のアイに渡すと、魔導師の少女は緊張の糸が切れたか、睡魔に負け、近くの椅子に崩れる様に眠った。

縫はミレミアム１３を見事解き、裁は心臓を含めた臓器の作成を完遂させた。程無くして那癒多の手術が始まる。

◆

「……手術は？」

「無事成功。縫、良く作り終えたわね」

縫は納得出来なかった。この問題を自分で解いた気にはならなかった。

膨大な資料の中に一つ、ほとんど解明していた人物がいた。それをヒントに縫は正解に辿り着いた。

宮暦１９××年。三國　裁

母の名がそこにあった。母もこの問題に挑戦し敗れていた。

縫は思い知らされた。母の異常さを。自分と同じ歳の母が、ここまで問題の真相に迫っていたとは思わなかった。

母の計算が載っていなければおそらく縫はこの問題を解けなかっただろう。それが不服だったが、この際どうでも良い。素直に解いた自分を褒める事にした。

しかし、苛立ちは消えない。母はこの問題を解けなかったのではなく、飽きた。そんな感じを醸し出していた。

縫は話を続ける。それでも、母が居なければ那癒多は死んでいた。やはり、素直に喜ぶべきなのだ。

「母さんこそ、あんなに素早く作るなんて、四之宮でもそんな人いないよ」

「でしょー？」

謙虚になることもなく、肯定する。

(ここまで来るともう何も言えない)

縫は溜め息を吐き、足を組み直す。

キィキィと車椅子の音がした。

「二人ともご苦労様」

「ああ癒美」

那癒多の母、癒美が二人の前に現れる。

「本当にありがとう」

「ははは、何かくれたら許そう。現金ラブ、私は現金が」「縫ちゃんもありがとう」

「いえ、那癒は私の友達です。出来ることがあるのならするのが当然です」

栽の言葉を遮り、縫に向けて感謝の言葉を掛ける。

「縫ちゃんにはあの子から何か礼をするとして……、」

車椅子を動かし栽の前まで移動する。

「何？　現金？」

癒美は口を緩め、最高の笑顔で「今から栽をびっくりさせまーす」と言い放った。

「私は些細な事じゃ驚かないわ」「えい」

「…………えっ……？　えぇぇぇぇええええええぇぇぇぇええええええ

えええええええええええええええええええええええええええええ

えええええ
ええええええええええぇぇぇええぇぇえぇえぇえええええええええ
ぇええええ
えええぇえぇえええええええええええええぇえぇえええええええええ
えええええ
えええええええええええええええええええええええええええええ！
！」

「え」がゲシュタルト崩壊を起こす程の「え」叫んだ。
ついでに、息継ぎ無しで「え」を言ったギネスが更新された。ギネス判定員がいない事が悔やまれた。

無茶苦茶驚いた。娘でさえ初めて見るような感じで驚いていた。

「お、おめでとう」
「何と、立てるようになりました、…………少し」
縫は密かにそう思ったという。
（……録音しておくんだった）
驚きのあまり足を震わせ生まれたての子鹿の様になっていた。むしろ、栽の方が上手く立てていなかった。
「いやぁ、感謝してるよ。あんたのコードのお陰で私も娘も救われたわけだし。この足に関してはあんたが”創った”足だし。多額の手術費のためにミレミアム１３解いてくれたり、本当にありがとね」
「……べ、別にあんたのためじゃ」
「くっ……くく……母さん素直になったら？　プッ……くくく……」
縫は笑いを堪えるのに必死だった。ていうか、堪えられなかった。
小悪魔的な笑みを浮かべて、いつもと違う母の反応を楽しんでいた。
「はい、そうです。私は癒美の手術費を稼ぐためにあの問題を解きました。これでいい？」
「えええええええええええええええええええええええ！」

今度は縫が驚く。という事は、まさか……。
「母さん、まさか、私に解けって言ったコードって……」
「手術費が足りる事がわかって、途中でだるくなってやめたヤツね。私のあれば解けると思ってね」
「やっぱり。最初は丁寧だったのに最後になってあんな粗末なミスを……」
（悔しいけど、母さんは真の天才か……）
「それより、裁」
「何？」
「最近旦那とはどうなの？」
「……」
「初代弟子が相談に来るんですけど」
「……」
「組全員で来るんですけど」
「……」
「仕舞いにゃ銀君まで恋愛相談持ちかけてくるし」
「銀が？」「銀まで？」
それに驚かずにはいられなかった。
「お母さん、もう父さんも反省してるよ、一回くらい顔見せたら？」
「卑怯じゃない？　二対一なんて」
裁は俯く。そもそも、七対三で悪いのは裁だ。酒に酔った夫をボコボコにしたのだ。……自分も酒に酔って。
衛がこの街に居なければ組長は死んでいた。一方的な暴力……語るのも酷い惨劇だった。
極道の組長が武器ありでも歯が立たなかったのである。
「きまずい」
「か・あ・さ・ん？」
「わかったわよ、その内会いに行きます」
「約束だからね」
「わーかーりーました」

裁はふてくされて何処かへ行ってしまった。
「ところで弟子って何ですか？　他にもいるんですか？　銀もですか？」
「内緒」
何しろ弟子二号は縫の良く知る人物だからだ。あの日消えた探偵。縫の想い人、鳴海縁だからだ。

「動くな、手を挙げろ」
少女は祢衣の首筋にナイフを当て静止するよう命令する。
不思議な事に敵意の欠片も無い。
「召喚獣を仕舞え」
「は、はい」
言われるがままに召喚獣を仕舞う。サイフォスでの精密な攻撃は難しい。下手したら祢衣自信にまで攻撃が及ぶ。
だからと言って新たに召喚する隙もない。
それに、最初から殺す気ならもう殺されていた。
「葵祢衣さんですか？」
「え、はい」
ナイフで牽制されながらの自己紹介はこれが初めてだった。
「ああ、ごめんごめん。ナイフ仕舞う。だから怯えないで」
ナイフと銃を仕舞い手を挙げる。
「自己紹介をします。枢機卿、通称『四之宮』の執行人の二ノ宮絵心です。こころちゃんとでもお呼び下さい。これからよろしくお願いします。葵祢衣さん」

手術後録　8月（5）　魔術師の少女の手荒な自己紹介（後書き）

短めです。キリが良かったので。次の話もお楽しみに！

第12話　9月（1）　あの笑顔をもう一度

今回の任務は生命操作機関通称『歯車』の破壊。アレは四之宮のみならず世界を混沌に陥れないものだ。作れても作ってはいけない禁断の装置。

重要人物、葵詩衣の娘、葵祢衣に接触すれば何らかの手掛かりが掴めると判断した。

「単刀直入に言うと、居候させて貰えませんか？　了承してくれればあなたが探しているあなたの母、葵詩衣さんを探す協力もします」

「母さんを？」

「はい」

「拒否権は？」

「ありますよ」

拒否した場合は共犯と判断。この場で葵詩衣を拉致。人質として使う。一応選択肢はあるんだ。……何かあれば殺せば良い。死体でも充分葵詩衣の動揺は誘える。

「容疑者の娘の近くにいれば何かわかるとの考えですか？」

鋭い。流石と言わざるを得ない。だが、葵祢衣を利用しない手は無い。

「話が早くて助かります。まぁ、私は詩衣さんを犯人だと思ってないんですよ。気分的には同年代の女の子とお泊り会って感じです」

歯車の研究していた主要メンバーは四人。葵夫妻、黒陽飛鳥、小折玲。

小折玲は現在行方不明、葵詩衣も失踪していて足取りを掴めない。なら、二人がまだ研究を続けていると考えるのは自然な事だ。

「飛鳥さんに言ってみます」

「ありがとう」

私は何気無く返事する。

何より、黒陽飛鳥が怪しい。現在陽ノ宮の管理者を務めているの

に経歴に不明な点が多い。『四之宮』が全力を挙げても何もわからなかった。
「こころちゃん、ちょっと良い？」
律儀に提示した通りのあだ名で呼んでくる。そういえばこころちゃんと呼ばれたのは久しぶりだ。周りには執行人しか居なかったし、感情など不要だから馴れ合う事も少なかった。
「どうか……しましたか？」
「頭の黒いの、何？」
「ああ、角ですよ」
平然と答える私。私の頭には角が二本生えている。鬼みたいに天に向かって生えてるわけじゃないく、耳の上の部分から下に向かって生えている。
「ああ角か……びっくりだ」
「まぁ、珍しい事でもないですよ。『四之宮』には変わり者ばかりですよ。吸血鬼とか狼男。大概のものはいますよ」
「へぇー、そーなんだ」
何だこの子。何でこんなに目を輝かせてるの？　わからない。こんなタイプの人間に会った事がないからわからない。何か狙っているのか？
「あと、魔術で違和感を消せるので問題無いです。余程疑り深くなければ気付きませんよ」
「……あっ、これから病院行きますけどどうしますか？」
「ああ、どうぞどうぞ。勝手に付いて行くので」
「……」
「……」
「あのっ」
「何でしょう」
沈黙に耐えかねて話し掛けて来る。本当に何なのだろう？　何が目的で話しか掛けてくるのだろう？
「何でもないです」

「そうですか」
病院に着くまで約三十分、ずっとこれが続いた。何故か葵祢衣はすっかりやつれていた。

◆

病院に着く。こころちゃんとは間が持たなくて気不味かった。自分のトークスキルの低さをこれ程恨んだ事は無い。
「じゃあ、ここで待ってます」
こころちゃんは宣言通り病院の前で待機した。
病院に入ると受付には女の子。須久井先生の助手の子だった。小さい子だな～。某無免許名医の助手を思い出す。
「ああ、何だ、患者さんじゃないのか」
ぶっきら棒な挨拶。ケルベロスと同じ感じがする。
「あの……」
「赤羽さんの部屋なら２０５号室です。あと、出来れば階段使って下さい。エレベーターは患者さんが使うので」
「はい」
忙しかったのか、睨んで来た。でも、全然怖く無かった。むしろ可愛かった。
身長が足りなくて踏み台の上に立っている少女に何を言われても怖い筈が無かった。
言われた通り階段を使い２０５号室に向かう。
「ここかな？」
ノックをして戸を開ける。
「失礼します」
そこにいたのは黒髪長髪上半身裸の少女、

「あ、祢衣ちゃん久しぶり。どうしたの？」

「三岸さん、その反応は違いますわ。着替えてる途中に戸が開いたんだからもっと慌てるべきです！」

と赤髪のツインテールの少女だった。

「だって祢衣ちゃんだよ。可愛いし。女の子同士だから問題無いよ」

「ああ～もう何で私がこんなのと同じ病室なの～」

戸を閉め確認する。

乙０５号室　三岸（みぎし）　御影（みかげ）様　火山（ひやま）　薫（かおる）様

「紛らわしいよ！　って今の私のクラスの委員長と風紀委員長じゃない！　何で入院してるんだろう？」

今度聞いてみよう。今日は外にこころちゃんを待たせているから後日。

……2と乙を読み違えた。

隣の病室のプレートを確認する。

そこには

＊＊＊号室　常緑様

と書かれていた。

中から何か声が聞こえる。かなりホラーな声が。

「……すごい気になる」

私、葵祢衣は怪談とかホラーとかが大好きです。それもあって鵺や赤青鬼を使役しています。
悪い事だと理解するも、怖いもの見たさでドアを開ける。
そこにいたのは金の髪飾りで髪を二つに纏めた深緑の髪の女の子だった。
歳は私と同じくらい、
なんだけど……
雰囲気が違う。
纏ってる暗黒闘気。駄目だ、精神的に参りそう。病んでる。目が死んでる。
「あら、誰かしら誰かしら。どうしたの死にたいの？　ねぇあなた、どうしたの？　どうしてここに来たの？　あなたが私に関わって良いなんて誰が許可したのかしら？　オカシイわね？　オカシイわよね。そう、貴女如きが私の邪魔する事は許されないの。貴女に生きる価値があるの？　どうして生きてるの？
取り敢えず全世界の恵まれない子供たちに謝ったら？　生きててごめんなさいって……」
「すいませんでした！」
ガンッ。ありったけの力でドアを閉める。息を整える。
「ふぅ……よし、何も見なかった事にしよう……もう一回だけ」
もう一度ドアを開こうとする。だが、
「えっ？」
そこにはドアもプレートも無かった。
「こわっ、怖いよ。リアルにこんな体験するとは思わなかったよ」
気にせず病院を探索する事にする。
目的を忘れている訳では無い。決して。
その後もＳＯＳ室、入っちゃ８―４室、ボイラー室、和室、洋室、溶室など
様々な部屋を回った。
「この病院大丈夫なのかな？」

私は一人でツッコミを入れる。キャメロットとか小さいのを召喚してお供してもらうのも良かったかもしれない。少し寂しい。……そもそも、キャメロットにナビ頼めば良かったのか。

今更何を言っても後の祭りだ。今度から気を付けよう。

ようやく２０５号室に着く。

「失礼します」

ノックをして戸を開けると見知った顔。

……とはいえあの夜に一度会っただけであんまり話してない。

「ああ、葵さん」

一番初めに話し掛けて来たのは那癒多さんのお母さん、癒美さんだった。

「無事で何よりだわ。夜の獣は」

「殲滅しました。心配には及びません」

「ありがとうね、ほら那癒も」

「あ、ありがとう」

那癒多さんの手術は無事終わっていた。目が覚めてから魔力の尽きるまで高速治癒を続けた結果、明日にも退院出来るまでに回復していた。

「あれっ？　迷走鬼さんは？」

「家に帰ったわよ。流石に疲れたでしょう」

「そうですか」

「あなたも家に帰って休んだら？」

「……お言葉に甘えて、そうします」

流石にサイフォスの使用は身体に来た。気を抜いたら眠ってしまいそうだ。

「今度改めてお礼させてくれ」

「そんなの良いですよ。では、また」

病室を後にする。少し他人行儀過ぎたかな？　今度からもっとフレンドリィーに接するとしよう。

外でこころちゃんも待たせているし、急がないと。

「こころちゃん、お待たせ」
「いえいえ」
走って外に出ると、こころちゃんはさっきと全く同じ場所に立っていた。
こころちゃんは良くわからないなぁ。何考えてるんだろう？
迷走鬼さんや那癒多さんがわかりやすいだけなのかな？　それじゃあ二人に失礼か。
「これから、私の家に向かうよ」
「わかりました」
家まではここからだと結構掛かる。さぁリベンジだ。さっき気不味かったし。
挽回しなきゃ。頑張れ私、卓越しろトークスキル！

私は歩きながらこころちゃんに質問してみる事にした。
「こころちゃんは何処の出身？」
「秘密でーす」
「こころちゃんって何歳？」
「十七歳です」
「誕生日は？」
「十一月五日」
「良い子の日だね」
「あ、本当だ」
「趣味は？」
「セパタクロー」
「特技は？」
「秘密」
「好きな食べ物は？」
「特に無し」
「……」

「……」
困った、詰まった。何か話題……話題。
「こころちゃんの両親ってどんな人？」
悲しむわけでも無く、笑うわけでも無く。何の感情もこもってない目でこっちを向いて一言だけ言葉を発した。
「両親なら死んだよ。目の前で」
私はその言葉を聞いて何も言えなくなった。完全に地雷だった。

家に着く。すると、飛鳥さんが迎えてくれる。
「お帰り、祢衣ちゃん。色々とお疲れ様」
「はい」
「そっちの子は？」
私は紹介しようとするも言葉が出てこなかった。
「枢機卿、通称『四ノ宮』から今回の事件の調査に来ました。二ノ宮絵心です。居候させて頂きたいのですがよろしいですか？」
「へぇ～良いわよ。沢山いる方が賑やかで良いし」
飛鳥さんはあっさり了承してくれた。
「お風呂入っちゃいなさい、二人共。ご飯作ってるから」
「二人で、ですか？」
こころちゃんは何だか焦っている様だった。
「女の子同士なんだから問題ないでしょ？」
「まぁ……こころちゃん、嫌じゃない？」
「問題ない、よ」
「じゃあ、付いてきて、案内するよ」
飛鳥さんの家のお風呂は凝っていて、小さな温泉宿くらいの大きさがある。
飛鳥さんのお風呂好きは病的で、どんなに忙しくても一日に最低三時間は入っている。……たとえ、仕事があっても。
私はすぐにのぼせるので、飛鳥さんと一緒に入る事は少ない。一緒に入れば決まってのぼせて看病される事になる。で、揉まれる。

「大きいわね」
「飛鳥さん、お風呂大好きだから」
「そこのかごに服入れてね」
「うん。本当の温泉みたいね」
「そういう風に改装したんだって。贅沢の極みだよね」
私達は服を脱いで浴場に向かう。広い。一人で入るには広すぎる。二人で入ってもまだまだ余裕がある。セパタクロー出来る位広い。
「こころちゃん、お風呂好きなの？」
「うん。好きだよ。こんな大きいのは久しぶりだけど」
「なら、今度、飛鳥さんと一緒に入って上げて。あの人寂しがりだから」
「祢衣ちゃんとは入ってないの？　一緒に住んでるのに」
「私、すぐにのぼせちゃうから」
「そうなのか」
「背中洗ってあげるよ」
「うん、ありがとう」
私は石鹸を泡立てて、こころちゃんの背中を洗う。
「こころちゃん、さっきはごめんね」
「いいよ、気にしてないって」
思えば『四之宮』の執行人をしている時点で天涯孤独である可能性は高かった。何て無神経だったのだろう。
この子になら、私の親の話も出来るかな？
「私、両親との思い出が無いんだよね」
背中越しに話しを続ける。
「だから、みんなはどうなんだろう、親ってどういう人なんだろうっていつも考えちゃうんだ」
「祢衣ちゃん？」
こころちゃんは振り向いて私の顔を見ている。
「父さんは死んだっていうのは知ってる。飛鳥さんから聞いたし、有名な事件だったから。私に残された親は母さんだけなんだ。顔も

声もビデオでしか見た事がないけど……だから、会いたいんだ、母さんと」

私があまり人に話したくない事。こころちゃんの踏み入れちゃいけない領域に踏み入れたなら、私も話さなきゃと思った。

「……私の親は、普通の親だったと思うよ」

こころちゃんは急に口を開いた。何か吹っ切れたかのように。

「角生えてるのを除いたら普通の親。特別裕福なわけじゃなかったけど、幸せな家庭だったよ。父さんは寡黙であまり喋らなくて、母さんはいつも幸せそうに笑ってたよ。私は平凡だけど、こんな日々が続けば良いと思ってた」

こころちゃんの表情が険しくなる。

「祢衣ちゃん。鷺ノ宮で起きた災害知ってる？」

「うん」

知ってるもなにもこの間体験してきたばかりだ。あの光景を私は忘れない。

「『無限の影』。私の両親は私を庇って目の前で死んだ。悲しかった。でも、涙は出なかった。何故だろうね？」

母さんとは違う。母さんは受け入れられなくてもがいてる。受け入れまいとしている。

こころちゃんは受け入れた。でも、それだと壊れちゃうからきっと心を殺したんだ。

こころちゃんの「心」は今も死んだままなんだ。だから心から笑えていないんだ。

出来れば、

「はーい、暗い話はお終い」

こころちゃんが心から笑っている所を見てみたい、と思った。

こころちゃんは手を叩くと私の方を向く。

「次は私の番だね」

こころちゃんが悪い顔で笑う。手の動きが怪しい、身の危険を感じる。

え――！　こころちゃんってそういうキャラ？　いや、気を遣ってくれたんだ。きっとそうだよ。
嘘か本当か分からないその笑顔。

――でも、その笑顔は心から笑っている様に見えた。

「覚悟！」
湯船へと走り出す。
「待てぇえええええええ！」
「嫌だよ！」
「うわっ！」
ガコ、と生理的に嫌な音がする。こころちゃんは石鹸で足を滑らせ仰向けに転んだ。
「いっつ――！　……角がぁあああああああ！」
「こころちゃ……！」
角にひびが入っていた。

「飛鳥さん、こころちゃんの角が！」
風呂場から出て、飛鳥さんの所まで駆ける。
「素っ裸でどうしたの？」
飛鳥さんはあくまで冷静だった。……冷静に私の胸を揉んでいた。
「だから、こころちゃんの角にひびが……」
「角にひび？　ああ、大丈夫だって。完全に砕かれない限り再生するから。あの一族は。……まぁ、一応包帯巻いといた方が良いかな？」
どうやら飛鳥さんには角の生えた知り合いが居るらしい。
飛鳥さんはそう言うと救急箱から包帯を取り出し私に向かって投げる。

「ありがとうございます」
「祢衣～」
「はい」
「楽しそうだね」
「はい」
友達らしい友達もいなかった私に友達が出来た。こころちゃんはどう思ってるかは知らないけど、私はそう思ってる。
またあの笑顔を見たいから、私は頑張ろうと思う。

第12話　9月（1）　あの笑顔をもう一度（後書き）

次から、学校パートに入る予定です。どうぞお楽しみに！

第13話　9月（2）　『わたし』の涙

あれから数週間、縫達はすっかり元の生活を取り戻していた。
那癒多もしばらく休業。普通の生活を送る事になった。
「ぐかぁあああああ」
授業が終わり「はっ！」
那癒多は目覚める「ふぅあぁあぁあ」大きなあくび、もちろん口を手で隠す気などない。
「那癒、夜仕事してないのに寝てるってどういう事？」
「ちゅ～やぎゃくてん……だ」
寝ぼけた声で返事をする。しかし、その声は縫を安心させた。
（良かった元通りの那癒だ……）

夜の狩猟者、職業病その一、昼夜逆転。

「成る程ね。さっさと直しなよ」
「無理だ」
いつも通り、何も変化の無い生活。そう思った矢先、今日の朝のHRで担任から連絡があった。
「今日から転校生が来る。仲良くするように。じゃ、入れ」
9月、この中途半端な時期に転校生が来る事は珍しい。
「はい」
戸が開き黒板の前に立ちチョークを手に取り名前を書く。女子らしい小さく丸い文字だった。
そして、角が生えていた。
「転校生の二ノ宮絵心です。こころちゃんって呼んでくださいね、あはっ☆」
透き通るような白髪、ひびの入った左角には包帯が巻かれている。
それが髪飾りの様な役割を果たしているため包帯には違和感がない。

包帯には。
（うわぁ～『あはっ☆』なんて使う人いるんだ）
（寒い、今冬だっけ？）
「……那癒、あれどうよ？」
「あそこまでゆくと最早芸術だ。放っておこう」
凄まじいキャラ作りだった。ああいう女女した性格は縫も那癒多も苦手としている。
嫌いと言って良い。
「あと、転校生ではないが、管理者直属の魔術師、葵祢衣さんがこの学校に戻ってきた。見かけたら仲良くしてやってくれ」

『うあぁおおおおおおおおおおおおおおおおおお！』

教室が軽く湧いた。

『マジかよ、祢衣ちゃんが帰って来たのか！』
『我が天使、祢衣様が帰還された、なんと素晴らしき事か！』
『今日は祭りだぁあああああああ！』
『踏まれたい……罵倒されたい……』

祢衣は飛鳥からの依頼で、たまにしか学校に来ない。たまにしか学校に来ない美少女がいるという事で注目を浴び、ついにはファンクラブが出来た。
「縫」
「何？」
「ウチのクラスってこんなんだったっけ？」
「さぁ？」

昼休み。いつもなら全クラスが購買目掛けてダッシュするのだが、今日の縫達のクラスは違った。

『こころちゃんって何処から来たの？』
「秘密です」
『二ノって彼氏いるの？』
「ええ～いないですよ～。憧れてはいるんですけどね。あと、こころちゃんっ
て呼んで下さーい。ニノは止めて下さい！」
転校生の周りに人が集まっていた。

「縫、どう思う？」
「うーん、まぁ普通に可愛いしね」
「いや、角生えてるだろう」
「私には見えないんだけど」
「何故だ」
縫は素直だった。一方那癒多は疑り深かった。
「那癒、角って……妖怪の類？」
「まさか、妖怪が学校に来るものか」
「お化けか何か？」
「お化けにゃ学校も、試験も何にもないらしいぞ。だから違う」
「お二人何の話をしているんですか」
「おふ」「ふはっ」
気付くとこころが目の前にいた。
「私まだお二人とは話してないんですよね」
「ああ、そうだな。よろしく」
那癒は簡潔に無感動に挨拶を済ませる。
「げほげほ」
縫はむせていた。
「大丈夫ですか」
「……（ぐっ）」
縫は親指を立て返事をする。

「キャラ崩壊キャラ崩壊。縫、落ち着け、素数を数えろ。お前はもっとＣＯＯＬな女だ！」
那癒多の声で素数を数え始める。
「うん。２、３、５、７、１１、１３、１７、１９、２３……」
無茶苦茶早かった。
「不束者ですが宜しく御願いします」
『こころちゃーんそれ違うよ～』
周囲の取り巻きがこころの言葉を訂正する。
「あらっ、そうですか」
休み時間はまだある。
縫と那癒多は、昼休みは静かに過ごしたい派だった。
「……　３７９、３８３、３８９、３９７、４０１、４０９……」
「素数はもう良いから」
『トントントントン』
那癒多はトントン、と机を指で叩き始める。
『トントントントン』
モールス信号で会話を始める。
『部室に行こう。縫』
『賛成』
『私も行っていい？』
キャメロットを召喚していた祢衣にもモールスが伝わる。キャメロットと感覚を共有する事で驚異的聴力を誇っていた。
縫と那癒多は元々異常なまでに耳が良い。それに加え、隣の教室との壁がやたら薄い。吹き矢で貫通する程の壁である。
どっかの馬鹿が壁を破壊し、代わりの壁が薄い安物であることが原因である。
こころもモールスで参加しようとした。
『じゃあ、私も』

キャメロットを通して、会話を試みる。
『こころちゃんは付いて来ないでよ』
『ええ～一応仕事だし』
こころが隙を見せた瞬間、
「縫、今の内に行くぞ」
「うん」
「あっ！」
縫、那癒多、教室を出て走り出す。廊下で祢衣と合流し、理科実験室へ向かった。
「出遅れたぁぁぁぁぁあー」
追おうとするが、「部室」じゃ、こころには何処かわからなかった。
「撒いたか？」
「大丈夫だとは思う」
「……ここ何処？」
祢衣がこの部屋に入るのは初めてだった。縫が部長の部室である。
「ああ、実験室だよ。半ば縫の私室になってるけど」
「余計な事言わなくて良いから」
そう言いながら何処からもなくティーセットを出し、紅茶の準備に取り掛かる。
「ほら」
「何故ティーセット？」
「アンティーク部から貰った」
「そんな部活まであるんだ、私の学校」
「葵さんは部活入ってないんよね」
「はい。飛鳥さんから色々頼まれる事も多くて部活に入るとみんなに迷惑掛けるので……」
「そうなのか」

「そうなんです……」
「祢衣、そんな堅くなるな。縫も葵さんなんて呼ばずに、呼び捨てにすればいい。もう知り合いなんだ。もっと砕けろ」
「じゃ、じゃあ、ね、祢衣……ちゃん？」
那癒多の言葉で次はフレンドリィーにという誓いを思い出す。
「ぬ、縫……さん」
「お見合いか？　お前ら」
「那癒～、だって慣れないだもん」
「そうだよ！」
「まぁ、ゆっくり慣れてゆけばいいさ」
淹れたての紅茶の口にする那癒多のその姿は……、
「ぶっ――！　あつぅううう！」
……優雅には程遠かった。
「那癒、猫舌なのに何でいつも淹れたて飲むのさ？」
「淹れたての方がおいしいに決まっている」
「ふふふ」
「どうした祢衣」
「いや、二人っていつもこんな感じなのかなと思ったら微笑ましくて」
「ち、違うわ！」
那癒多は顔を真っ赤にし、俯いた。
「あ、怒らせちゃった？」
「照れてるだけだよ、気にしないで」
昼休みが終わるまで三人はゆっくりとした時間を過ごした。

私は学校のトイレの個室に潜んでいた。教室にいても廊下にいても注目を浴びる。少し気疲れした。
誰も来ないここで休む事にしたというわけだ。

「疲れた。囲まれるっていうのは慣れないな……」
思ったより体力を使った。監視対象の祢衣ちゃん……いや葵祢衣から目を離してしまった。
愛称で呼ぶなんて……。駄目だ、この数週間で情が移りつつある。今までこんな事無かったのに。
頭を空にする。
（私、何やってるんだろう？　自分の過去話して、相手に心を許して、もっと冷酷に任務に没頭すべきなのに。こんなの私らしくない）
私の中の鎖が緩み始めていた。
私は、自分の任務、許容行動を再確認する。

・生命掌握装置『歯車』の破壊。（第一優先）
・葵祢衣の監視、協力に積極的でない場合殺害して構わない。
・事件の犯人の確保。抵抗する場合生死は問わない。

これだけだ。別に、関係者を皆殺しっていうのは任務に入ってない。
……言われれば殺すけど。
そう、私は『四之宮』の執行人。感情なんていらないんだ。
放課後になったら葵祢衣と合流しよう。
私情は捨てろ。これは任務なんだ。『四之宮』が自分の居場所なんだ。
こんな仮初めの居場所に惑わされるな！　……どうせ消えて無くなる居場所なんかに。
私が思い出すのは鷺ノ宮の光景。両親が死んでゆく姿。何の前触れもなく私から居場所を奪っていった『無限の影』。それを思い出すだけで、私は冷静になれた。
――私は、冷酷な魔術師でなければならない。

放課後になる。葵祢衣が私に話し掛けて来る。
「こころちゃ～ん」
何も考えて無い様な笑顔だった。私が風呂場の件で心を開いたとでも思っているのだろうか？　だとしたら滑稽だ。笑える。私の演技にまんまと引っかかったのだ。ハッハハ。
「ごめん待った？」
「ううん、全然」
私は笑顔を作る。
葵祢衣は私に携帯の画面を見せてくる。それは黒陽飛鳥からのメールだった。
「飛鳥さん、まだ職場にいるみたい。一回顔見せに行こう」
「うん」
陽ノ宮管理者の職場か。一度目を通しておくべきだろう。
しばらく歩く。葵祢衣は何だか楽しそうだった。
「ここが？」
「うん。飛鳥さんの職場。陽ノ宮管理局」
「私まで入って良いの？」
「うん、大丈夫だよ」
私達は建物の中に入る。私は驚く。この感じは……魔力が結合しない？
魔術を使おうとしても魔力を練れなかった。
「祢衣ちゃん、ここって」
「気付いた？　この建物だけじゃないけど、陽ノ宮の主要公共機関にはＳＰＥＬＬ　Ｃｏｄｅ　Ｃａｎｃｅｌｅｒ。通称ＳＣ２が展開されてるの」
「ＳＣ２……聞いた事無い」
「それが展開されている限りその場所では魔力結合が起きない。つまり魔術の行使は全く出来なくなるのです」
葵祢衣が得意気に語る。

「そんなものが存在していたなんて」
「まぁ、何兆円も掛かるみたいで、一般化はまずされないと思うけどね。小型化も進めようとしてるみたいだけど、まだまだ掛かるみたい」
「へぇー」
初耳だった。『四之宮』でSC2の存在は確認されていなかった。
「原理は？」
一応訊いてみる。私もこれには興味がある。報告するかもしれないし。
「原理はね……わからない」
「え？」
「まだ、解明されてない」
「解明されてないのに使ってるの？」
驚きだ。そんなものが実用化されているなんて。
「ある魔術師がヒントを与えて今年の春くらいから実用化されてるんだけど、未だにどういう原理で魔力を無効化しているか証明出来てないの」
「そんなものが実用化……」
原理が良くわからないものを実用しているなんて信じられなかった。
「ああ、そうだ、飛鳥さんのところへ行こう」
「うん」
扉には『陽ノ宮管理室』と書かれていた。
「おじゃまします」
「失礼します」
祢衣ちゃん……葵祢衣に続いて私も部屋に入る。頭の中だけでも愛称で呼ぶな。殺すかもしれない相手に感情移入するな。これは任務なんだ。
――私は冷酷な魔術師であるべきなんだ。

改めて自分を戒める。
「あら、いらっしゃい」
黒陽飛鳥はおおよそ仕事をしているようには見えなかった。手にはゲーム機。何で管理者になれたのだろう？
「ああ、祢衣さんいらっしゃい。祢衣さんからも言って下さい。この人全然仕事しないんですよ」
若い男が必死に働いてる。その傍ら黒陽飛鳥は遊んでいる。
しかし、逆なのではないか？　この男が優秀だから遊んでいるのではないか？
「はっはっは。君が優秀過ぎてやる事が無いのだよワトソン君」
「ワトソンじゃありません、櫻井です。そういう戯言は机の上の資料片付けてからにして下さい」
「櫻井さん、いつも大変そうですね」
「働けば誰よりも優秀なのに……」
「飛鳥さんの仕事姿見たいな～」
祢衣っ……葵祢衣は上目遣いで黒陽飛鳥を見る。決して可愛く無い。可愛く無い。可愛く無い。可愛く無い。可愛く無い可愛く無い可愛く無い。何とも思わ無い。
「よーし、飛鳥さん頑張っちゃうぞ！」
急に動きが変わる。腕が少なくても六本に見える。この人本当に生身の人間か？　強化魔術の一つや二つ使ってるんじゃないか？
ああ、そうかＳＣ２内では魔術が使えないのか。
「そういえば、祢衣ちゃん。今月の授業料まだ払ってないから銀行行って払って来て。お金はそこにあるから」
「了解です」
「引き落としじゃないんですか？」
「授業一月まるまる受けないときがあるから行く月だけ払う様になってるんだ」
「そうなんだ」

特別処置って奴か。
私の授業料とかはどうなっているのだろうか？　任務が終わったら『四之宮』に訊くとしよう。
私と、ね……葵祢衣は銀行に向かう。管理局から銀行は意外と近かった。
銀行に入るとさっきと同様の感覚に苛まれる。
「この銀行にもＳＣが２？」
「うん、そうだよ。ＳＣ２が導入されてからは銀行での犯罪も減ったんだよ」
「そうなの？　逆に魔術の腕が関係無くなるから武装して襲撃。って事も有り得ると思うんだけど」
「ＳＣ２内だと魔術は使えない。つまり、ただの人間だよね。だから、警備ロボットがいるの」
「さっきから店内を歩き回ってるあれ？」
「そうだよ」
白い二足歩行型ロボットが店内に五体ほどいる。あまり新しくないが、それでも充分だろう。
確かに魔術が使えない状態であの武装された警備ロボット達と戦って無事に済む事がないだろう。
自動ドアが開く。帽子を被った男が入ってくる。
「どうもー警備会社の者ですが」
「いつもご苦労様」

「それに、ほら、小まめに点検してるんだよ。不備を起こさないようにね」
「へぇ、ところで何でそんなに詳しいの？」
「飛鳥さんから教えて貰った」
あの管理者……口が軽過ぎる。あんまり口外しちゃいけない事だろうに。
その時だった、突然、警鐘が鳴る。

「まさか、本当に強盗？」
「きゃ」
一瞬の出来事だった。さっきの警備会社の男が葵祢衣を人質に取った。
手には拳銃。葵祢衣のこめかみに銃口が向けられている。
「おい、お前、離れろ！」
私は犯人にそううながされる。それに従って距離を取る。
「そこで、止まれ。おい、さっさと金を袋に詰めろ！　こいつの命が惜しくなかったらな」
銀行員は犯人の要求通り動き始める。
私は犯人に質問してみる。
「あなた、警備会社の人間じゃないわね」
「良くわかったな、ちなみにロボットは動かないぜ、さっきそういう風に設定したからな」
やっぱりか。それにしても〇サスの犯人みたいに吐いてくれた。馬鹿なのだろう。
犯行は複数犯。本物の警備会社の車を襲撃。服を奪い取る。警備会社員は人質になる。もし、失敗してもその人質を使って取引できる。上等手段だと言える。
さて、どうする？　葵祢衣は別に死んでもかまわない。死んだという事実だけでも葵詩衣を動揺させる事が出来る。
これは、私情なのか？　葵祢衣には死んで欲しくない。一度心を開きかけたから？　それとも、任務のため？　わからない。わからないけど……
――私はあの子を救う事にした。

スカートで隠していたふとももガンホルダーから銃を取り出す。
そして、犯人に向け何の躊躇いも無く撃つ。
銃声、犯人の足を撃つ。正確無比な射撃。動かない標的に当てる事など造作も無かった。
激痛で腕の力が緩み葵祢衣から手が離れる。足を撃たれて尚立っていられる事は評価に値する。
「祢衣ちゃん、伏せて！」
祢衣ちゃんは私の指示通り伏せる。
「……いてぇ……いてぇよ……てめぇ、……殺す！」
犯人が私に向かって撃ってくる。それを全てかわす。
銃弾を見ているわけじゃない。構えから軌道を予測する。そうすれば、どんな速い弾だってかわせる。
私は犯人の銃を撃ち破壊する。距離を詰め、顔面を殴り抜ける。
「ぐはっ」
犯人は仰向けに倒れる。私は犯人に馬乗りして、隠し持ってたナイフを出す。
「これで……お終い」
私は犯人の首をナイフでかっ切ろうとする。
そして、『四之宮』の自分が帰ってくる事を実感する。その動作は自分でも恐ろしいくらい慣れた動作だった。
これで……戻れる……。

「こころちゃん、駄目！」

「うっ」
私は葵祢衣に突き飛ばされる。その隙に、

「うわぁあああああああああああああ！」

犯人は外へ逃げ出していった。
外からパトカーの音。通報していたらしい。捕まるのは時間の問題だろう。
「こころちゃん、駄目だよ……今、殺そうとしたよね？」
「……」
「こころちゃんのあの時の目、冷たくてとても怖かった。そんなこころちゃんを見るの、私嫌だな……とても……哀しいな」
私を祢衣ちゃんに抱きしめられる。顔は見えないけど、多分泣いている。声も震えているし。
「だから、もう無理しなくて良いんだよ。私は、優しいこころちゃんの事が好き、またこころちゃんの本当の笑顔を見たいんだ」
「……ごめん、祢衣ちゃん」
それは、きっと告白だった。
やめてよ、そんな風に優しくされたら決意が鈍るじゃない。
……ああ、そうか、理解する。私にはもう無理だ、この子を殺す事は。

この子は、私を人として見てくれている。決して『四之宮』みたいな道具扱いをしない。
私の事を怖がっても、哀しいって言ってくれた。
私、こんなに手を汚していたのか。人を殺す事に何の抵抗も持たなくなっていたんだ。それだけ、私の心は壊れていたんだ。
もう、良いのかな？　私は「わたし」に戻っていいのかな？
心の奥底の感情という鎖が砕ける。何年もの間封印していた自分を取り戻す。
心の中で「わたし」が目覚める。
『四之宮』の『私』じゃない、鷺ノ宮の『わたし』。あの時、現実を受け入れられなくて捨てた感情。
今までの私は『四ノ宮』以外に居場所が無くて、すがっていた。

また自分の居場所が無くなる事を恐れていた。
でも、もっと居心地の良い場所が出来てしまった。「わたし」が「私」である必要が無くなってしまった。
「……わたし、ここにいて良いのかな？」
目が熱くなる。久しぶりのそれは、わたしの言う事なんて利かないで流れだした。
「こころちゃん……良いに決まってるよ」
そうか、悪くないな。今わたしのいるここは……こんなにも暖かい。もう、自ら自分の居場所を狭めたり、壊す必要は……ないんだ。
わたしはその時、泣いた。久しぶりに思いっきり。気分は今までに無いくらい澄み切っていた。

第13話　9月（2）　『わたし』の涙（後書き）

予定では、これで半分です。後半戦、頑張りたいと思います。

第１４話　９月（３）　四人の少女とテストと女王様ゲーム

陽ノ宮高校では秋に学校祭の様なものが行われる。月ノ宮高校や、一般の高校は授業日数の関係で無理だが、陽ノ宮高校は違う。

……ていうか校長のテンションが違う。

陽ノ宮高校、校長（２８）の朝会はこの高校の名物となっている。

「集まってるかぁぁぁぁぁぁぁぁあああああ野郎共ぉおおおおおおおお！」

『イィィイイイイエエエエエエ！』

「今年も秋分祭だ！　盛り上がるぞぉぉぉぉお！！」

『おおおおおお！！』

「ただし、テメーら、今週末に行われる秋分前テストで赤点取ってみろ！　秋分祭の間みっちり補習だからな！　覚悟しておけぇぇぇええええ！」

『ううううおぉおおおおおおおおぉぉおおおお！』

秋分祭に参加するために死ぬ気で勉強する。その集中力により、わずか数週間で他の学校の数か月分の勉強を終わらせてしまうのだ。

それが、学校側の狙いでもある。

「範囲は広い。だだ広い、銀河系並に広い。そしてぇええええ！　マリアナ海溝並みに深い。だがッッッ！　そこは気合で乗り切れっ！　いいかぁぁ！？　こが終われば秋分祭だッ！」

『うぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！』

教室に戻ると生徒たちはまるで何かに取り憑かれたのように勉強をしていた。

その様子にこころは素直に驚く。
「う、うわぁ……凄いね」
「そうか、こころは知らないのか。毎年こうなんだよ。この学校は」
那癒多はやれやれと右手を額につけ首を振る。
「ところで……那癒、大丈夫なの？　今年は？」
那癒多は不敵な笑みを浮かべる。
「ふっ、大丈夫……だと思ったか？」
「……今年もか」
那癒多は毎回伝説を作る。赤点は三十点未満。那癒多は全教科で三十点を取り、超低空飛行を実現し、全生徒に称えられた。その裏には縫との壮絶な勉強会があった。その後、オール三十点の事は『赤羽ライン』と教師生徒共に呼ばれている。
「余裕だな。私はあれから成長した。縫の力を借りずともレッドラインを超えて見せるさ」
「言ったわね！　じゃあ、お手並み拝見と行こうかしら」
「ぬーいーさん」
「何？　こころさん？」
「もう、『さん』付けじゃなくても良いのに。じゃなくて、わたし、この学校に来たばかりだからノート写させて欲しいんだけど」
「良いけど」
「こころ、やめとけ」
「何で？」
こころは疑問符を浮かべながらもノートを受け取る。
「はい、ノート全教科」
「ありがとう」
こころがノートをめくると、そこには理解不能の文字列が並べられていた。
「……ごめん、わかんない」
「縫はコードの勉強のし過ぎで頭がおかしい。一部暗号文みたいに

なってるんだ。本人が理解していて、その文字を読めるから問題ないが、他人に見せられる代物じゃない」
「ご、ごめんね～。ノート人に見せることないから自分が読めれば良いかな～って……」
「い、いや」
「こころ、大人しく職員室に行った方がいい。教師の授業ノートをコピーさせてもらえ」
「うん、そうだね。そうするよ」
縫が落ち込む姿を見つつ、こころは職員室に向かった。
「失礼します」
職員室に入ると既に祢衣がいた。
「はい、いなかった分のノート」
「ありがとうございます」
祢衣は教師から授業ノートのコピーを受け取っていた。
「あ、こころちゃんどうしたの？」
「テスト範囲のノート見せてもらおうと思って先生に……」
「私も一緒。良かったら一緒に勉強しない？」
「本当？　助かるよ」
「でも、祢衣ちゃん。でも、間に合うかな？」
「努力は裏切らないよ。頑張ろう」
「うん」

◆

三日後。テストまであと二日。二時間目の魔術の時間は自習となっていた。
「こころちゃん凄いよぉ」
「ありがとう、縫ちゃん」

「まさか、たった三日で全範囲網羅するなんて……」
「そんな～網羅なんて～」
「それに比べ那癒は……」

「はぁ、テストの日、校舎爆発しないかな……」

「駄目だこの子、早く何とかしないと」
「まぁ、最後はモールスで縫に聞けば良いんだけどな」
「先生なら気付くでしょ、不正したらそれこそ社会的に死ぬわよ」
「はぁ～駄目かー」
「ところで、この三日間何してたの？」
「えーと、ゲームして漫画読んで寝てました」
「補習受ければ？　今までの堕落した生活から抜け出すチャンスかもよ」
「そんなぁ、去年一緒に戦った仲じゃないか！」
「そんな事言われてもな～」
「じゃあ、放課後に勉強会しようよ、祢衣ちゃんもいるしきっと、はかどるよ」
「こころは心の友だな」
祢衣の提案により、放課後、飛鳥宅で勉強会が行われる事になった。

「松尾芭蕉のお供で弟子の名前は？」
「フランシスコ＝ザビエル」
「芭蕉さん凄いね」
「本能寺では誰が誰を裏切ったでしょう？」
「ブルータスがカエサルを裏切った」
「ブルータス、お前もか」
「ＧＨＱに日本に何を要求した？」
「ＣＱＣ」

「Ｃｌｏｓｅ　Ｑｕａｒｔｅｒｓ　Ｃｏｍｂａｔね」
「……那癒、ふざけてるの？」
「あまりにわからなくてつい……」
「こころちゃんも途中から悪ふざけ始めたよね」
「いやぁついつい面白くて」
「祢衣ちゃんは……――ッ、あああああああああ可愛いな、もう！」
「えっ？　何？　私、何かした？」
無論、何もしていない。ただ、縫と目が合って微笑んでいただけだ。
「で、どうするの？　予想以上に酷い。これじゃあ一桁すら危うい」
「一桁は不味い。何としても回避しなければ」
今日、初めて那癒多がやる気を出した瞬間だった。
「ちなみに一桁取ったらどうなるの？」
「……三つ一桁取ったら……退学」
「た、退学！？　大丈夫なの？　那癒ちゃん」
「なゆなゆピンチだ」
「こころ何だ、なゆなゆって？　祢衣。心配するな。何とかしてくれるさ……縫が」
「ここまで来て他力本願？」

次の日の放課後、黒陽家。テスト前日。
「那癒、頭の良くなる薬を調合してきました」
「おおー、流石縫だ。じゃあ早速……」
「――ただし、」
声色が強くなる。
「ただし、ある程度頭が良くならないと副作用で死にます」
「えっ？」
「死にます。苦しんで死にます。心臓大破が心地良い、と思えるくらいに無残に死にます」

那癒多は全身に汗をかく。心臓大破の記憶は今も那癒多の記憶に残っている。
「那癒ちゃん、頑張ろう」
「なゆなゆ、私も手伝うよ」
「ふ、二人とも～ありがとう。それに比べて……縫の鬼！　迷走鬼！　ヤクザっ子！」
「はいはい私は鬼ですよ～だ」
（てか、ヤクザっ子って何？　新しいんだけど）
その日、那癒多は初めてまともに勉強した。

そして、翌日テスト後の飛鳥宅。
「なゆなゆ、どうだった？」「大丈夫だった？」
「何とか全教科赤点は間逃れそう……多分」
二人の質問に答える那癒多。その顔は眠いと言わんばかりだった。
「はっはっは、良かったね～」
「縫は何の役にも立たなかったけどな」
祢衣が縫に話を切り出す。
「ところで縫ちゃん、その薬ってただの水か何かでしょ？」
「……祢衣は気付いたか。流石ね」
縫は読んでいた文庫本を閉じると、祢衣の方を向いた。
「どういう事だ？」
「ああ～、そういう事ねー。なゆなゆのやる気を出すために一芝居打ったって事かな」
那癒多は「ぽかーん」としていた。
「今回のＭＶＰは縫ちゃんね～」
「いやいや、那癒も頑張ってたわけだから、ＭＶＰをあげるならやっぱり那癒よ」
「良くわからんが縫……一応礼はしておく」
那癒多はそっぽを向きながら言った。
「駄菓子のツケ返してくれるだけでいいわよ」

「ツケ？」
「今年中には返してね」
「ああ」
「じゃあ、テスト終わったのと、なゆなゆお疲れ様を兼ねて遊ぼうか」
「いいな、出来れば四人で出来るのがいいな」
「王様ゲーム？」
「……祢衣ちゃん？」
「祢衣、ルール知ってるのか？」
「くじ引いて王様を決めて、王様に絶対服従？」
「大体合ってるよ、祢衣ちゃん」
「王様……男いないじゃないか。これじゃ女王様ゲームだ」
「女王様ゲーム？」
「縫、変な妄想しただろう」
「な、何を言ってるのかな？　赤羽さんは、ははは」
那癒多は縫の読んでいる文庫本の正体を知ってこの発言をした。
この時、他の二人はその内容を知るよしもなかった。

「じゃあ、くじ作るね」
祢衣は割り箸を五本用意し、印をつける。
「五本？　四人だよ、祢衣ちゃん」
「王様一本、庶民四本、奴隷一本でしょ？」
ざわざわ……。
「それ、王様ゲームじゃない。もっと危ない遊びよ！」
縫がそう言い、組内で流行った事を思い出した。
「へっ？」
「まぁ、いい。これでも出来ない事はない」
箱を用意し箸を箱の中に入れる。奴隷の割り箸は折って捨てた。

「じゃあ、いっせーので引くぞ」

「ＯＫ」
「うん」
「わくわく」
各々が引くと那癒多は「女王様だーれだ！」と声を上げた。
「私だ！」
一回戦、女王様・祢衣
『じゃあ～どうしようかな～』
「女王様になると枠が変わるのか」
縫は不思議な発言をする。すると、那癒多は「何の話だ？」と返す。
「いや、何でもない。こっちの話」
二人が話している間に、祢衣が命令を決めた。
『じゃあ、二番の人は自分の恥ずかしい話をする』
「私だね」
縫が手を上げる。
『わくわく』
「女王様っていうより可愛いお姫様だよ祢衣ちゃん。暴君であった方が拒否出来たけどそんな目を輝かされて期待されると……よし、話す」
縫は覚悟を決めて話す。
「間接キスだと気付かず、間接キスしそうになった。恥ずかしかった。はい、お終い！」
「何……だとっ？　縫がそんな甘い話を」
「縫ちゃん大人だ」
「これが現実か！　そして、こころ、そんなに大人じゃないぞ、これ位！」
こころの感覚が子供だった。
「じゃあ、次いこー」
祢衣の言葉で二回戦が始まる。

二回戦、女王様・那癒多
『私だな。じゃあ、三番は脱げ』
「脱衣？　まぁ、私じゃないからいいけど」
「えっと、わたしでもない」
「祢衣ちゃん」
「祢衣？」
「じゃあ、脱ぐよ」
本当に脱ぎ始める。何の躊躇もなく。
『あああああああああああ！　今のなし、私が悪かった。罪悪感がやばい』
「まったく悪ふざけしすぎよ。次からそういうの無しね」
「わかった」
三回戦、女王様・那癒多
『また私だ』
「二回連続ってあり？」
「ありでしょうね」
『じゃあ……一番と二番はキス』
「はっ？　何言ってるの？　悪ふざけは封印するって言ったじゃない！」
「女の子同士だし問題ないって」
「……」
「……」
祢衣は目をつむりスタンバイ。そして、意外にもこころは戸惑っている。
「意外ね、こころなら押し倒しそうなイメージがあったんだけど」
『意外だな』
「そんな、心外だよ！　わ、わたしはファーストキスは好きな人に取っておく
って決めてるの！」
『意外と純情なんだな。面白いもの見れたしこれで良しとしよう』

「……」
『祢衣、もういいから。……し、仕方ない。じゃあ、私とキッスを』
「はいぃ、次ぃい！」

四回戦、女王様・縫
『これが女王か～枠が違うな～』
「だから、何の話をしてるんだ？」
『じゃあ、私は定番ネタでもしようかな～』
「定番？」
祢衣は首を傾げる。
「コイバナとかだろ。何気に縫はそういうのが好きだからな」
「女の子の話題っぽいよね」
『二番が自分の好きな人について語る。いない場合は理想のタイプについて』
「またベタなヤツを。誰だ二番」
「わ、わたし！」
「こころちゃんか」
『さぁ、語ろうか？』
「縫生き生きしてるな」
『あ、好きな人いない場合は……』
「いるよ」
俯き、暗い夜道のトナカイの鼻の代わりになるくらい顔が赤くなっている。
「こころが顔真っ赤だ！」
「こころちゃん可愛い」
『女王様の命令は絶対だからね～ひゃぁーひゃひゃひゃひゃ』
「縫、落ち着け。キャラ崩壊してるぞ、いつもの縫カムバック！」
こころは大きく深呼吸をして口を開く。
「わたしは昔身体的な理由でいじめられていました」
（角か）

（角かな？）
二人は理解するが。
《？》
縫は良くわかっていなかった。
「わたしはいつもその事でいじめられていました。
そして、いつも、わたしを助けに来てくれた人がいました。その人がわたしの大好きな人です。しょ、将来は結婚しようとまで……言いました……今もわたしはその人の事が大好きです！」
こころの感情の鎖は自己暗示の部分もあったが、実質的に感情と一部の記憶を封じていた。だが、この前『わたし』として戻った時に、感情と共に大切な記憶を取り戻した。。
「祢衣、冷たい水あるか？　秋だというのに暑い。猛暑だ。クーラーもつけて扇風機も欲しい。
ベタな展開だが、それをその顔で言われると何も言えない」
「そうだね～熱いねひゅーひゅー」
祢衣は下手糞な口笛を吹く。
『こころちゃんも意外とピュアなんだね。で、その人の名前は？』
「縫、聞いても無駄だろ。私達の知ってる名前なわけないだろう」
『一応聞きたいじゃん。結婚するかもしれないんだから』
「ま、まぁ、否定はしない」
こころの様子を見ていると本気で結婚を考えているようだ。「純粋過ぎて危ない」と三人が感じるほどに。それこそ、彼女がいようものな後ろが刺すのではないか？　と心配になるほどに。
『お名前は？』
「と、朱鷺羽咲炉（ときわざくろ）君」
『朱鷺羽……鷺ノ宮当主の息子？』
「有名人なのか？　知らないが」
『うちの組の連中が月ノ宮行った時に出くわして三人掛かりで殴りに掛かって返り討ちにあったって聞いたから知ってた』
「うわぁ魔術師様は加減ないね～」

『それが魔術使ってなかったらしいのよ。体術だけで負けたらしい』
「どんな化け物だよ」
『こころちゃん、その人にお姉さんっている？』
「うん、いるよ」
『ああー』
「もしかして会った事あるの？」
『うん、最後に会ったのは春にかな？　連絡先も知ってる』
「後で連絡先教えて！」
『良いよ。あと、手が痛い』
こころが縫の手を握り、ぎしぎしと骨が軋んでいた。

この連絡先入手により、朱鷺羽咲炉とこころの運命が変わったという。

「思わぬ繋がりだな」
「次行こう～」
「次こそわたしが女王様！」

結局その日こころが女王に返り咲く事はなかった。

第１４話　９月（３）　四人の少女とテストと女王様ゲーム（後書き）

テストと学生の戦いは世代を超えて共感出来る珍しいものだと思います。

あと、後書きが徐々に短くなってるかもです（汗）

毎回書くのは意外と大変ですね。

第15話　9月（4）　秋分祭

今日の授業は全てテスト返却のために使われた。
伝説は繰り返された。赤羽那癒多はまた超低空飛行を実現させた。

オール三十点。

今回の彼女のテストの点数である。『赤羽ライン』という言葉が去年同様全学年に広まった。
「なゆなゆ、危なかったね」
「内心ヒヤヒヤしてた。危なかった」
「まぁ、これで何の心配もなく秋分祭ね」

『キーンコーンカーンコーン』

四時間目が終了する。昼休みに入ると購買戦争が勃発しクラスの半数がいなくなる。
「じゃあ、この隙にいつもの場所に行くか」
いつもの場所。こころの転校生としての属性も薄れてきていくらか静かに過ごせるようになったが、それでもゆっくり出来るわけではない。祢衣も同様に静かに過ごせていない。
そのため理科実験室が四人の溜まり場になっている。
四人が実験室に向かう途中、ふと、こころは縫に疑問を持ち掛けた。
「縫ちゃん」
「何、こころ？」
「何で理科実験室自由に使ってるの？」

縫は「そういえば言ってなかったかぁ」という表情をする。
「ああー、それか。一応私スペコ部の所属してるんだよ」
スペル・コード部、略してスペコ部。陽ノ宮では一般的な部活である。活動内容はスペル・コードの制作、実験である。
「縫と私以外は完全に幽霊部員だがな」
「本当は十人位いるんだけどね」
「へぇー」
「で、部長だから自由に使ってるわけ」
「職権乱用もはなはだしいがな」
「私も入りたいな～」
「祢衣ちゃんが入るならわたしも」
「良いよー。私から先生に言っておくよ」
「縫、紅茶」
那癒多は慣れた動作で紅茶の催促をする。
「今用意するよ。こころと祢衣は何飲む？　大概のものは揃ってるよ」
「じゃあ、ミルクティーで」と、祢衣。
「オレンジジュースで」と、こころ。
「ぷっ……オレンジジュースだって。こころは案外子供だなー」
「わ、悪い？」
「いや、悪くはないぞー」
縫から紅茶を受け取る。そして「あっつぅうううう！」
舌を火傷する。
「はいどうぞ」
縫はスルーして、二人にそれぞれ飲み物を渡す。
「ところで、五時間目何するんだ？」
那癒多は何事も無かったかのように振る舞う。高速治癒の魔術は実生活でも生きる。
「那癒、聞いてなかったの？」
「私が授業中起きてるとでも？」

「そうだね、起きてるわけないよね。ごめんね、変な事訊いて」
祢衣は話を切り出す。声が上ずっていた。
「縫ちゃん、確か秋分祭の打ち合わせだよね？」
「うん、そうだよ」
「私のクラスもそうだよ」
「何だ、じゃあには私関係ないな」
那癒多は鼻で笑い、紅茶を飲み、火傷をして、高速治癒をした。
「無関心だね～」
「一人の意見が反映されるわけじゃないだろ」
「まぁ、そうだけど……」
「楽しみではあるんだけどね睡魔には中々勝てない。みんなはいつも何時くらいに寝てるんだ？　縫はいいや、前訊いたから」
「わたしは三時かな？　睡眠が深いのか三時間眠ればスッキリ目覚められる」
こころのは『四之宮』での生活で身についたものである。
「ナポレオンかよ！」
続いて、祢衣。
「私はこころちゃんとは違って凄く早く寝ちゃうんだよね」
「十時かくらいか？」
「八時」
「今時小学生でもそんな時間に寝ないぞ」
「祢衣ちゃんの寝顔可愛いんだよねー」
こころは手を左右に振り高揚する。それ程素晴らしいものなのだと、縫と那癒多は理解する。
「一緒に住んでる特権か」
「うん」
「眠い」とだけ言うと那癒多は返事をすると机に突っ伏し眠る体勢を取る。
「寝る。起こして」
「ＯＫおやす……寝てる」

まさに達人の域、瞬時に眠りに入った。
「那癒も眠っちゃったし私はコードの計算でもして暇を潰すとするよ」
縫は鞄から本を取り出す。
「じゃあ、私は那癒ちゃんの観察でもしてようかな。髪がひょこひょこ動いておもしろいし」
祢衣は那癒多のお団子頭を観察する。スライムの様にひょこひょこ動く。退屈しない動きだった。
「じゃあ、わたしは祢衣ちゃんの観察でもしてようかな」
こころは祢衣の顔を眺める。時々顔が合っては、笑顔を向けられる。その度に、
（やばい、可愛い……襲いそう……）
と葛藤する。
最近の四人の昼休みはここで始まりここで終わる。

『キーンコーンカーンコーン』

「昼休み終わっちゃったね」
「うん」
「那癒～起きろ～帰ってこーい」
「くっ、まさか……縫にそんな必殺技があるとは……ん？　おはょう」
那癒多は奇妙な寝言を吐いていた。
「早く行かないと授業遅れちゃうよぉー」
「那癒、急ぐよ」
授業開始ギリギリで教室に着く。
縫、那癒多、こころは2年8組。
祢衣は2年7組。
それぞれ自分の教室に入ってゆく。
2年8組。三人は席に着くとすぐに談笑を始める。それから五分

程遅れて担任が教室に入ってくる。
「悪い、遅れた」
どうやら遅れたのは8組だけではなかったらしい。他のクラスでも遅れて教師が教室に入って行く。
「何があったんですか？」
生真面目なこのクラスの委員長が担任に問う。
「職員会議が行われてな、今回の秋分祭では二クラス合同で何かする事になった」
「教室二つ使って何かって事ですか？」
「そういう事になるな。で、8組は7組と一緒になった」
「うっ」「ごはっ！」
縫は声を濁し、那癒多でさえ目を覚ます。

『おい、赤羽が目を覚ましたぞ！』
『うとうとしていたが、正直寝てる暇では無いことを理解した！』
『地球の終わりか？』

クラスの男子がざわめいた。
「どうしたの？」
事情を知らないことは縫に訊ねる。
「御影のクラスだな。ちっ、入院してたから間に合わないかなと期待してたのに……」
「それより火山が面倒よ。火山も入院してたからに期待してたのに……ところで那癒、火山の前で居眠り出来ると思う？」
「無理だな。付属品の幽霊女もいるしな」
「水樹（みずき）か、確かに寝ようものなら木刀で頭割って来そうね」
「ちょっと、待って把握出来ないんだけど」
「ああ、ごめんごめん。それだけ7組っていうのは厄介者の集まりなのよ」
「祢衣ちゃんのクラスが？」

「まぁな。まず、担任が終わってる。夏の学校祭では自分を主役にして自作映画を作ってた位だもんな」
「悔しい事に出来は良かったけどね」
全くついて行けてないこころには、まだ理解出来ていなかった。
「えっと……何に問題があるの？　面白くなりそうで良いと思うんだけど」
「それが問題なのよ。あいつらのペースに乗せられたら最後、私達は自分のやりたい事を何一つ出来なくなる」
「秋分祭を乗っ取られる。いけないな。これは寝てる場合じゃない」
「那癒ちゃんが睡眠を犠牲にする発言をするなんて……よっぽどの事だね」
この数週間でこころが学んだ事は、那癒多の睡眠に対する執着心だった。さらにクラスがざわつく。
「しーずーかーに。取り敢えずうちのクラスの意見をまとめない事には意味がない。さっさと決めろよ～」
「はーい」
開始から数十分で意見は揃ってきた。ただこの中から何を決めるかが問題。
「お化け屋敷、メイド喫茶。ここら辺は定番か。あと、能面作りに下駄作り……誰得よ？」
「コード研究もあるな、うちには縫がいるからこれになった場合は7組を圧倒出来るな」
「いや、御影が居る限り油断は出来ない」
「ねぇ、わたし達は何と戦ってるの？　一緒にやるんだから別にそこまでならなくても……」
「すぐにわかるさ」
委員長が意見をまとめ始める。
「じゃあ、多数決取ります。一人一回手を挙げてください」
結果は男子の殆どがメイド喫茶だった。欲望に忠実だこと。
意外にも女子の半数がメイド喫茶に手を挙げた。多数決は数える

事も必要もなくメイド喫茶に決まった。

≪2年7組≫

「フゥ―、って事今年の秋分祭は8組と合同で行う事になりました―ヒェイヒェイ」

奇妙な声を奇妙なポーズを取るっているサングラスをかけ、髪を後ろで一つにまとめている。女教師がいる。

彼女が7組の担任だ。

「センセーセンセー」

「笠原、うるさい。で、何?」

「俺は夏の映画の続編作りたいです」

「良いねー私さんせー」

軽い口調で答える。

「私は反対です」と御影。

「ありえない」と続いて火山。

二人は立ち上がり睨み合う。

「あら、火山さんこんなところで意見が合うなんて……」

「私こそ、夏にはあれだけ賛成していた御影さんが反対側に移るとは」

「私はもう映画は飽きただけです」

「そうですか。まぁ今回は意見があったから良しとしましょう」

このクラスではこの二人の発言力は大きい。夏の学校祭では、一般公開もあり風紀委員の火山はで忙しかったため強く発言出来なかったが今回は違った。

秋分祭で火山は夏に楽しめなかった事を密かに取り戻そうとしているのだった。……ついでに言えば入院してたときの恨みを晴らしたいとも思っている。

「メイド喫茶とかは？」
「いいねー最高だね」
「俺も賛成～」
男子たちが騒ぎ始める。そこに一声。
「……うるさい」
教室が静まり返る。風紀委員副委員長。火山の右腕、水樹希風（みずききかぜ）。
彼女にはある事が許されている。
絶対権限、『正当指導』。彼女の暴力は校内では指導であり、正義。
誰もが彼女に逆らう事は出来ない。完全なる恐怖によって生徒を制しているのだ。
彼女の親が学校に多額の寄付を払っているというのが大きな理由の一つだ。
「話が進まない。話をするなら……手を挙げて……発言しなさ……ちなみに先生、私も映画には反対です……今回は準備期間が短いです……費用もあまりない。無理です。少しは現実を見て下さい。だからその歳でも彼氏がいないんですよ」
「グサッぁぁぁッ！」
水樹の発言により、担任教諭は胸を槍で貫かれた様にして倒れこむ。
「はい」
女子生徒の一人が手を挙げる。
「……いいよ、紋雛（あやひな）発言して」
水樹の許可を得て紋雛は発言する。
「私は執事喫茶がいいです」
「どうして？」
「このクラスには顔『だけ』は……顔『だけ』は、顔『だけ』は良いっていう男子が割りと多いです。……笠原とか」

「それ、告白？　良いよー付き合ってやるよ」
「……死ね」
水樹の投げた木刀が笠原の頭に刺さる。
「ふぐたッッッ！」
笠原は動かなくなった。。
「確かにね。笠原一人で大分客は釣れるし、仕事出来る奴も多いしいいかもね」
御影は執事喫茶と黒板に書き込む。
「反対意見は？」

『……』

恐怖がクラスを支配する。誰も何も話さなかった。
「……じゃあ、決定ね」
7組は執事喫茶に決まった。

――数日後

代表者の話合いにより、両方の案を採用し、二つに分かれて店を構える事になった。
「執事グループとメイドグループを決めたいと思います。どちらか選んで下さい」
「いいんちょー。でも、この定員だと女の子も執事グループに入っちゃうよ
ね、女の子が執事グループになっちゃった場合どうなるの？」
那癒多より小柄なクラスの少女伏瀬（ふくせ）が発言した。
「執事の仮装をしたいものはして、それ以外は裏で食べ物、飲み物の係になってもらいます」

「男子がメイドの場合は？」
「だ、男子は……」
冗談で言ったつもりだが、気真面目に返す。
「似合う者、自信のあるものはメイドになって良し。基本的には裏で仕事をしてもらいます」
「男子もメイドありなんだな」
那癒多は溜息を吐きながらそんな事を言う。
「そういう趣味の人もいるって事でしょ」
縫は適当にあしらいながら、頭の中でコード計算をしていた。
「いいんちょーって女顔だよね」
伏瀬がそんな事を言い始める。
「な、何を……？」
「そうだな、縫より可愛い顔してるな」
那癒多が若干失礼な事を言うも縫は怒っていなかった。事実には勝てない。これが現実だ。
「うん、認める。委員長の方が女っぽい。かわいい」

『委員長のメイド姿見たいな～』
『女装……正義！』
『男の娘きたぁあああああ！』
クラスの女子がざわめき始める。
『委員長、メイドグループ行けよ、俺達も似合うと思うぜ』
仕舞には男子達まで言う始末。
この委員長という男は、人の期待には必ず答える。
「わかりました、私はメイドグループに行きます」

『うぉーーーーー』

クラスが沸く。
「縫、私達のクラスってこんなんだっけ？」

「さぁ」
頭の中でのコード計算をしながら、適当に答える。
『ひゅぅうううううううううううう』
7組も沸いている。何があったのだろうか？
「縫は執事に行けばいいと思うのだが。こころもそう思うな、縫ちゃん格好いいもん」
「冗談でもやめてよ、それに御影と一緒のグループにはなりたくない」
縫の中ではあくまでも打倒御影らしい。
「えっと……じゃあ、執事グループに入りたい女子は挙手してください」
委員長が名簿に名前を書いてゆく。
「次はメイドグループに入りたい男子は手を挙げてください」
メイドグループに入ろうとする男子は誰もいなかった。
次の日の三時間目、両グループは顔合わせのために執事グループが7組、メイドグループが8組の教室で集まった。
「祢衣もメイドグループか」
「うん、何かクラスの男子のみんながメイドグループに行って欲しいって言ってたから」
「だから盛り上がってたのか」
委員長が仕切り始める。
「いくつかに分かれて仕事をしてもらいます」
「りょーかーい」
黒板に名前を書いてゆく。グループは事前に委員長が決めていた。
誰と一緒になりたいかという希望調査までしていた委員長に誰も文句を言わなかった。

縫達はC班になった。
こころが転校生という事もあり、こころと8組だけの自己紹介が行われた。
「二ノ宮絵心です、どうぞ、こころちゃんとお呼び下さい」
「7組、締野元治（しめのもとはる）だよろしく頼む。『しめじ』と呼ばないように」
「神宮寺神楽（じんぐうじかぐら）です。よろしく～♪」
「紋雛皐月（あやひなさつき）しめじの暴走を止めに来ましたよろしく」
「木村彩喜（きむらあやき）、よろしく」
自己紹介が終わり、三時間目終了の鐘が鳴る。
「じゃあね、みんな」と祢衣が言うと7組が自分の教室に帰って行く。

「どうした、こころ」
「へっ？」
——この任務が終われば、この賑やかで温かくて楽しい生活も終わりなのかな？　そんな事をこころは考えていた。

≪陽ノ宮高校　秋分祭　当日≫

「てめぇぇらァァッァァァァアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア集まってるかぁぁあああああああああああああああああああああああ！」
『いぇーーーーーーーーーい』
「もっと声出せやぁぁぁぁぁぁぁ！　それとも今温存してあとでハジケようっていう魂胆か？　ぬるい。は・る・か・にぬぅるぅぅうい。今ハジケられんねぇヤツがどうして本番だけハジケられる！　いいか？　無駄だと思う事も全力でやる。それがてめぇら陽ノ宮高校の生徒だッ！　わかったら声出せ、声！　盛り上がってるかぁぁ

ぁお前らぁぁっぁぁぁぁぁあああああああああああああああああああああああああああ！」

『うぉおお！』

「よし、悪い事だけはするなよ。後味悪いからな。あのテストを乗り越えたんだ。先生方も少しの事なら大目に見てくれる。いや、俺が許す。今日はハメ外して楽しめぇぇぇええええええええ。陽ノ宮高校秋分祭始まりだぁああああああああああああああああああ！」

　校長が秋分祭開始の宣言をする。

『うぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！』

『…………これで、校長先生のお話を終わります。前半仕事のある生徒は仕事の準備に取り掛かってください』

　アナウンスが鳴り響く。縫たちは準備のため更衣室に向かう。

「に、しても縫、相変わらず校長の声のボリュームは凄いな。マイク無しであの音量かよ」

「そうね、全生徒の声を打ち消すほどだったものね」

「わたしもびっくりだよ。この間の朝会の声がＭＡＸだと思ってたのに」

「こころちゃん、噂によると近所迷惑で怒られた事があるからあれでも加減してるんだって」

「そうなの？」
「ああ、あれな。何でも近隣のガラスを声で割ったとか」
「へぇー」
「……さて、着替えも済んだし教室に向かいましょう」
四人は教室に向かった。
教室に行くとまだ一人しか来てなかった。
「えっと、時間、間違えてますよ」
そこにいたのは見た事のない少女だった。
「そうだな、お前を私は見た事がない」
「この子可愛いね～」
「7組にはこんな子いないよ」
祢衣の発言で三人は固まる。
「えっと、誰？」
「誰って酷いな～、私です」
「まさか、委員長？」
「うん」
「髪長いぞ」
「ウイッグだよ」
「声が違う」
「薬を調合してね、声を変えた」
「目の色まで違う」
「カラーコンタクトだよ」
「別人じゃないか！」「わかるわけないよ」「えっ？　委員長？」
「男の子がこんな可愛いわけないじゃない！」
四人は驚きのあまり我を失う。
そこに7組のメンバーがやってくる。
「遅くなったな～」
「うぉ、こっちはこっちで……」
締野元治。歌舞伎の名家、締野家の跡取り息子。祢衣と同じくメイドグループに抜擢された。

「男だとわかってるがあえて言おう。キレイだ」
那癒多は若干の敗北感を覚えながらも締野を賞賛する。
「おぅ、ありがとう。委員長も凄いな～最早別人だ」
「わかるのか？」
四人が気付かなかった女装を瞬時に見抜く。
「ああ、仕事柄男女の区別は付く」
あまり役に立たない特技だった。
「そろそろ時間だよ。みんな準備は良い？」
紋雛が時計を見ながら急ぐように促す。
「うん、大丈夫だよ」
縫は返事をする。
「じゃあ、みんな集まって」
紋雛の呼びかけで円陣を組む。
「メイドチームC、ふぁいと～～、おーー」
仕事（戦い）が始まった。
開始数分で教室は客で溢れていた。

『祢衣ちゃぁあああああああああああああああああああああん』
『こころちゃぁあああああああああああああああああああああん』
『締野くぅうううううううんんんんんんんんんん』
特にこの三人が目的で来る客が多かった。
「那癒、新しいお客さん案内して」
「あいわかった」
客が店に入ると。那癒多は、
「おかえりなさいませ……なんてどうしていわなきゃいけないんだ。ばーか」
客に対して棘のある態度を取っていた。
縫と紋雛も流石に怒ろうとしたが……。

『もっと……もっと叱って下さい。下賤な私めをもっと罵って下さ

い』
『僕も僕も』
……客が喜んでるので良しとした。
「那癒～コップ運んで」
「承知」
ガンッ、コップを音を立ててテーブルに置く。「ふん」という素っ気無い態度を取る。
今度こそ怒ろうとする縫と紋雛だったが……。

『うはっ、最高だよあの態度！』
『しかも、あれは天然だ。天然のツンだ、天然記念物だッ！』
……やはり客が喜んでるので良しとした。
「何だかんだで那癒も人気者だな～」
「結構繁盛してるわね」
「そうですね紋雛さん」
似たもの同士なのか、自然と気が合う二人は気付けばこうして話す仲になっていた。
「皐月でいいのに。一緒に作業してる仲なのに。」
「じゃあ、私は縫でいいよ」
「わかったよ、縫」
いきなり、皐月の眼光が鋭くなる。
「しめじ、番傘回すなっ！」」
「いつもより多く回してまーす～。……紋雛、しめじ言うな！」
締野担当の肩書きは伊達ではなかった。

「いらっしゃいませ～」

その日、陽ノ宮高校伝説、『赤羽ライン』に次ぐ伝説、『謎の美少女』が追加された。
メイドグループは大繁盛だった。

仕事を終え、メイドグループ女子組は更衣室にいた。
「思ったより疲れたな～」
「そうね～、那癒大人気だったもんね～」
「何かあいつ等きもかった。怒ると喜ぶし、怒らなくても喜ぶ。どうして良いかわからなかった」
「でも、良かったね～。好評だったよ～」
祢衣は那癒多の方を向いて微笑む。
（くっ、これがかつてかの王国を滅ぼした笑顔か……）
那癒多は祢衣の笑顔を拝み倒した。
「祢衣ちゃん！」
「えっ？　何……きゃ！」
フラッシュ。デジカメで祢衣を撮る。
「飛鳥さんに頼まれてたんだ～。祢衣ちゃんのメイド姿」
「びっくりした～。そうだったんだ～」
「皐月ー、この後どうするの？」
「未定。……ああそうだ、先生に用事があるんだった。じゃあ」
早く着替えを済ませ、足早に去って行く。
「縫ちゃん、わたし執事喫茶行きたいな～」
心なしか声が弾むこころ。
「良いわね」
（こころ本当に楽しそう。何だか娘みたいで可愛いな……。……鳴海先輩……無事かな……来年の学祭は一緒に行きたいな……）
「こころ、何時になく行動的だな」
（最近のこころは最初の時とは大分印象が変わったな）
「えっ？　そうかな」
「こころちゃん楽しそう」
（良かった……私はこころちゃんのこういう顔が見たかったんだ）

「うん、楽しいよ。とっても楽しいよ」
（こういう日々が続けば良いな……いつまでも）
「ふむ、じゃあ行こう」
四人はそれぞれ想いながら、執事喫茶に向かった。

「いらっしゃいませ、お嬢様」
「ど、どうも」
縫達のメイド喫茶と同じく九人執事がいる。その内一人は執事というよりホストだった。
『笠原くーーーん』
「なんだい？　仔猫ちゃん？」
『きゃーーーーー』
那癒多は笠原に冷たい視線を送った。
「縫、あれどう思う？」
「ないわ」
「祢衣ちゃんどうああいうの」
「周波数が合わないかも」
「いらっしゃいませ。ご注文はお決まりでしょうか？」
「どーする？」
「水四つ」
「かしこまりました」
執事が奥に消えてゆく。
「那癒、決断早かったね」
「忘れたのか？　私達は一応売り上げを競っているんだ。下手にジュースでも頼むなんて馬鹿な事出来るかぁ！」
「おお、いつになく気合入ってるねぇ」
一応メニューを覗く。
「これ……ただのファ〇タじゃないか。五百円？　ぼったくりか？」
「ああ～楽しい」
「今日のこころちゃんの感覚計り知れないよ！」

入ってから十分程で終了。回転率を上げるために制限時間を設けていたようだ。
「ふぅ、何か疲れた」
「でも面白かったよ～」
「こころ、大丈夫か？　お前はそんなキャラじゃなかったはずだ！」
「ふふ、こころちゃんは純粋に楽しんでるだけだよ」
「祢衣とこころは一緒に住んでるんだもんな、その祢衣が言うならそうだろうな」
「次はね～」

その時、こころの携帯が鳴った。

「ああ、みんなちょっと電話来たから見ててていいよ、すぐ行くから」
「じゃあ、実験室で待ってるから後から来てね」
「うん」
三人が実験室に向かって走ってく。

「はい、二ノ宮です」
『執行人二ノ宮絵心、事件に関係してる人間を抹殺せよ』
こころの中の時間が一瞬止まる。言葉の意味が理解出来なかった。
「……どういう事ですか？　それに関係してる人間って？」
『事情が変わった。『歯車』を知っている人間、関わっている人間その全て消す事になった。正確な関係者の名を挙げるなら鳴海縁、迷走鬼組、迷走鬼縫、裁、赤羽那癒多、癒美、葵祢衣、黒陽飛鳥。見つけ次第、葵詩衣他協力者全員だ』
「……殺害する必要の無い人間まで入っていますよね？」
『二ノ宮絵心、お前は何だ？』
「……わ、わたしは『四之宮』の執行人、二ノ宮絵心です」
声が震える、冷静さを保つのが難しい。
『そうだ、お前の代わりはいくらでもいる。他の者が代わりに殺す

だけだ。その場合はお前にも死んでもらうが』
「そうですか、わかりました。しかし、今すぐというのは無理ですよ」
『わかっている。今殺せというわけではない。歯車の破壊後だ。わかったな?』
「はい」
こころは携帯を切る。自然に手に力が入る。
「何で……なんでよ? どうして「わたし」の大好きなものはこんなにも簡単に崩れるの?」

第15話　9月（4）　秋分祭（後書き）

気付けばこんなに書いてたんですね。何だが不思議な気分です。
引き続き感想募集中です。誰かの意見は本当に参考になります。
なにより、やる気が出ます。宜しくお願いします。

間　章　9月（4）　『わたし』の心

――楽しかった時間が終わる。

――それが決まっただけ。わかってたんだ、こうなる事は。

――みんなと出会って、わたしは今までの人生を振り返った。

初めて会った時なら殺せた筈なんだ。

でも、今は違う。鷺ノ宮が無限の影に包まれて両親が死んで一人ぼっちになって。

『四之宮』に拾われて、ずっと『私』は一人。ずっと一人で仕事をこなしてきた。意味を考えてはいけない。

考えたらきっと『私』は執行人を続ける事が出来ない。

それすら無くなれば『私』なんかに居場所はない。

また一人になる。いや、ずっと一人だったんだ。一人でいる時間が多すぎてそれすら気付かなかったんだ。

祢衣ちゃんが『私』の心を救ってくれた。『私』は『わたし』を取り戻す事が出来た。

……嫌だな、この楽しい日々が終わるのは……。

「みんなが待ってるけど、こんな顔じゃ……こんな気持ちじゃみんなの顔見れないよ……」

顔が赤いのが鏡を見なくてもわかった。

私は実験室には行かないで、一人屋上に向かった。

空がこんなに広いなんて初めて知った。

「空を見上げて星を見るなんていつ以来だろう。咲炉と一緒に良く見に行ったっけ？」

一人で見る空がこんなにも寂しいなんて……。ああ、思い出さない方が良かったのかな、わたしにはもう孤独は辛すぎる。「わたし」

はもう「私」に戻れない。

「こんな所にいたのか～」

背後から声がする。足音は三人、間違いなくみんなだ。

「縫が馬鹿やってな。鍵を家に忘れたんだ。結果、実験室に入れないでこころの所へ戻ろうとしたんだ」

「それで、こころちゃんがここに上がって行く所を見かけてこっそり付いて来ちゃいました。これってストーカーかな？」

祢衣ちゃんが笑う。わたしは胸を締め付けられる気持ちになった。この子に酷い事をしようとした……。

普段の私なら気配で気付けたはずなのに、そんな事にすら気付けなかったのか。

『ひゅ～、バン』

空が花が咲く。夜空の黒いキャンパスが彩られる。

「花火？」

「縫、もしかすると、ここは……これが穴場か？」

「そうね、気付かなかったけど」

「……こころちゃん何で泣いてるの？」

「えっ？」

わたしは祢衣ちゃんに言われて気付く。

泣いてたのか、また。どんな事があっても泣かなかった私が今、泣いてるのか。

わたしは涙を拭う。

泣いたのはきっとここが居心地が良いから暖かいからだ。

「どうした？　転んで怪我でもしたのか？」

「那癒じゃあるまいし」
「自分の店の戸で指挟んで三週間包帯巻いてたヤツに言われたくないな」
「――ッ。それを言われると辛い」
「フッ」
私はすぐに笑顔になる。居心地が良いな。もうここはわたしの場所はここなんだ。
「わたし達って友達なのかな？」
「今更すぎるんだが」
「改めて聞かれると恥ずかしいね」
「もう、こころちゃんったら。私なんて一緒に住んでる仲だよ。もう友達という域を超えて親友だよ」
「ずるいぞ祢衣」
「私も私も！」
目が熱くなる。みんなずるい。
いっそ嫌いって言ってくれたら楽だったのに……。
「うぅ、う」
「泣かないでこころちゃん」
「あ～あ、泣かせた」
「あんたは少し黙ってなさい」

わたしはみんなの前で泣き崩れた。
わたしの存在はみんなの中で確立されていた。
わたしはみんなの事が大好きだ！

だから、別れるのが、殺さなきゃならないのが死ぬほど辛かった。
いっそ死んだ方がマシだと思った。

間　章　9月（4）　『わたし』の心（後書き）

短いですけど、まぁ、前回と前々回が長かったからその分で補完ってことで。

次は9月から12月に飛びます。お楽しみに！

第16話　12月（1）　探偵と魔弾の魔術師

――3ヶ月後　12月

迷走鬼縫は病院に向かっていた。先日、鳴海縁が入院している事を知ったからだ。
電話で彼が無事だという事を知って、縫は心底安心した。
詳しい事は本人に訊く。訊きたい事は山ほどあるのだ。
病院に入ってすぐに、見慣れたお団子頭の少女と遭遇する。
「お、縫じゃないか、どうした？」
「那癒、那癒はどうしたの？」
「母のリハビリ、と、私の定期検診だ。こんなに多くの人工臓器を詰んでいるんだ。須久井でも心配なんだろ」
「成る程」
納得する。そう、那癒多は夏に死に掛けた。もちろん、縫もその事を覚えている。
「縫こそどうした？」
「べ、別に」
「ふ～ん。怪しいな」
ペロッ。那癒多は縫の顔を舐めた。

「こいつぁは甘ったるい、恋の味がするぜ」

見透かされた。まずい、逃げなくてはそう思った時の事だった。
「赤羽さん、来て下さい」
救いの船が来た。受付が入り口のすぐ側にある事を病院の設計者に感謝した。
「はーい」那癒多は縫の方を向いて「……覚えてろよ」と睨みながら言った。

受付のアイに部屋の番号を尋ねる。祢衣がそうだったように、階段を使うように言われた。

そして、祢衣と同様、迷った。あの狂気の少女の部屋が無かった事がせめてもの幸いである。

「失礼します」

ノックして中に入る。

そこにいたのは、衛と鳴海だった。

「おお、良いタイミングで来たね」

「須久井先生」

「こいつも今起きた所なんだよ」

「そうですか」

縫が見た限りでは何処も怪我をしている様子は無かった。

（よかった……）

縫は安心する。

（これで……、）

「鳴海先輩！」

「縫……？」

『バゴン！』

縫は顔面に蹴りを入れる。綺麗に吹っ飛び、壁に全身を打ち付けられる。

（全力で問いただせる）

「さぁ、吐くんだ、鳴海先輩！　何があった？」

「……わかったよ、言うよ、全部話すよ」

渋々口を開く。出来れば話したくないらしい。しかし、命には代えられない。鳴海は一瞬三途の川が見えたという。

「俺は、今回の事件の犯人に狙われていた。事件を調査しようとしていたからだ。あの時、撃たれた瞬間に魔術で姿を消した」

「鳴海先輩が魔術を？」
意外だった。鳴海が魔術師だという実感はいまいち湧かなかった。
「で、一昨日かな？　銃で撃たれた」
「左胸を正確に撃たれてね。心臓が右側に無かったら今でも眠ってたよ」
「そこは神様に感謝だ」
鳴海の心臓が右側にあることは犯人にも予想外だっただろう。
「で、だ。これが俺が調べ上げた内容だ」
膨大な資料、「探偵」である事を改めて実感させられる。
「だけど、これは見せられない。見せたらお前にまで被害が及ぶ」
「えい」
「――――ッ！」
縫の左ストレートが鳴海の右を打つ。
「あの、縫さん？」
「先生、そこのアホを押さえてて下さい」
「イエスユアハイネス」
「ＳＰＥＬＬ　ＣＯＤＥ：ＲＥＡＤ」
書物の内容を瞬時に理解するコード。材料が純金という事もあり、縫自身も使わない様にしているコードだった。
「理解しました。これで、私も鳴海先輩と同じ立場ですね」
「お前、自分が何したかわか―」「どれだけ心配したと思ってるんですか！？」
縫は感情を剥き出しにし、怒鳴り込む。
須久井は音も立てずにその場を去った。
「いきなり消えたりして……私の身にもなって下さい！　借金が出来たから別れるしかないって言われて、その後、元の関係に戻れると思ったらいきなり消えて……私……私……」
「……縫、悪かった」
縫は鳴海に抱きつき泣いた。
そこに、

「あ、鳴海と縫か、ちぃーす」
那癒多が来た。
「赤羽？」
「何だこの紙……！」
資料を読み上げる。そして、そこに書いてあったのは、
「祢衣の母さんが犯人？　私達、夜の狩猟者を襲った犯人の仲間？」
那癒多にとって衝撃の内容だった。

――12月31日大晦日

鳴海は最後の精密検査を終え、病室に戻ってくる。
そこには二人の少女。
「鳴海先輩、治りましたか？」
「問題ない。元通りだ全快だ。」
（これで、何かあれば蹴れる）
（これで、遠慮無く殴れる）
縫と那癒多の思考が一致した。
「居場所は何処だ？　あの資料には載ってないんだが」
あの日、那癒多は、少しの間動揺したが、「祢衣の母さんに直接事情を聞くしかない、鳴海なんか……こんな資料信用出来るか！」と吹っ切れていた。
「命懸けだった。撃たれた瞬間に発信器を付けたんだ」
「プロですね」「プロだな」
二人ともそこ『だけ』は評価した。
「犯人の本拠地は陽ノ宮鍾乳洞」
「陽ノ宮鍾乳洞って龍脈がある場所ですよね？」
「そう、四之宮にある四大龍脈の一つ、「陽ノ龍」のある所だな」
「でも、そこは厳重な結界で守られているはずだぞ」

夜の狩猟者は管理者により、龍脈を守護の使命を請け負う事もあるので詳しかった。
「そう、だから今まで見付からなかった。まさか、犯人がそんな所にいるとは思わないし、そもそもそこに入れる人間は限られる」
「ああ、二人とも来てたのか」
衛が鳴海の病室に入る。
「衛、もう外出ても問題ないよな」
「問題ない。てか、出てけ。この健康体！」
「へいへい、出てきますよ」
「あと、これ持ってけ」
「ん？」
衛は鳴海に何かを投げる。投げ渡されたのは車の鍵だった。
「お前車持ってたっけ？」
「貰った」
「へぇーありがたく拝借させて貰うよ、行くぞ」
「ああ」「もちろん」
三人は駐車場に向った。

「何だ……これは？」
駐車場に向かうと黒い布を被さった車があった。
「これだよな？」
「そのハズだ。須久井が言ってたのはここだ」
「えい」
迷走鬼が何の躊躇いもなく布を取る。その勇気は賞賛に値する。
「……え？」「……は？」「……うわぁ……ないわー」
驚愕する。病院の駐車場にこんなものがあることに。那癒多に関して言えば若干引いている。
「こいつは……また凄いな」
漆黒のフィルム。車としては必要のない装甲。戦車に近かった。
いや、戦車を一般道で走れる様に改造した車と言うべきだろう。

本当に、駐車場に在るという事が不自然だった。布を被せられていたのもわかる。
　鳴海は鍵を使って車のドアを開ける。
運転席に鳴海が座る。そこから後ろの鍵を開けると、後部席に二人が車に乗り込んで来る。
「何だ？　これ。こんな座り心地良い椅子始めてだぞ」
「空気清浄機付いてる！」
内装は宇宙人関連の仕事をする黒服のエージェントの車と大差がなかった。
「じゃあ、出発するぞ」
『手動か自動、モードを選んで下さい』
車のナビがモード選択を促す。無駄なハイテクノロジーだった。
「喋った！」
『どうしますか？』
「自動運転で頼むよ」
『了解しました。目的地を指定してください』
「陽ノ宮鍾乳洞」
『予定所要時間は十分です』
後部座席で那癒多が口を開く。
「……縫、嫌な予感がする」
「奇遇ね、私も」
普通、ここから鍾乳洞までは十分では着かない。『絶対』に着かない。瞬間移動にしては時間が掛かりすぎるし……残る可能性は……。
「シートベルト締めておいた方がいいな。きっと」
那癒多が促すと、縫はシートベルトを探し始める。
「えっとシートベルトは……」
ところが、シートベルトは見当たらなかった。
『後部座席のシートベルトを締めますか？』
「あ、はい。お願いします」

縫が頼むと自動でシートベルトが締まる。
「那癒、この車凄く欲しい」
「私もだ」
『では、出発します』
ナビゲーションシステムがそれだけ言うと猛スピードで走り出す。
「ぎゃぁあああああああああ」「おぉー」「うおぉおおおおおおおおおおおおおお」
「な、ゆ……」
「しゃ……べるな。舌噛む」
「トントントン（ならモールスで喋る）
「トントントン（便利だな。モールス）」
「トントントントン（てか、何でお前らモールス使えるの）」
縫はドラマの影響、那癒多は夜の狩猟者で必須、鳴海は探偵という事で勉強して覚えた。
『後、五分で着きます』
「トントントン（てか、今どこ走ってるの？）」
「トントントン（走ってない。飛んでる。私にはわかる。ここは上空だ）」
「えええええええええええええええええええ！」
「トントン（舌噛むぞ）」
鍾乳洞に着くまでモールス会話が続いた。
『目的地に到着しました。お疲れ様でした。シートベルトを解除します』
しばらくして鍾乳洞に着く。
そうナビは告げるとシートベルトが外れ、ドアが開く。
「ちょ、ちょっと休憩を提案……する」
「はぁはぁ……鳴海先輩もたまには良い事言うんですね」

生意気な口を利く迷走鬼も今回ばかりは元気がない。陽ノ宮ランドのアトラクションにも引けを取らない絶叫マシーンっぷりだった。
「あれ？　どうした。二人とも何をばてているんだ？」
「赤羽お前、何ともないの？」
鳴海は息を切らしながら情けなく声を振り絞る。
「最初はびっくりしたけど、後半はジェットコースターみたいに楽しかったぞ」
那癒多の常人を超えた身体能力の前では、あの程度のものは生温かったらしい。
「流石だわ」
「さて、俺達のする事を確認する。まず一つ目、犯人の確保。二つ目、歯車を破壊する。以上の二つだ」
「私はスペルコードを駆使して要所要所で時間稼ぎをする。その間に……」
「私が破壊すればいいんだな」
「その通り」
「ところで先輩」
「何だ？」
「そもそも先輩って何でここにいるんですか？　無理しなくても良いのに」
縫はスペルコードを持ち、那癒多も高い戦闘能力を持っている。全快したとはいえ、病み上がりの鳴海がここにいる必要も無かった。魔術を使えるにしても、那癒多ほどの戦闘能力を有しているとは思えなかった。
車も自動運転、とことんいる意味がない。
「ああ、それはだな。すぐにわかる」
十分程休み鍾乳洞に入ってゆく。そうすると一つの看板が立てられていた。
『この鍾乳洞はランクＡ以上の魔術師以外は結界により入れないま

せん』

鳴海ははそれを読み上げる。

「という事は私達は入れないじゃない」

魔術ランクAランクというのは、月ノ宮の魔術師の平均より少し上の層の事である。

「これをお持ち下さい、お嬢さん方」

鳴海が渡したのは紙切れだった。

「紙？」

厳密にはA４の紙を四つ折りにした紙。鳴海の魔術に必要な物だ。

「それを持ってれば、結界はお前達をランクA魔術師と錯覚する。ただし鍾乳洞の中に限る」

「本当かしら？」

半信半疑で看板の先の境界線を越える。

「あ、入れた」

「成る程だ」

「何がわかったのよ？」

「鳴海の魔術の正体がわかった。うむ、成る程」

那癒多はにやり、と笑い納得する。

「お前ら、お喋りはそこまでだ。来たぞ」

そこにいたのは夜の獣。数を数える気を殺ぐ様な圧倒的な量。鍾乳洞を埋め尽くす程の獣達がそこにいた。

「縫」

「何ですか？」

「約束だ、消えるのはこれで最後だ。悪いな」

それだけ言うと鳴海は姿を消した。

「えっ？」

「……縫、鳴海消えたな。まさか、本当に消えるとは……流石だ」

那癒多は珍しく賞賛する。

「那癒、先輩の魔術がわかったなら、先輩の立場になって考えてみて。この状況、那癒だったらどうしてた？」
「うーん、十中八九逃げてたな。一人で行動する事で発揮される魔術だし」
「そうか……。じゃあ、さっさと進もうか」
縫の目には迷いはない。あるのは決意だけ。「もう一度先輩と会おう」。それだけだった。
縫は鞄から瓶を投げる。
「ＳＰＥＬＬ　ＣＯＤＥ：ＰＲＯＭＩＮＥＮＣＥ！」
そのコードは名の通り太陽の現象を再現しようとしたコード。地上では過ぎた火炎が獣たちを襲う。

『グルルゥゥゥッゥゥゥワワワァァァァァァァァァァァァァァァァァァ』

獣達の呻き声。
このコードの火炎は周辺の獣を焼き払うには充分過ぎた。
「縫、これお前作ったのか？」
「いや、これは母さん。出発の時持ってけって」
「お前んち、こえぇぇぇー」
「そういう那癒も何か渡されたんでしょ？」
二人は鍾乳洞に行く前に、色々と渡されていた。……まるで、この日が来ることを知っていたかのように。
「まぁな、多分使わないと思うけど。……それよりこいつ等まだまだ涌いてくるぞ」
「確かにこれは鳴海先輩の判断が正しいって事か」
「逃げるが勝ち。相手するなって事か？」
「そうね、ＳＰＥＬＬ　ＣＯＤＥ：ミレミアム１３―完全時間静止―≪ＳＴＯＰ！≫」
瓶を投げ付けると辺り一帯の獣達の動きが完全に止まる。調整に

より、後一時間は止まる様にしておいた。
「那癒、行こう」
二人は走り出す。
「さっきのは……私の命を救ったコードか」
「う、うん」
縫は照れ隠しに俯き黙る。
「照れるなって。てか、そのコード無敵じゃね？」
「スペル・コードっていうのは魔力配列で能力を発揮するから、ある程度の魔術師になると効かないのよ」
「自身の魔力で魔力配列を変えてくるって事？」
「話が早いわね。魔術師って大概自分の周りに魔術防壁張ってたり使い魔に守らせたりしてるから……」
スペル・コードを「決まった魔力配列」をしている。
しかし、魔術師は魔力を自在に変化させている。魔力は魔力に干渉できるため、スペル・コード発動時に妨害されると、スペル・コードは正常に働かないというわけである。
「そうか……じゃあ私も魔術師と戦う時は気をつけよう」
「那癒は何も考えなくて良いと思う」
「どういう事だ？」
「だって近接戦闘でインパクト系のコード放っちゃえば、いくら配列乱しても、ダメージを与えられる」
「まぁ、そうだな」
「私、考えたんだけどね、近接戦闘なら私達も魔術師も大した変わらないと思うの」
「何でだ？」
「近接戦闘になればなるほど魔術師は長い詠唱魔術は使えない。詠唱なしで使える魔術ならスペルコードの方が強い。ならコードと体術を駆使すればどんな魔術師にも勝てるんじゃないかって事」
「ＲＰＧで呪文詠唱中に殴るとか、戦隊ものやライダーシリーズの

変身中に攻撃するみたいな事だな」那癒多は思わず笑う。あまりにも現実的過ぎるからだ。作りものでは禁じ手でも、現実では有効な手というわけか。

「でも、その前提として、私がその魔術師より体術の腕が上じゃないといけないんだろ？」

「まぁね。それだけが難点なのよ。それさえクリア出来れば良いんだけど……」

「それって難しいぞ。やっぱり」

魔術師の多くはそれに備え、身体を鍛える。詠唱前に殴られることはわかっているからだ。現実的な魔術戦では、肉弾戦も割と多い。肉体強化魔術や痛覚遮断の戦闘補助魔術まで使える。

やはり、近接戦闘においても魔導師は一歩遅れるのだ。

「そうか」

「しょんぼりするなよー。お前らしくないぞー。キャラ崩壊ですかー？」

そんな事を話してながら進んでいると、広い場所に出る。

そこは広間になっていた。

「何……これ？」

二人は青ざめる。恐怖とかそんな単純な言葉では表現できなかった。文字通り「理解出来ない」光景がそこに広がっていた。

そこにいる今回の犯人にもその状況が理解出来ていなかった。

「どういう事だ！？」

犯人は二人に気付いていなかった。それほど余裕を持てないのだろうか？　確かにこの空間はそこにいるだけでまともな感覚を失わせる力を秘めていた。

そこにあるのはのは死体。数えられない位の無数の死体。地面は「それ」で埋め尽くされている。

――鳴海の『死体』で。

その屍の上に立つのは二人。一人は犯人、小折玲。もう一人は鳴海縁本人。

「ああ、遅かったな」

「鳴海先輩？」

「大丈夫だ、鳴海の魔術だな。わかってても気持ち悪いなこれ。うえぇ」

ふざけて吐くふりをすると、本気で吐きそうになる、が何とか耐えた。

「何だ……この魔術……こんな魔術……私は知らないぞ！」

玲は狼狽する。それだけで鳴海はこの間撃たれた借りは返せたと思った。だから教えることにした、自分の魔術を。

「教えてやろう。赤羽の言う通り。これが俺の魔術。『認識改竄』の魔術だ」

「認識改竄だと？　そんなふざけた魔術に私は手こずっているというのか？」

認識改竄、幻覚を見せる魔術だと理解しても良い。きわめて高度な幻覚だ。五感に働きかけ、自分の思うがままに、相手を錯覚させる。

ふざけた魔術というのは、この魔術では直接的攻撃を加えられないと言う事だ。

つまり、玲は、この魔術を無視しても問題無い。時間稼ぎを強いられているという事だ。

「そうだ。だが、お前には何も出来ないだろ？　突破できないだろう」

「――くっ」

ハイルの魔力探知能力を使っても、それを見る玲に幻覚が作用し

ている限り、玲は本物の鳴海を撃つことは出来ない。
鳴海は玲を見ると不敵に笑った。
「さぁ、お前らは奥に行け。歯車を壊して来い」
鳴海が怖れていた事、それは自分以外が玲と戦闘する事だった。
縫はコードを持っていたとしても、基本戦闘能力が低いので話にならず、那癒多は実戦経験も多く、戦いにはなるが、どうしても遠距離武器で戦う相手には分が悪い。
だから、先に対峙する必要があった。玲の集中力を削ぎ、二人を先に進ませるために。
「させるか！」
銃を構える。
「小折玲。あんたはその二人を『認識』出来なくなる」
言霊によって魔術を発動される。
「くっ……」
それが鳴海の魔術。この空間において鳴海は宣言するだけで相手の視覚を操れる。撃たれたときも撃たれた瞬間、自分という存在を改竄した。
「さぁさぁ、どうします？」

『パァァン』

闇雲に銃を撃つ。それが当たる筈もない。玲が銃で撃ったのはやはり紙。
紙が鳴海の身代わりになる。完全に自分の存在を改竄するには相当の魔力が必要なため、乱用は出来ない。
なら、鳴海は何故この魔術を使えるか？　鳴海には咲嵜や祢衣や飛鳥の様な刻印魔術は使えない。
答えは簡単だった。魔力を通しやすい特性の紙に魔力を馴染ませた。紙から魔力自分に戻す事により、この魔術を使い得ているのだ。
しかし、さっき二人を逃がすために使った魔術で、魔力の紙は殆

ど底を尽きてしまった。もうほとんどの紙が普通の紙切れになってしまった。

紙が玲には鳴海に見える。

屍の山は紙の山。

ひたすら打ち続ける。何が気味悪いかというと、玲自身は魔弾を全て命中させていると言う事だった。撃つたびに、「確かに殺した」という感覚が五感を通して伝わってくる。

「それも外れだ」

鳴海は手持ちの紙を破ってばら撒く。魔力のこもった紙を消費してゆく。

「何なんだよ……何なんだこいつ！」

「さぁ、どうする？　数撃ちゃ当たるって言っても弾ないだろ」

鳴海が言っている内についに玲の魔力が尽きる。

「俺の勝ちだな」

鳴海は勝ちを宣言する。しかし、鳴海は近づかない。知っているからだ、小折の魔術を、ブラック・アウト症候群の正体を。

「どうしたんだい？　近づいてこないけど」

「俺が初めてブラックアウト症候群を知った時。最初は持病を持つ人間が起こす合併症か何かだと思っていた」

鳴海は自分の推理を語り始めた。

「でも、患者のリストを見て考えが変わった。魔術師、魔導師、掃除屋・夜の狩猟者。しかも魔術師は弱い魔術師ばかりだ。自分で結界を張れない様なそんな魔術師だ。だから、これは魔術的攻撃だと考えている」

「根拠は？」

「知り合いの医者にブラックアウト症候群の患者のレントゲン写真を診せて貰った。心臓にダメージを受けている事が素人の俺にでも判る位わかりやすく写っていたよ。

それに、俺自身撃たれたしな。

ご苦労な事だ。沢山の人間を殺さないように昏睡状態になる程度

のダメージを与え、マスコミなどに情報を流す。世紀末って事でネタを欲しがるヤツは山ほどいるからな。気付けば、ブラックアウト症候群なんて呼ばれる始末だ……本当に滑稽だ」

「ふふ、ふふふ。ふはははは」

小折は高らかに笑い始める。鳴海の推理は的中していた。これ程愉快な事は無い。

「正解だよ、大正解。そう、ブラックアウト症候群の正体。私が狙撃しただけ……本当に笑えたよ。マスコミに少し情報を与えただけで、ただの狙撃が感染症や呪いになったんだから」

「ブラックアウト症候群の正体、それは魔弾に超遠距離攻撃」

「そういう事」

「ハイル、魔力集約」玲は、ハイルに念じる。普通の場所では意味を成さないが、ここは龍脈。魔術師に魔力を与えるパワースポット。ここでなら、ハイルは無限に魔力を集め、玲に与える。

「連散！」

『ダダダダダ』

機関銃の様に弾が放出される。

「あっぶね」

一発だけ魔弾が鳴海の髪を一束掠め取ってゆく。

「あなた、もう自分の偽物を作る魔力は残ってないみたいね」

「ちっ、良くわかっていらっしゃるよ」

「的が多いだけ、なら撃っていればその内当たるわよね？」

無限ＶＳ有限。

小折は無限に有限の鳴海を打ち続ける。本物を射貫くまで……。

第１６話　１２月（１）　探偵と魔弾の魔術師（後書き）

今回も自分の文章力の無さに絶句しました。言葉が出て来ない～。呪いかと思いましたよ（笑）

相変わらず誤字脱字があると思います。もしあったら気軽に教えて下さると助かります。

「そもそも、ここの意味がわからん」という場合は早急に改稿したいと思うのでよろしくおねがいします。

第17話　12月（2）　決着！

二人は鍾乳洞の奥を走っていた。
「縫、鳴海を一人だけ置いて来て良かったのか？」
迷いもなく走った縫に那癒多は訊ねた。
「残念だけど、あの魔術師にはコードは効かない。私はコードが効く事が前提でこの戦いに挑んでるんだから」
「成る程な。でも、私が残るって手もあったぞ」
「那癒、多分先輩はそれも避けたかったんだと思う」
「何でそう思ったんだ？　通じ合う二人の愛がなせる技か？」
「はいはい、そうですね」
若干照れるも、否定はしなかった。
「あの場に鳴海先輩が残って私達を先に行かせたから」
「ちょっと過大評価じゃないか？　勝手に先に行って、勝手に先に行けなんて……」
「仮にそうでなくても、那癒に遠距離攻撃の魔術師の相手は務まらない。違う？」
「確かにそうだな。うん、その通りだ」
右手で左手の手の平をポン、と叩き納得したポーズを取る。
「だけど、困ったな……」
「そうだな、あいつがやられたら結界で私達は死ぬんだもな……多分」
「……」
「……」
黙り込む、龍脈の結界は強力で、死に繋がるからだ。
「――！」那癒多は鍾乳洞の奥の人影に気付く。
「むっ、誰かいるぞ」
そこにいたのは一人の女性。先程の女とは違い幾分かは話が通じそうだった。

「葵詩衣……さん？」
鳴海から渡された資料の中に載っていた写真の女性だった。
「祢衣の母さんか？」
「ええ、そうよ。あなた達、祢衣のお友達？」
「はい」
「同じ学年だ」
「そう、改めて自己紹介をしましょう。私は葵詩衣。祢衣の母親です」
「どうも、赤羽那癒多です」
「えっと、迷走鬼裁です」
敵だというのに和む二人。祢衣の雰囲気はこの母にしてあるという事が証明された。
（調子狂う……おのれ、祢衣の母……可愛いな）
那癒多はこの状況でそんな事を考えていた。
「……まさか、癒美と裁の娘？」
表情が変わる。温和な表情から一転して無表情になる。
「ええ」
「まぁ、そうだな」
「そう……何かの因縁なのかしら。あなた達が私の邪魔しに来るという事は……」
顔が歪む、二人の母と何か因縁があるらしい。
「一応訊きますけどここを通す気は？」
「ないわね」
即答だった。その言葉からは確固たる意志が伺えた。
「残念だな」
それは、倒せなければこの先を通さないと言う事。
那癒多は大きくため息を吐く。
戦闘へと意識を切り替える。両手にグローブをはめる。
「那癒……」
「取り敢えず私が出るよ」

那癒多が構える。
那癒多の構え対して詩衣は何の構えず那癒多を見据える。
ただ、こっちを見て「さぁ、来なさい」と言うだけだった。
「うぉおおおおおお」
那癒多は人間離れした脚力で、一瞬で詩衣の懐に入る。にも拘わらず、詩衣は余裕の笑みを浮かべる。
那癒多の右ストレートが何の加減も無く放たれる。
「『ＳＰＥＬＬ　ＣＯＤＥ：ＩＭＰＡＣＴ『？』！」
腕のインパクト？が発動する。出来れば、インパクト？使いたくなかった。
那癒多の骨の折れる音と共に強烈な一撃が放たれる。
パシッ、という音がする。有り得ない事だが、手の平で受け止められる。夜の獣を砕いた一撃が詩衣には通用しなかった。
「！」
「那癒、距離を取って。」
「ちっ」
那癒多は縫の言われるがままバックステップで距離を取り、得体の知れないものを警戒する。
・魔術では無かった。
・体術ではない。
・コードを使っている様子もない。
「どうしよう……倒せるかな？」
「そちらから手を出さないなら私からは手を出さないわ」
「那癒、私が出ようか？」
「大丈夫だ。何なら、縫が先に行っても良いんだぞ。私の代わりに歯車を壊し行っても……」
「私じゃ精密な破壊は出来ない。手っ取り早く鍾乳洞ごと破壊する事なら出来るんだけど……」
「ああ、私頑張るから。うん、だから、ここに居て。居て下さい。お願いします」

このまま縫を先に行かせれば鍾乳洞丸ごと爆破するしそうな勢いだった。
「さて、どうしましょうかねぇ」
何故自分の攻撃が受け止められたか考える。
さっきの三点の内、どれかが間違っている。
――さて、どれだろう？　那癒多の短いシンキングタイムが始まる。

「駄目だ、わかんない」

本当に短かった。
詩衣は黙ってこっちを見ている。
「タイムで」
縫は手でTの字を作って宣言した。
那癒多は縫の近くまで歩き、とその場に座り話し合いを始める。
「わかんない。何されたのか、何したのか全然わかんない。私に頭脳労働を強いるなよ？　那癒多ちゃんは肉体労働専門なんだからな！」
那癒多はの謎の怒りは爆発させた。
「コード使っちゃう？」
「具体的に何があるんだ？」
「スペルコード・ポイズン」
「効果範囲を詳しく」
「周辺半径十キロメート……」
「却下。そんな大量殺戮兵器使ってどうする。対人戦なんだぞ。私達も死ぬぞ」
「大丈夫、私がガスマスク持ってるから」
「私や鳴海は見殺しか」
「じゃあ……スペルコード・スピードとか」
「物騒な名前だな。どういう効果だ？」

「倍速で動ける代わりに全身に痛みが走る」
「どれ位痛いんだ？　骨砕けるより痛いとか無しな」
「試しに象に使ってみたら動かなくなった」
「象が耐えられない痛みを私に強要するのか？　てか、試すときって普通ネズミとかじゃないの？」
「我がままねぇ」
「お前、本当に天才か？」
「母は天才ですが、私は凡才です」
「英文風に言うな！」
「……それより、さっきの話の続きなんだけど」
那癒多はちょうど突っ込みに疲れていたので、縫から話を切り替えてくれるのはありがたかった。
「何だ？」
半ば自棄になっている那癒多をよそに、縫は回答へと辿り着く。
母親、裁と癒美は詩衣の事を知っていた。
なら、二人に何か対策策を授けているに違いないのだ。
「那癒の母さん、那癒に何を渡したの？」
「ああー忘れてた。それが答えか」
縫の言葉で思い出し、ポケットから取り出す。かさばる物ではなかったので全てポケットの中に入れた。
「これとこれだ」
「こ、これは！」
その内の一つ。
その古びたメリケンサックには『？』の刻印が刻まれていた。
「インパクト？！？　封印された『インパクト』シリーズの最終形態。何人もの所有者を病院送りにしたという……」
「却下却下却下だぁ～～～～～！」
那癒多の絶対的拒否。インパクトシリーズは基本使用者の事を何も考えていないのだ。その最終形態を使うというのは正気の沙汰では無い。狂気の沙汰だ。

「何でよ」
「『？』で骨が折れ、『？』で骨が砕け、『？』でもっと恐ろしい事が待ってるんだぞ！
これ痛いんだぞ！　骨グシャグシャなんだぞ！　それでも友達に使えっていうのかよ？」
　必死の叫びに縫は諦めもう一つの可能性に賭ける。
「もう、ドラ○エと同じよ、どんどん面白くなってくじゃない」
「笑えない、無理。それに私はエフ○フ派だからよく知らない」
　談笑が始まりつつあった。
「しょうがいないな～、もう一つの方は？」
　もう一つの物、それはグローブだった。
「縫、これ何だかわかるか？」
「ちょっと待って……ああ、これ」
　縫は思い出したかのように言う。
「ＳＰＥＬＬ　ＣＯＤＥ：ＭＥＭＯＲＩＡＬだ」
「何だそれ？」
「良く知らない。母さんが持ってたから知ってるだけで……」
「私の家には無かった。インパクト？が私の母さんの、メモリアルが縫の母さんと考えるのが自然だな。取り敢えず、メモリアルを使うのが正解だと思う」
「？は使わないの？」
「嫌がらせだろ絶対。あの母親ならやりかねない」
「そうなの？」
「今まで何度苦汁を飲まされてきた事か……」
　胃が痛くなる。暗黒物質弁当での恐怖を身体が覚えていた。
　両手にメモリアルのグローブをはめる。
「隙を見て発動した方が良い。メモリアルは弾数ありのコードだから」
「そうだな、それにどんな効果を発揮するか分からないしな。慎重に使わないと」

「じゃあ、行って来る」
「健闘を祈る」
「おぅ」
那癒多は詩衣の元に寄って行く。
「待たせたな」
「いえいえ、別に」
「一つ訊いて良いか？」
「私に答えられる事なら何なりと」
詩衣は上品にお辞儀をする。
「私は馬鹿だから祢衣の母さんが何をしたいのかわからない。何のためにこんな事をしているか教えてくれないか？」
「貴方達には祢衣が世話になっている様だし良いでしょう」
了承し「……時間も稼がなくてはならないし」と呟く。
「私の目的は、私の夫であり、祢衣の父、葵文祢（あおいふみね）を生き返らせる事。それ以外に目的も何もない」
詩衣の目的を聞いた二人。縫は否定できなかった。誰だった想う人が居なくなれば会いたいと想うのは当然だ。自分だって実際そうだった。鳴海が死んでいたら、どんな手を使っても生き返らせたいと思う。
その願いを誰も責める事は出来ない。縫はそう思った。

しかし、那癒多は、

「へぇ、じゃあ私はやっぱりあなたの敵だ。はっきりして良かったよ。これで気兼ねなくぶっ飛ばせる」
何事も無かったかの様に構える。戦意喪失どころか、虎視眈々としている。
那癒多は両拳をあわせバンバンと鳴らし、手招きし挑発する。
夜の獣も言ってしまえばゾンビ、つまり死者。
それらを狩ってきた那癒多にはむしろ腹立たしいのだ。死は尊重

されねばならない。
　自分の父が死んだ時も、那癒多は受け入れ、哀しみ、その意志を継いだ。その過ごした時間を深く胸に刻みんだ。だから、こそ那癒多ははっきりと言った。
「――その野望、私が潰す」
「やれるものならやってみなさい。……肉体強化、高速治癒、痛覚遮断……」
　詩衣は近接戦闘に必要な魔術で自分を強化してゆく。
　結局、その正体は戦闘補助魔術だった。二人が到着する前に事前に掛けていただけだった。
　沈黙。二人とも動かない。緊張が続く。

「ふっ」

　先に動いたのは那癒多。小細工無し、正面から詩衣の顔面目掛けて殴り駆けた。
「甘い！」
が、かわされる。カウンターの要領でがら空きになった腹に蹴りを放つ。
「おっと」
　それを立った状態からのブリッチの体勢で回避する。バク宙し、攻めの体勢を取る。
　戦闘慣れしているだけあって那癒多は全く無駄のない動きを取る。
　それが、那癒多の強さであり、詩衣との差。二人の差は戦闘センスの差だった。
　目にも見えぬ速度で足払いを放つ。
「しまった！」
　体勢を崩す。間合いを取ろうとするも間に合わない。

「那癒、そこだ！」

縫が叫ぶ。
「ＳＰＥＬＬ　ＣＯＤＥ：ＭＥＭＯＲＩＡＬ！」
那癒多の掌底が詩衣の胸を打つ。
「くっ……」
詩衣に痛みはない。痛覚は遮断している。
だから、苦痛などある筈が無いのだ。
しかし、詩衣の顔は歪んでいた。苦しそうに息を切らしている。
「や、止めて」
詩衣はその場に倒れ込む。
「やめて」
苦しみ目が虚ろになってゆく。
「やめて……」
頭を抱えて苦しむ。涙を浮かべ最後に、
「何でまたこの瞬間を思い出さなきゃいけないの？」
と言って眠るように意識を失って行った。

「はぁはぁはぁ」
「ふぅ……」
双方が息を切らす。あれから数十分。
それ程時間は掛かっていないように思えるこの闘いだが、鳴海にとっては違った。もう何時間も戦っていると錯覚している。
当たれば即敗北の上、自分の魔術によって結界内に存在出来ている縫と那癒多を死なせる事になる。
その二つのプレッシャーが鳴海の精神力を削っていった。
数百とあった鳴海ダミーも数える程しか残っていない。

「さて、どこかな？」
「……」
鳴海は動けなかった。動けばやられる。そう直感した。数百と放った。魔法弾。それがついに鳴海の頬を掠める。
「――ッく！」
慌てて声を抑えるが遅かった。
「そこにいたのか……」
痛みにより、改竄した空間が崩れる。
次、魔弾が直撃すれば即、意識を刈り取って行く事になる。
「思ったより手こずらせて貰ったよ。グッバイ、探偵」
銃を構える。ありったけの魔力を込める。
バン、と銃声。
銃声を消す必要が無かったため、今まで銃声がした。
だが、その銃声は玲のハイルから放たれたものではなかった。
凶弾は鳴海にではなく、玲を襲った。

「間に合った……かな？」

そこにいたのは少女。左手に銃、右手にはナイフ。頭には角。『四之宮』の執行人、二ノ宮絵心だった。
「――ッ！」
右肩を銃弾が貫通する。苦悶の表情を浮かべて銃を落とす。
「ちっ！」
玲は即座に落としたハイルを拾おうとする。だが、
「パァーン」
すかさず足に正確無比な射撃。玲はその場に倒れ込む。
「あなたの負けです。小折玲」
「くっ！」
こころは手錠を取り出し、それを玲の手にかける。
「確保完了っと」

一瞬の出来事だった。あれ程苦労した相手をものの数秒で倒した。
これが、執行人の力。戦闘プロフェッショナルの実力だった。
「あなたは鳴海縁さんですか？」
「ああ。あんたは？」
「枢機卿、通称『四之宮』の執行人、二ノ宮絵心です。ばれてると思うので包み隠さず正直に身元を明かしました」
「まさか、ここまで若いとは思わなかったよ。それよりも奥の二人を……」
「ああ、それなら全くもって問題無いですよ」
「えっ？」
「全く……母親の魔力を感知した途端に目にも止まらぬ速さで駆けてゆくんだから……良かったね、祢衣ちゃん。ようやく、会えるよ」
こころの視線は遙か遠く、鍾乳洞の奥だった。

第17話　12月（2）　決着！（後書き）

そろそろ、完結させた後のことを考えています。どうしよう、続編書くべきなのか、それとも他の話を書くべきなのか……それとも、受験勉強すべきなのか……まぁ書き終わってから考えるとします（爆）

第１８話　白衣の魔術師と研究の対価

――十六年前　『歯車』研究所

雨だ、雨が降っている。

「何で雨が赤いんだろう」

――私は”シゼン”に出てきた疑問を口にする。

――私はその”ジョウキョウ”を把握出来なかった。

――私はその”ゲンジツ”を理解したくなかった。

――私はそれを認めてしまったら”タエラレナイ”とわかっていた。

――だけど、”ミトメ”ざるを得なかった。

私の愛した人が私を庇って撃たれて死んだ。

私の体温が雨で冷たくなってゆく。

でも、彼はもっと冷たい。同じ冷たさでも全く違う。

雨が赤いのは私の視界が赤いから。返り血で私の顔が赤く染まってるから。

彼の血が水溜まりを赤く染めてゆく。

あるいは彼の血が血溜まりを作ってゆく。
犯人は私に銃を向け、狙いをさだめている。
私は彼を抱いたまま動かなかった。私は生きていて、彼は死んでいる。
――これは違う。私が死ぬのは良い。だけど、彼が死ぬ事は認められない、耐えられない。
「ぎゃぁあああああああああああああ」
犯人の呻き声。誰だろう。誰かが犯人を殺シテくれたみたいだ。
お礼を言わなキャ。キャキャキャキャキャ。
壊れてゆく私の心。
赤く染まった視界。
私の元へ寄って来たのは私の良く知る人物。
「あす……か？」
黒陽飛鳥。私の研究の仲間。
小折玲、黒陽飛鳥、私、葵詩衣と彼、葵文祢がその研究の中心メンバーだった。
「大丈夫……なわけないか」
「……」
「犯人なら玲が殺したよ。もう、あんたの憎む人間はいないんだよ」
「……」
「だから、彼も……」
彼の開いていた目を飛鳥は閉じようとする。
その手を私は払いのける。死んでないのに……絶対に死んでない

死んでない死んでない死んでない……眠りにつかせるなんて間違ってる。
急に力が抜ける。吐き気がする。気持ち悪い。
「……ザザザ……し……い……ザ……ザザザザザ――――」
飛鳥の声が理解出来ない。ノイズが入る
プツン、
ブラウン管のテレビが切れた時の様な音を立てて私の意識は完全に途絶えた。

次に目覚めたのは病院だった。
「！」
「目が覚めたか」
「飛鳥、私……」
「詩衣、あんたはずっと寝てた。三日間もね。まぁ眠ってた方が精神が回復するから寝てた方が良かったって医者は言ってたけど」
飛鳥の目元は黒かった。寝ないで側にいていてくれた事がうかがえた。
「で、これがあんたの子供」
「子供？」
飛鳥の手の中であやされる子。
これが、私の子供？　ああ、あれはそういう気持ち悪さだったのか。
結構前から気分が悪い事があったけど研究を優先してたせいか気付かなかった。私が鈍感っていうのが大きいだろうけど。
「この子が居なかったらあんたの心がやばかったかもね、この子が

居ればあんたも――」「あの人は？」
飛鳥の言葉を切る。飛鳥の顔が厳しくなった。
私は自分の優先度の高い行動に出る。
我が子は生きている。生きているんだ。
だから、安心。
今は良い。
それよりも彼が、文君（ふみ）はどうなんだろう？
「……」
「詩衣、歩ける？」
「う、うん」
「あっ、すみません。すぐ戻って来るので、この子見てて貰えますか？」
「わかりました」
看護婦さんはにっこりと笑って、私の子を抱き抱えた。
「――ッく！」」
ベットから降りると立ち眩みを起こし。何とか耐える。倒れてる暇なんて無い。
自分の部屋から出る。飛鳥に支えられながら歩く。二、三度角を曲がると、そこは霊安室だった。
「……文君」
葵文祢。私の夫。私の大好き人。
『歯車』はある童話がモチーフとなっている。
その童話の歯車を作ってみたいと子供の頃から思っていた。
それを言ったらみんなは私を笑ったけど、彼だけは笑わずに私の話を聞いてくれた。
「ほら、文祢。詩衣が来たよ……。詩衣、しばらく二人で話してなさい。私達は外にいるから」
飛鳥が部屋から出て行く。
「……文君、あなたのお陰で私とあの子は助かりました。あり

がとう……」

「……」

冷たくなった彼は何も話さない。

「文君は悔しがると思う。我が子の顔を見れないのだから……」

「……」

どんなに話しかけても彼は何も話さない。

ただ、沈黙を決め込むだけ。

「――っう、ううわぁぁぁああん……」

涙が溢れる。堪える理由も無い。あの時は泣く余裕もなかった。

彼は私が泣く姿が嫌いだからもしかしたら起きてくれるんじゃないかな？　なんて切なる思いを寄せてみる。

だけど、

「くっ……ひっひっく、う……うう」

「……」

彼から返事はない。

何分経っただろうか？　それから私は涙が枯れるまで、枯れてもしばらく泣き続けた。

彼の顔を見る。

「白雪姫みたいに目覚めたりしないかな？」

それだと私が王子様で彼が姫だ。少し可笑しいかな？

「でも、本当にそうだったらいいのに……な」

微かな希望を寄せて彼に口付けをする。

「……」

目覚めない。彼の唇は冷たかった。

「さよならは言わないよ、文君。私は諦めないから。もがくよ、最後まで……」

霊安室から出ると、ふらつく。すると、また飛鳥は私の体を支えてくれた。

緊張の糸が切れたように身体は言う事を効かなかった。

自分の病室に戻り、私はまた眠った。

次の日の朝、私は目を覚ます。
「おはよう、詩衣」
「おはよう、飛鳥」
それから飛鳥と色んな話をした。何気無い話、今考えたくない事は避け、ひたすらに話した。
昼になった頃だった。飛鳥が名前の話を持ちかけた。
「この子の名前どうする？」
「彼の名前を……入れたいな」
「文祢だから……「文」で文子（あやこ）は」
「何か違う」
『子』って漢字は極力使いたくない。
「文（ふみ）ちゃん」
漢字一文字は避けたい。葵文だと「あおいぶん」になってしまう。
「シンプルすぎる。却下」
「じゃあ……」
それから一時間色んな名前の候補が出た。でも、私はどれも気に入らなかった。
名前を考え続ける飛鳥。ついに私の気に入る名前が出た。
「あんたの名前も入れて……文祢と詩衣とで祢衣って言うのは？」
「うん……それは良いよ。凄く良い、それにする」
娘の名前は私と彼の名を合わせ「祢衣」という名になった。
しばらく見舞いに沢山の人が来てくれた。私が入院している間に研究所の廃棄、研究の停止が決まった。これは命令、逆らう事は許されない。
中心メンバーの彼が死んで、過剰防衛と判断された玲は行方不明。
私達の研究は『歯車』を実現させる事。そして、私達は理論を完成させ、もう少しのところまで来ていた。もう少しだった。
でも、駄目だった。あれはきっと噂に聞く枢機卿、『四之宮』が

研究が危険だと判断して私達を消しに来たんだ。
「詩衣、私、陽ノ宮の管理者になるよ」
「何をいきなり？」
飛鳥はいきなりそんな事を言い始めた。
「今の陽ノ宮じゃ、枢機卿……『四之宮』の言いなりだ。こんなんじゃ同じ悲劇が繰り返される。だから、私は管理者になる」
（昔はこんな組織じゃなかったのに……）
飛鳥は聞こえないように何かを言った。
「だから、詩衣も決めて。自分の未来を」

「私は――」

それから数週間。退院が決まる。
一人で色々と考えたかったから、飛鳥には家に寄るから来ないように頼んだ。
病院を出ると一人見知った顔がいた。
「玲……」
我が子を抱いて病院を出ると、玲がいた。
「退院おめでとう、詩衣」
「こんな所にいていいの？」
「駄目だな。やばいな。捕まるし。警察と、特に魔術自衛軍（メイガス）こわーい」
「あんまり怖そうじゃないわね。じゃあ、何をしにここまで」
「……謝りに来た」
「えっ？」
意外だった。玲が私に謝る理由は無い。結果的に私と祢衣の命を救った恩人なのに。
「私は元々用心棒として研究チームに加わった。私はその責務を果たせなかった。本当にごめん」
玲は深々と頭を下げる。

「玲……顔を上げて」
玲が顔を上げると「もう一つ要件がある」と言った。その要件だけは私にもわかった。
「あんたを連れに来た」
「……」
「私は研究を完成させたい。悔しいじゃない。そのためにはあんたの力が必要だ。完成すれば文祢にも会える。私は死んだみんなの無念を晴らしたいし、『四之宮』の連中を出し抜きたいと思ってる。あんたはどうなの？　詩衣」
私は玲の言葉に動揺した。そうだ、諦めなければ、方法はある……でも……。
「わかってる。でもこの子は……」
「誰かに預けるしかないだろうね」
「そんな……」

『――だから、詩衣も決めて。自分の未来を』

飛鳥の言葉が頭に響く。
「でも、『歯車』が完成すれば……詩衣もそのつもりなんだろ？」
「……うん」
私は文君の前で「諦めない」と言った。それは、私が生命操作の歯車を完成させるという事だった。
「その子には悪いが……」「飛鳥に預ける」
私は玲の言葉を遮る。迷いは無かったと言えば嘘になる。でも、これは私の決めた未来だから。
「先に私の家に行ってて」
「わかった」
玲は御尋ね者だというのに堂々とタクシーを捕まえて家へ向かっ

た。
　私もタクシーで飛鳥の家に向う。その間に我が子を精一杯抱きしめた。
「ごめんね、お母さんしばらく祢衣に会えないと思う。でも許してね。母さんは祢衣の事ずっと好きだから」
　祢衣は小さな手で私の指を握ってくれた。

　飛鳥の家に着く。
「飛鳥、この子をお願い」
「は？　何言ってるの？　この子にはあんたしかいな……」
「……」
　飛鳥が勘づく。当然だ、飛鳥と私の仲も長い。
「……まさか、詩衣あんた……」
「私は決めた。自分の未来を……私は文君にまた会う。だから……」
「……私には止める権利はない、か。私がもっとしっかりしていればこの事態は起きなかった。『前任』としてもう少し出来る事があった……もっ
と早くに陽ノ宮の管理者になる事だって出来た筈なのに……ごめん、詩衣」
「ありがとう、飛鳥、全部私が悪いの」
　飛鳥は私を咎めるどころか自らを責めた。謝ってくれた。当然だけど、飛鳥も悔しかったんだ。力を持つからこそ、こんな事態になってしまった
事が。

　だからこそ……私は……。

「仲の良かった人には連絡取った？　しばらく会えなくなるでしょ？」

「うん、裁と癒美には連絡を取った。全力で説得されたけどね」
「それはそうでしょうね。あの二人にも子供はいるし、子供のことを考えたら絶対に止めるでしょう」
私は自分の被っていた帽子を祢衣に被せる。彼に初めてのデートの時に買ってもらった帽子。
この子に被せたらぶかぶかだった。
「祢衣、これをお母さん代わりにして持って待ってて」
この帽子をちゃんと被れるようにすくすく成長しますように……。
そんな願いを私はかけた。魔術の様に。
「じゃあ、飛鳥、祢衣を御願い」
「わかった。詩衣、この子は大丈夫だから、きっと詩衣の事をずっと想っているから。
だから、辛くなったらこの子のために戻ってきても良いからね……詩衣……」
飛鳥は目に涙をためながら私を見送ってくれた。
(ありがとう。飛鳥。でも、それは有り得ないんだ)
タクシーを拾い、自宅に向う。
(だって、諦めるなんてこと絶対にしないから……)

「早かったな」
「玲、手伝って」
家には研究に使えそうなものがある。それを回収するためにここまでに戻ってきた。
それと……。
「家、本当に燃やすの?」
「ええ」
私がここにいたという証拠は極力消さないといけない。
それに、何の問題もない。忘れない。彼とここで過ごした日々を……絶対に。
私は炎を魔術を詠唱する。

家が燃えてゆく。
「さぁ、行きましょう、玲」
――私と玲は研究を再開した。
資金面、研究場所……色んな問題はあったけど、研究は順調に進んでいった。
「祢衣、元気かな」
それが私の口癖になった。
しばらくして使い魔を放ち、祢衣を見て、驚いた。
「歩いてる……」
正直後悔した。娘の成長を対価に研究は進むかの様で苦しかった。
研究を進めてる過程で、莫大な魔力が必要な事がわかった。だから、陽ノ宮の龍脈を使用することにした。
「……駄目だ、これでも魔力が足りない……」
それでも、まだ魔力が足りなかった。
「どうする、詩衣？　他の大龍脈も使うか？」
ただの龍脈じゃ話にならない。だから、他の大龍脈を使えばいい。
その発想は正しい。だけど……、
「無理よ……」
鷺ノ宮には『無限の影』、月ノ宮は魔術自衛軍が、天ノ宮の龍脈は何処にあるかさえ明らかになっていない。それに、もう一つ大龍脈を使えるとしても、私達にそんな技術はない。だから、無理だった。
もう、方法は一つしか残ってなかった。

「……待つしかない」
「待つって……龍脈を？」
龍脈は生きている。人間と同じように好調の時も、不調の時も存在する。龍脈から得られる魔力量も変化するという事だ。
「龍脈が最大の魔力を放出する時期を計算し、その日『歯車』を起動する」
計算の結果、宮暦１９９９年１２月３１日に陽ノ宮の龍脈がこの数百年で最大の魔力を発揮する事が導き出された。
だから、私は待った。宮暦１９９９年１２月３１日を。

使い魔越しに娘の成長を見守りながら……。

第１８話　白衣の魔術師と研究の対価（後書き）

編集に時間が掛かりました。信じられないほど誤字が多かったです。
他の話も多そうなので気づき次第編集していきたいと思います。

第19話　12月（3）　最後のキス

メモリアルは過去の記憶強制的に再生するコードだった。
本来の目的は楽しい記憶を検索、再生するコードだが、これは一番辛い記憶が再生されるように改造されていた。
縫の母栽は、この展開を読んでいた事になる。
過去の記憶を見せる事で那癒多は詩衣に勝利した。

「母さん！」

「「祢衣？」」
縫は突然現れた祢衣に驚く。那癒多は鵺に驚いていた。
目にも止まらぬ早さで駆けてくる。鵺に乗って来た祢衣が母の元へ寄って行った。
気を失った母を鵺に乗せる。
「良かった……無事だ」
「祢衣……」「祢衣ちゃん……」
二人は安堵の表情を浮かべる。親子の再会とは微笑ましいものだった。
「こうなる事は飛鳥さんからずっと前から聞いてたんだ。いつか、母さんは
『歯車』を完成させるって。その時初めて母さんに会えるって。嬉しいな……」
祢衣の口元が緩む。
「これが私の母さん……か。写真でしか見た事がなかったけど」
祢衣は二人の方を向くと満面の笑みで、
「ありがとう」
と、だけ言った。その笑顔は二人の今までの苦労に対しての料金だとしたらお釣りが来る程の笑顔だった。

「お礼される事なんてしてないぞ」「そうよ」
少し照れつつ、二人は返事する。
その時だった、鵺が『奴ら』の気配を感じ取った。
『そこまでダ。ネイ、気ヲ付ケロ。奴ラダ』
詩衣が気を失った事で研究所内の『夜の獣』が暴走を始めた。
「祢衣、龍脈あるからあんまり無理は出来ないよ」
龍脈に変な刺激を与えてしまったら大災害に繋がる。それだけは避けたかった。
「うん」
祢衣は呪文を唱える。
「天界より舞い降りよ、あの悪魔の微笑みをもう一度、キャメロット！」
詠唱、召喚の魔法陣が発生する。
「お呼びでしょうか、お嬢様？」
「この鍾乳洞の構造を調べて」
「はい、その程度なら十秒も掛かりませんよ……」
キャメロットは手を鍾乳洞の奥にかざす。
すぐに、探知を終える。
「探知完了しました。これから先は二つに分かれています」
「歯車は？」
「強力な魔術で隠されてます。残念ながら私ではどっちの道に歯車があるかまでは特定できません。
お役に立てず申し訳ないです」
この前に引き続き役立てなかった事で気を落とすキャメロットに礼を言い、祢衣はキャメロットを還した。
「どうしよう、縫ちゃん」
「うーんそうだなー」
「縫は帰れ。鳴海にこの状況を伝えろ」
「ええー私も手伝えるのに」
「生き埋めにはなりたくない。さっさと行け」

那癒多が縫に初めて気を遣った瞬間だった。尤も縫は気付かなかったが……。

「ちぇ」

「鵺、母さんと縫ちゃんを乗せて一緒に外へ……」「デキナイ」

鵺の予想外の言葉に驚く。

「えっ？」

「ネイハ母親ト、一緒ニイルベキダ」

「えーと」

「ハナレテハイケナイ。ソウカンジル」

幼い頃から共に過ごしてきた召喚獣。その鵺が初めて祢衣の命令に逆らった。

「そうか……鵺が言うならそうだね。鵺の勘はいつも正しいし……」

鵺の頭を撫でる。そして、「ありがとう」と言った。

「じゃあ、私と祢衣で歯車を破壊しに行く」

「お願い」

「じゃあ、二人とも、私先に外で待ってるから」

「おぅ」「うん」

那癒多と祢衣がと答えると、縫は外に向かって走り出した。

「さて、行きますか」

「うん」

鵺は三人を乗せ分かれ道まで走った。

「じゃあ、私はここで」

「気をつけてね」

「ああ、大丈夫だ」

キャメロットの言う通り分かれ道。二人は別れ、それぞれ歯車の破壊へ向かう。

≪那癒多≫

「……おい、これがそうなのか？」
那癒多は歯車と対峙していた。
歯車という名称から想像していたものと思ったが違った。隕石と表現した方が正確だった。
しかし、ここまで来て引くわけにはいかなかった。
「さて、やりますか」
馴染んだグローブをはめる。
「ＳＰＥＬＬ　ＣＯＤＥ：ＩＭＰＡＣＴ『？』！」
骨の砕ける音と共に轟音が鳴り響く。

『ゴォォォオオオオオオン』

しかし……、

「……嘘だろ？」
痛みより、驚きが上回った。
粉砕覚悟で放った一撃でも、それには傷一つ付かなかった。
俯き、溜め息を吐く。しかし、その表情にはまだ、余裕があった。
「……あーそーゆー事ね。わかったわかった。母よ、あなたはこうなる事を読んでたのね」
馴染んだグローブをポケットに仕舞い、封印されしあのコードを秘めたグローブをはめる。
「痛いんだろうなー、まぁでも、骨粉砕より痛いって事はないだろうし……覚悟決めるか」
深呼吸。狙いを定め……放つ！
「ＳＰＥＬＬ　ＣＯＤＥ：ＩＭＰＡＣＴ『？』！」
発動した瞬間、全身に痛みが走る。まだ、『歯車』に拳は到達していない。
今までのインパクトの痛みは、対象に当たった瞬間に来る、

しかし、

「うわぁあああああああああ！　て、手首が回ってる！　ちょ、そこはそんな風に曲がらないいいいいいいいいぎゃぁあああああああああああ！」

このインパクトは違った。

インパクト？は人体を完全に道具とし、何処まで強力な一撃を放てるか開発された。

よって、使用者の安否など二の次だ。

『グゥルルルルゥゥゥゥゥワァァァァァァァァァァァァァァ』

那癒多の声にならない叫びと、轟音が重なる。さながら『夜の獣』の鳴き声の様だった。

右腕の骨が木っ端微塵になり、歯車も粉微塵になった。

轟音轟音轟音。那癒多の鼓膜が破れる。

「高速治癒……」

すぐさま高速治癒を行う。

体中に嫌な汗をかいている。

「私の仕事はこれでお終いっと。さっさと縫と合流しますか」

那癒多も外に向かい歩き始めた。

……右腕は完全には治らなかった。

≪祢衣≫

「ケルベロス！」
「了解だ、嬢ちゃん！」
ケルベロスの火焔、それで夜の獣は全滅した。加減するために中型犬サイズで召喚した。
「お疲れ様」
満面の笑みで礼を言う。
「お、おう。また呼べや」
この召喚獣も祢衣の笑顔の被害者になりつつあった。
召喚する度素直になってゆくケルベロスを見送りながら祢衣は母の様子を窺っていた。
「う……うう」
詩衣が声をあげる。目を覚まし、辺りを見回す。
「母さん？」
「祢衣？　そうか私の負けか……」
一瞬にして理解する。詩衣もこの日を、状況を予想していなかったわけでは無かった。
だから、この時が来れば諦めて娘と一緒に生きる事を決めていた。
後悔を続けた結果、自分にそれだけを許していた。
「ネイ、様子ガオカシイ」
警報の様なものが鳴る。

『龍脈付近に危険反応。龍脈保護のためＳＣ２を展開します』

それは龍脈に掛けられた自衛魔術だった。
「魔力ガ……薄イ、カラダガケイセイ……デキナ……イ」
「鵺！」
鵺は存在を維持せずに消えて行った。
「歩くしかないのかな？」
「そうね……――ッ！」

「母さん？」
「足捻ってたみたい。痛覚遮断で気付かなかったけど。……ところで、歯車は破壊したの？」
「まだ、これから壊しに行かないと」
その時轟音が響いた。那癒多が歯車を破壊したのだ。
「この音……那癒ちゃんが壊したみたい」
「……まだよ、この奥にも歯車はある。二つで一つの装置なのよあれは……」

『龍脈付近の生物にまもなく魔術攻撃を加えます。避難してください』

「母さん！」
「祢衣、行きなさい。歯車は私が何とかする。だから安心して」
「母さん、母さん！」
「そっか……帽子、もうしっかり被れるくらい大きくなったのね」
「母さん……」
「行きなさい！」
「嫌だ、絶対に嫌だ」
「祢衣」
「私には飛鳥さんはいたけど、ずっと一人だったんだよ、お父さんやお母さんが居なくて寂しかった。やっと会えたのに……そんなの嫌だ！」
祢衣は詩衣の胸の中で泣いた。これまでため込んだ涙を全て出すかの様に……。

『それは僕も同感だな』

その声は男の声だった。祢衣はその声を聞くのは初めてで、しかし、詩衣にとっては忘れられない、今まで一瞬たりとも忘れ

た事のない声だった。
「文……君？」
「そうだよ」
文祢は詩衣をおぶる。
「祢衣、走れるね」
「う、うん」
『歯車』が起動した。
詩衣が必要としたのは時間。起動から発動まで相当の時間を要する。
時は満ち、先程『歯車』による冥界召喚が完了した。
『歯車』純粋に龍脈の力、魔力を必要としているため、ＳＣ２内でも問題なく稼働する。
ＳＣ２が無効にしているのは、魔力の結合であって魔力そのものではない。

『歯車』は間違いなく死者である「葵文祢」を呼び出した。

走る。詩衣が夢にまで見た文祢の背中は暖かかった。
あの日の様に冷たくはない。
「詩衣、僕は幸せだ」
「うん」
詩衣は文祢の肩を涙で濡らしながら返事をした。
「何の因果かはわからないけど、こうして詩衣や祢衣に会うチャンスが巡ってきて」
分かれ道の部分まで辿り着く。
「だけど……ここでお別れだ」
文祢は詩衣を肩から下ろす。多少距離があるにしろ、龍脈の攻撃魔術の範囲外であることは明白だった。

文祢の体が半透明になる。
「何で？　どうして、文君！？」
文祢は詩衣を下ろし、穏やかな表情で言った。
「魔力は足りてる。でも、出力は二分の一。足りないみたいだ。歯車から離れすぎれば僕は冥府に帰る。それだけさ。
それに、最後にアレを破壊しなくちゃね。そうすれば……君を守れる。こんな装置があったから、僕達は不幸になったんだ」
「そんなのって……やっと会えたのに、また別れなくちゃいけないの？」
詩衣は膝をつきながら文祢の手を掴む。
「いいや。ずっと一緒だよ。詩衣、君はずっと僕の事を覚えていてくれた。僕はこの世からいなくなるけどずっと詩衣や祢衣の中でこれからも生きているから」
文祢を優しく詩衣の手を握り、放した。
「父さん……」
「祢衣、母さんに似て涙もろいな」
「父さんだって……」
文祢は笑いながら涙を流していた。しかし、絶望の色はない。幸福に満ちている。
「はは、そうだな。……最後に言っておきたい事がある」
文祢は祢衣の方を向く。
「僕は祢衣大好きだ」
「うん」
おそらく最初で最後の父の言葉を聞き入れる。

「そして、詩衣」
「はい」
文祢が詩衣を抱きしめる。
「――僕は君をずっと愛してる」
最後の抱擁、キス。

あの日と違ってその唇は温かかった。
詩衣の体から文祢の温もりが薄れて行く。

そして、歯車を破壊すべく鍾乳洞の奥へと消えていった。

「母さん、行こう」
「うん」
「私、父さんに会えてよかった。たった一回だけど、家族三人で少しの時間だけど過ごせて良かった」
「うん、そうね。母さんもそう思う」
「母さん」
「何？」
「私もいるから。父さんがいなくてもずっと母さんと一緒にいるから。だから、もういなくならないでね」
「約束する。……ありがとう、祢衣」
歯車の壊れる音がする。
零れ落ちそうな涙を堪え、詩衣は最後の別れ言葉を口にする。

「さよなら、文君」

第19話　12月（3）　最後のキス（後書き）

どんな感動的な話を書いても、誤字脱字があると台無しなので、慎重にチェックしてるつもりです。それでも、誤字脱字をする。人間だもの。

第２０話　１２月（４）　『わたし』の選択

鍾乳洞の外に出るとみんなが待っていた。
左から飛鳥（職務放棄）、裁（店番放棄）、癒美、那癒多、縫、鳴海、こころ、と並んでいた。
車の中には治療済みの小折玲。みんな無事だった。
「おかえり、詩衣」
「ただいま、飛鳥」
１６年ぶりの再会も軽く済ませると、飛鳥は詩衣の足に目をやる。
「足、怪我してるわね。今、治癒魔術かけるからじっとしてて」
飛鳥が詩衣の足に手を当てると、腫れが引いてゆく。
「これで、良しと。もう痛くない？」
「大丈夫、ありがとう」
詩衣は自分の足で立つと、祢衣に「友達の所へ行ってあげなさい」と言った。
「わかった」
詩衣の側にもっといたかったが、心配をかけた三人の友達をないがしろにする事も出来なかった。
祢衣が、三人の輪に入る。
すると、縫と那癒多はこころの話に夢中だった。
「こころが『四之宮』の執行人？」
縫と那癒多は驚きの表情を浮かべる。
「うん」
「任務で陽ノ宮まで来たのか」
「うん」
こころは俯き、二人の方へ向かって頭を下げる。
「ごめん、今まで騙してて。わたしの正体が知れたら危険だったから」
二人は笑って「気にしてないよ」「私は馬鹿だからな、別にいい

ぞ」と返した。

「みんな……」

何か言葉を流むごうとするが、出て来なかった。

でも、そんなの関係無かった。祢衣から何か話す必要なんて無かった。

「おかえり」

「無事帰ってきて何よりだ」

二人はいつも通りの笑顔で祢衣を迎えた。

「ただいま、ありがとう」

なら、自分も、と、いつもの笑顔を見せる。

「祢衣ちゃん」

「……こころちゃん」

「お母さんとの再会おめでとう」

「うん、ありがとう。……本当に、本当に……言葉が見付からないよ……」

こころに対して精一杯の礼を送る。

そもそも、こころが祢衣にここに詩衣がいることを教えなければ、家族の三人の思い出が生まれる事も無かった。

しかし、こころは教えた。自分の心を救ってくれた恩返しに。自分の出来る唯一の事だと思って。

「さて、じゃあ、久しぶりに楽しく話すか。聞いてくれ、私の家に縫達親子が遊びに来たときの話なんだが……」

那癒多が話を始める。四人が集まれば話題が尽きる事は無い。友達っていうのはそういうものでしょう？

「ええー縫ちゃんが？」

「なゆなゆ、いくら何でもそれは嘘っぽいよ～」

「いや、本当なんだ、縫のヤツ寝言で……」

「ちょっとやめてぇえええ！」

久しぶりに四人で楽しく喋っていると……、

『トゥルルルル』

それに水をさす様にこころの携帯が鳴る。

「こころちゃん……」

祢衣は不安そうにこことを見つめる。

「うん、四之宮からだ」

こころが電話に出る。

その手は震えていた。どんな要件かは知っていたからだ。

携帯に出ると、嫌な声が聞こえる。

『執行人二ノ宮絵心ご苦労だった。機は熟した。では、今回最後の任務だ。……その場にいる者を全員殺せ』

この上なく残酷な命令を淡々と告げる。

「はい」

こころの心は既に決まっていた。この日が来ることをずっとわかっていた。だからずっと悩んでいた。『四之宮』が今まで自分の過ごしてきた場

所だということは変わりない。それは事実。だから簡単には裏切れないし、裏切った後の報復は死よりも恐ろしい。

自分の居場所はただ一つしか無いことがわかっている。

だから……彼女は……、

「嫌です。ばーか」

『四之宮』を抜けることにした。

（――だって、『四之宮』なんかより『親友』の方が大切だから、簡単には抜けられない。

でも、友達のためなら、簡単に抜ける選択をしてみせる）

それが、こころの覚悟の結果。みんなを殺す位なら『四之宮』と一人ででも戦うという意志の表れだった。

こころは通話を続ける。

「『私』は彼方達にとって道具かもしれない。実際そうだった。彼方達には感謝してます。心が壊れて身寄りの無かった『私』に居場所を作ってくれた事を、そして今回の任務で『心』を取り戻させてくれた事を……」

『……何を言っている？』

「その取り戻した『心』を『わたし』が自らの手で壊すとお思いですか？　ああ、だから無能なんですね、だから、優秀な人材を集めて任務を課す。そういう事ですか……。無能で馬鹿で愚かな最低の彼方達にもわかりやすく言って上げます。私の親友達に手を出してみろ！　『四之宮』なんて滅ぼしてやる！　私の能力（ちから）を知ってる『四之宮』の皆さんだったらそんな事はしないと思いますけど……」

『くっ、二ノ宮……貴様！　裏切るのか』

「だから、そう言ってるじゃないですか」

『もういい、お前らを皆殺しだ！』

「あれぇー？　良いんですか？」

気付くと飛鳥はこころの携帯を奪って代わっていた。

「私の家の子にそんな事言って良いんですか？」
『誰だ？　貴様！』
「『四之宮』の方がこの私を、陽ノ宮管理者を知らないという事はないですよね？」
その場の全員が凍り付く。その飛鳥の顔がいつもの飛鳥ではなかった。残酷さを秘めた深みのある表情だった。
『……黒陽飛鳥か』
「十六年前の事件を世界に向けて発信しちゃおうかな～」
陽ノ宮の管理者ともなれば、その影響力は計り知れない。ものの数秒で、四ノ宮中に事件の真実が伝わるだろう。
『な、何を！』
「便利な時代になりましたね～、インターネットを使えば簡単に情報を世界にばら撒けるんですよ。規制しても無駄ですよ。うちには優秀な櫻井がいますから。どうします？
そうだ、ついでに『四之宮』をぶっ壊すって言うのも良いですね。私情込み、私怨込みで」
すべてはこの時のため、この瞬間のために飛鳥は陽ノ宮の管理者になった。
飛鳥の顔は真剣そのものだった。嘘ではない。本気で『四之宮』に宣戦布告した。
「私の陽ノ宮に、私の娘に手を出すという事はそういう事になりますけど？　覚悟はお有りですか？」
『くっ……』
「あなたじゃ話にならない。『帝王』に代わりなさい」
『何の事だ……帝王など知らんぞ』
「ああ、そうかじゃあ、こう言えばわかるかしら？　四之宮作麻（しのみやさくま）に代わりなさい」
そこで、相手の回線が代わる。

『久しぶり、かな？　黒陽飛鳥』

それは若い男の声だった。

「そうね、作麻」

『で、何かな？　僕に何か言いたい事でも？』

「結果的に『歯車』は破壊した。それで『四之宮』の目的は達成した。違う？」

『如何にも』

「なら、今回はそれで手を引いてくれないかしら？」

迷いもせず、作麻は答える。

『良いよ～。心を自らの手で壊す執行人の顔も見てみたかったけど、残念だな。彼女は存外敵に回すと手強い。彼女と君の顔に免じて今回は手を引こう』

「ありがとうございます」

敬意や感謝の気持ちを全く込めず、形式だけの言葉を伝える。

『礼には及ばないよ。僕がこうして四之宮の帝王でいるのは君のお陰なんだ。じゃあね、〝前任〟』

電話が切れる。短く、軽快な通話だった。

しかし、この通話により、陽ノ宮は『四之宮』から守られた。

『四之宮』の長、この四ノ宮という都市の『帝王』から。

「飛鳥さん？」

こころは半ば理解してない様子だった。

「『四之宮』脱退おめでとう。話は付けておいたから」

飛鳥の言葉で完全に理解する。

「飛鳥さん……ありがとう……ございます」

「ははは、私の胸で泣いても良いのよ、ハッハッハ。……――！」

こころは飛鳥の胸に飛び込み、泣いた。

「本当に……ありがとうございます……」

「今まで、良く頑張ったわね。もう大丈夫よ……もう……普通の女の子で良いのよ」
「……はい」

「ながぜるじゃない、ううう」
「よしよし」
癒美は泣きじゃくる裁の頭を撫でていた。

「ながぜるわねぇ、ううう」
「ほらほら～泣くなー」
那癒多は泣きじゃくる縫の頭を撫でていた。

「これで一件落着だね」
祢衣は帽子を被り直しながら言い、那癒多はそれに「そうだな」と返した。

「あーー！」「あーー！」

迷走鬼親子が絶叫する。
「あの人に謝るの忘れてた」「鳴海先輩に返事聞くの忘れてた！」
残る問題はこの二つだけだった。

「あのー師匠、俺、どうしたらいいでしょう」
「今日は逃げなさい。……後日、会いなさい。その方が上手く行く」
「はい、じゃあ失礼して……」
鳴海は最後の魔力を使い、改竄の魔術でその場から離脱した。

それから一ヶ月後

『鳴海先輩。私、最初は部活の後輩で、その後恋人で、今私達、どういう関係なんでしょうか？』

あの返事を出すべく、鳴海は縫を呼び出した。緊張は無い。何故なら最初から答えは決まっているから。

この一件が終われば返事をすることを決めていた。

もし自分が探偵じゃなくても、簡単に導き出せる答えだ。推理の必要もない、思考の余地すらない。そんなものは無粋でしかない。

鳴海はその問いの答えを告げる。

『恋人に決まってるだろ。俺は縫の事が好きなんだ』

宮暦２０００年１月。復縁活動終了。二人は恋人に戻った。

第２０話　１２月（４）　『わたし』の選択（後書き）

次で最終話か……。ふぅ、何だか短かったです。
最終話も引き続きよろしくお願いします。明日の夜くらいには投稿出来るようにしたいです。では……。

最終話　陽ノ宮の少女達

宮暦２０００年　３月

早朝、朝陽が気持ち良い。刑務所の淀んだ空気とは違い、外の空気は澄み切っていておいしかった。

（空気っておいしいんだな……）

そう、思うほどだった。

「ふぅ……これで、自由の身か……」

３ヶ月前の１２月３１日、いや、１月１日か。私は罪を認め、自首した。

数百人の人間を撃ったんだ。覚悟していた、……でも、飛鳥の力により、罪は驚くほど軽くなった。罪状は傷害罪、被害者に慰謝料を払うことで解決した。慰謝料は飛鳥から借金した。今、飛鳥にお金を借りて、返済中だ。

それにしても……こんなに早く出て来られるとは思いもしなかった。驚愕を隠せずにはいられない。

持つべきものは（権力を持った）友である。

でも、まぁ裏はちゃんとある。条件として、赤羽那癒多の代理で『夜の狩猟者』をする事になった。

尤も、これは私からの申し出でもある。『夜の狩猟者』は最近深刻な人員不足に悩まされてる事も一因である。

私達が情報提供をしたせいで、彼女に迷惑を掛けた。だから、何か罪滅ぼしをしたかった。

那癒多にもよく会う。馬があって、最近では良い友達だ。

刑務所内で、私は魔弾の腕を見せる事になった。

その評価しての事なのかいきなり狙撃者（スナイパー）の称号を貰った。称号は一定の力を持つ夜の狩猟者が貰えるものらしい。称号を貰うと、収入が増える。部下を持つことが許される。まぁ、二つ目は単独行動が得意だから私にはあまり関係無かったけど。

それなりの給料を貰い、昔住んでいたアパートで細々と暮らしている。

この分だと借金を返すのはそう先の事ではなさそうだ。

「さて、行きますか、そろそろ完成も近いはずだし」

私はあの日のように華麗にタクシーを拾い、あの日と同じ場所へ向かった。

目を覚ます。いけない、黒陽さんを起こさなきゃ……。

私は部屋を出て、三階に向かう。

コンコン、とノックして「入りますよ」と言っても返事がない。

「入りますからね！」

最後の確認をして、黒陽さんの部屋に入ると、鳳凰の刺繍がしてある、華美なパジャマを着た黒陽さんがいた。毛布を被り熟睡している。

「黒陽さん、起きてください」

「……」

（起きない。微動だにしない）

祢衣ちゃん、どうやって起こしてたの？

今になって、あの子の凄さがわかった。もっと早く気付くべきだった。陽ノ宮管理局の（ちょっと咲炉に似てる）櫻井さんがどんなに努力しても働かなかった黒陽さんにやる気を出させたのだから。

（少し手荒だけど……）

私は肘を鳩尾にめり込ませた。

「ぐふっ」
「おはようございます」
「おやよう、今何時……？」
攻撃の件は怒っていないようだ。
「九時四十五分です」
「えっ！？　やばい、どうしよう……」
「大丈夫です。まだ、間に合いますから、」
そう、私は現在は黒陽さんの家で世話になっている。
悪いと思って何度も断ったけど「突然一人になるのは寂しい」と一点張りだった。正直嬉しかった。
でも、実体は朝起こしてくれて、料理をしてくれる要員が欲しかっただけなのかもれ知れない。
真実は黒陽さんのみぞ知る。
「はい、着替えです」
飛鳥さんは何の躊躇もなく、目にもとまらぬ速さで服を全て脱いだ。
「むっ、どういう体してるんですか？」黒陽さんの裸をつい、まじまじと見てしまう。
わたしの発育が遅いわけではないけど、少し嫉妬した。出来れば、縫ちゃん位欲しい。祢衣ちゃんは……肩が凝りそうなので遠慮する。
こんな事なゆなゆに言ったら怒られそうだ。「私なんて……」って。
「ありがとう、ここと（ブチッ）……ちゃん」
盛大に舌を噛む。気のせいだと思いたいけど、唇から血が滴っている。
「大丈夫ですか？」
「もんだいにゃい。こりぇくりゃい……」
相当痛がっていた。
黒陽さんは唇の血を拭い、治癒魔術をかける。
「それより急いでくださいね」
脱ぐのは早かったけど、着るのは普通だった。

（急がないと……）
黒陽さんが着替えてる間が勝負だ。わたしは先に下に降りる。黒陽さんの部屋が三階にあって、私の部屋が二階にある。
自分の部屋で、着替えを済ませる。
一階のリビングルームに行き、トーストを焼く。
すると、黒陽さんが準備を済ませ降りてくる。
「――ふっ！」
私はトーストを手裏剣のように飛鳥に投げつける。それを、
「はむっ！」
飛鳥は口で受け止める。
「いってきまふ」
二人で同居してから面白半分でやっていたら思ったより能率が良かったので、続けている。
欠点は、何を言っているのか、わからなくなる事だ。
「行ってらっしゃい」
飛鳥さんを見送る。
「そうだ、私もそろそろ準備しないと」

『鳴海ぃいいいいいいいい、飲めぇえええええええええええ！　ハッハハッハハハ！』
「は、はい」
ここは迷走鬼一家の宴会場。今、宴会（四日目）が行われている。
鳴海が縫と恋仲に戻ったという報告により、鳴海の借金はチャラになった。
組にとって、ぶっちゃけた話、鳴海の借金なんかどうでも良かった。縫の暴走が止んだ事すらかすんだ。
組にとっての、最大の転機、それは……『姐さぁあああああああああああああああん！！』

裁の帰宅だった。
「うーるーさい。私はうるさいのが嫌で駄菓子屋にいるんだから。ヒック」
『すいやせん』
「分かれば良い、分かれば」
三日三晩飲み騒ぎ、四日目、潰れるものも現れるが、組長夫婦はまだ潰れない。
「その程度か、あん？」
「裁、そこらへんで止めておけ、負けを認めろ」
「なぁぁぁぁあにぃぃぃぃいいいいおぉおおおおおおおお？」
完全に酔っていた。最早別人だ。
「な、鳴海先輩」
「どうした？」
「助けて下さい」
「はっ？」
「これから用事なんです。でも、この雰囲気だと抜けづらくて……その……」
「認識改竄でお前の姿消せって？」
若干不自然だった。トイレに行くとでも言って抜け出せば良い。
この雰囲気なら、逆にいなくなったことがばれることもない。
「はい」
「良いけどさ、条件がある」
「何ですか」
「まず、敬語止めろ、もう恋人に戻ったんだ。あと、名前で呼べ。それが条件だ」
「わかりました。お願い、え、縁君」
ドキリとする。酒で顔が赤く染まって色っぽかった。そんな、縫に名前を呼ばれるのが、恥ずかしく、何とも言えない気分になる。
（そんな顔されるとな……）

「もう一回」
思わず、そう言ってしまった。
「縁君、お願い」
鳴海は「今日の所はこの辺で良いか」と満足する。
「OKだ。……認識改竄！」
その瞬間、縫がそこに居るという認識が鳴海以外改竄される。
「ありがとうございます、誰にも見えて無いんですよね……これはお礼です」
ちゅ、頬へ控えめなキス。酒で赤くなった顔は、魅惑的すぎた。
レベルアップ。「鳴海と縫の関係が手を繋ぐ」から「頬へキス」へ進化した。

那癒多はインパクト？の後遺症でしばらく病院通いを続けている。
右手が思うように動かない。利き手矯正も有り得る。
インパクト？は家に帰ってすぐに燃やした。後世に残してはいけない異物だと思ったからだ。
自分のリハビリを手伝ってくれる須久井の助手、アイに最近、医療について講義を受けている。
「私は馬鹿だから、医者なんて無理だぞ？」
那癒多はそう言うと、「医者も頭だけ使うわけではない。介護という仕事もある」と教えてくれた。
母も車椅子ということで、興味が無いわけではなかった。
「アイ先生よろしくお願いします」
「うむ、じゃあ、講義を始めよう」
彼女も最近医療に携わった身で、那癒多に近い部分もあり、那癒多も理解しやすかった。

後遺症でしばらく魔術まで使えない。玲が代理で出ているとはいえ、早急に復帰したいと思っている。
リハビリを続ければ、必ず元通りになれると言われたが、これからは、インパクト無しで戦える様な戦い方について考えている那癒多でだった。
講義が始まってから役一時間。アナウンスが鳴り響く。

『須久井先生の助手、アイ＝アンノウィン先生。手術室2までお越し下さい』

「済まないな、これからオペだ」
「ああ、わかりました」
「ところで那癒多」
「なんですか？」
「今日用事あるって言ってなかったっけ？」
「……あっ」
「忘れてたのか」
「しまったぁあああああああ、私はこれで」
「廊下は走るなよ～」
那癒多は急いで目的の場所へ向かった。

飛鳥の家を出て、祢衣は詩衣と一緒に暮らす事になった。家が無かったため、しばらく飛鳥の家で世話になったが、今月に入ってその必要がなくなった。
「うぃーっす。詩衣、その後様子は？」
「何が？」

詩衣は刑務所に入っていたことすら忘れていた様子だった。
「祢衣ちゃんとの様子は」
「ああ～、何か似てるのかな？　同じタイミングで同じミスをする」
「例えば？」
少し的外れな返答に気にせず、会話を続ける。ここ十数年間の慣れとも言える。
「私が箸を落すのと同時に祢衣も落とす」
「こわっ、そんなシンクロいらない」
「あと、私が起きるのと同時に祢衣も目覚める」
「本当に怖い、やめて」
「それとね……」
まだまだ、語りたい詩衣だったが、
「ただいま～」
「おかえり」
祢衣が買い物から帰ってくる。
「いらっしゃい玲さん」
「お邪魔してまーす」
「そろそろ完成ねー」
「はい」
「それにしても懐かしいな。あの日燃やした家を再び見る事になるとは感慨深いわ。あれから十七年……か」
「そうね……あっ来たみたいね」。
すると客人が現れる。
今日はパーティー。ある物の完成祝い。
「来たよー」
「久しぶり」
「バーベーキューと聞いて来たぞ」
四人がきちんと集まったのはあの大晦日以来だった。
那癒多はもう涎を垂らしていた。
「いらっしゃい」

「肉は？」
「那癒、開口一番それ？　その前に言う事があるでしょ」
「うぅー縫、酒臭い……」
那癒多は鼻を摘み「臭い臭い」と言いながら邪険にする。
「なっ！」
飲酒を見破られ、思わずたじろぐ。そこへ、
「くんかくんか。これは良い臭いだー。バーベキュー最高―！」
何処からもなく黒陽が現れる。
「じゃあ、陽ノ宮管理者様が直々に音頭を取りますかねぇ」
「この度は……」「黒陽さん、仕事サボってないで働いてください！」
飛鳥の背後に影有り。陽ノ宮管理局の青年、櫻井が居場所を突き止めやって来る。
「どうしてここが……」
「発信器です」
「くっ、小癪な……。みんな、この埋め合わせはいずれ。……飛翔魔術『飛鳥』」
飛鳥は魔術により空へと消えて行った。
「待って下さい！　黒陽さーーーーーーーーん！」
負けずに櫻井も空へ飛んでいった。優秀な魔術師の基準とは空を飛べる事なのだろうか？
祢衣は咳払いをし、仕切り直す。
「気を取り直して私から」
帽子を取り、みんなの方を向き、軽くお辞儀をして、
「本日は私の家の誕生パーティーに来てくれてありがとうございます。これからも末永くよろしくお願いします。乾杯！」
パーティーの開始が宣言される。
『かんぱーい』
コップ同士が景気よくぶつかり気持ちの良い音が響いた。

これからの日々を賛美するかのように。

最終話　陽ノ宮の少女達（後書き）

最終話です。この文章量をサイトに上げたのは始めてなので、なんだか感慨深いです。

もし、続きを書くときがあれば、その時はよろしくお願いします。

こんな物語でも、最後まで読んで下さり、本当にありがとうございました。

番外編　小折玲

――誰よりも優しくありたかった。それは私のエゴだ。

わかっているけど、それが理想。夢。私は、それを通したかった。

でも、理想通りの生き物ではない。だから私は自分を捨てた。自分の正義を貫くために……。

私は陽ノ宮の平凡な家庭に生まれた。親は優しかった。損をするほどに……。

その優しさは幼い頃の私にも輝いて見えた。信じるに値すると思った。

――私は両親の様に優しい人間になりたかった。

私は、小さい頃から親が貧しいのを理解していた。

だから、月ノ宮高校の特待生を狙う事にした。

月ノ宮高校の特待生は授業料はおろか、生活費まで出るからだ。

親に一切の負担は掛からない。まさに、理想だった。

今の私の家庭状況的にこれしかないと確信した。

親は借金を押しつけられている。途方も無い借金を……。それを返済するだけでも生活は苦しい。

今は、父さんの友人のアパートを安く借りて暮らしている。値段の割には広く、家族三人で過ごすには、充分な広さだった。

「ただいまー」
学校から家に帰ってくる。
『……』
返事はない。両親は仕事でいない。でも、寂しくはない。だって、一人じゃないから。
自分の部屋に入ると、ぬいぐるみが１５個もある。私と同じ歳の数だ。
どんなにお金が無くても、誕生日の日には必ず大きなぬいぐるみを買ってくれている。私にはこの子達がいるから寂しくなんかない。
家にいるときはひたすら勉強。特待生になるためには、実技とペーパーテストで優秀な成績を残さねばならない。
だから、出来るだけ勉強した。
勉強すれば、ペーパーは通る。それは、自信を持って言える。現時点で模試の評価は合格確立９８％。月ノ宮高校を受験する生徒のトップに君臨
した。そろそろ次の段階に入らないといけない。問題は実技なのだから……。
問題は実技、魔術戦。受験生同士が魔術戦を繰り広げる試験。この魔術戦で敗北することがあれば、まず特待生は無理だと言える。
私の両親は魔術を使えなかったが、曾祖父あたりは使えたと聞いた。その血なのか、私は魔弾の魔術を使えた。まぁ、その威力は丈夫な扉を壊せる程度の威力。
こんな威力じゃ話にならなかった。魔弾の魔術は思ったより魔力の消費が激しく、私の魔力じゃ使い物にならなかった。
私の魔力量は貧弱だった。他の魔術師とは比べるまでも無く明ら

か……。
だから、こう思った、
魔力が少ないなら、他の何かで補えば良い。
補えるもので一番身近だったのが、魔導具。私は魔導具店を回る。
私にあったものを探すため……。

何軒も何軒も回ったが、何処も門前払いだった。そもそも、そんな魔導具があれば、今頃みんな使っている。
見付かるわけが無い、そう思っていた時、
「すいませーん」
探していた物は意外な所で見付かった。……厳密には見付けてないけど。
「はーい、」
その店から出てきたのは私と同じくらいの少女だった。
「駄菓子ですか？」
その店、駄菓子屋『三國屋』。表向きには駄菓子屋。裏向きには魔導具店。陽ノ宮の住民に知らない者は居ないと言われるほどの老舗の名店だ。
「違います。探してる物があって」
「何でしょう？」
「魔導具なんでけど……」
私はその少女に説明した。自分の魔力が貧弱であること、そもそも魔術の威力が矮小な事を。
「成る程ねぇ……。つまり、魔力量、魔術の威力の補助が必要って事か……」
「はい」
「……同い年位なのに敬語って言うのも疲れるから、タメ語でお願い。窒息しそう」

「ごめんなさい」
「タメ語」
「ごめん」
「うん。わかった。媒介は何が良い？」
「――！？」
意味がわからなかった。「残念だけど置いてない」「そんな都合の良い物がある筈無い」と一蹴されると思ったからだ。実際他の店ではそう言われた。ていうか、色んな段階をすっ飛ばして、結果だけ聞かれた気分だ。
「……出来るんですか？」
「ええ、スペル・コードを用いて、実現する」
「スペル・コードって解くの難しいんじゃ……それに、自分の作りたいコードってそう簡単に作れるものじゃ……」
「大丈夫。そこは心配しないで」
「はぁ……」
「とにかく媒介を考えて。出来ればあなたの魔術のイメージにあった媒介の方がいいかも」
「私の魔術のイメージ……」
魔弾→銃。じゃ単純過ぎるだろうか？　それに銃なんて物騒な物簡単に手に入るとは思えないし……。でも、一応言ってみよう。言うのは無料
（タダ）ってお母さんが言ってた。そして、意見を言わないのはもったいないとも言っていた。
だから、私は言う。遠慮気味に。
「銃……とか？　私の魔術は魔弾だし」
「そうね、わかった。ついでに銃も仕入れて置くけど、どんな銃が良いかな？」
あの？　いいの？　そんなに簡単な話なの？　「いやぁ、それは難しいから無理」とか言わないの？

「え……っと……」
私の中で銃と言えば、スナイパーが使うイメージだ。泥棒の相棒で帽子を深く被った人よりも、多額の報酬で暗殺を成功させ顔の濃いる人の方がしっくり来た。
だから――
「スナイパーライフル……とか？」
と、口走ってしまった。後悔する、そんなものが簡単に手に入るはず……
「スナイパーライフルね、わかった」
無いと思ったんだけどなぁ。
「そんな物騒な物、手に入るの？」
「はっはっは。私の友達にヤクザがいるからねぇ」
銃よりも物騒だった。
「じゃあ、明後日までに作るから好きな時に取りに来て」
「はい。あの……」
繰り返すが、私の家は貧乏だ。お金がない。なので、あまり高いと買えない。
「……いくらかな？」
「……お金ある？」
「正直無い。でも……必要……」
「……そう」
少女は笑って、
「じゃ、出世払いね！」
確かにそう言った。
「えっ？」
「だーかーら出世払い。いつか偉くなったら返してね。ただし値段は十倍返しで！」

思いも寄らなかった。こんな提案をしてくるなんて……。
「良いの？」
「ええ」
何の迷いも無く少女は言った。
「でも……」
「だから、出世払い。あなたの未来に投資って事で……」
「わかりました、」
私は決意した。
「必ず……必ず十倍返ししますから、出世するまで待ってて」
「うん、待ってるよ」
絶対に合格して夢を叶えて、この人にお金を返そうって。

――二日後（明後日）
「ごめんください」
私は三國屋にいた。約束の日だからだ。
「はーい」
出てきたのはあの少女だった。
「ああ、あなたは……え～っと……」
そういえば、名前を言ってなかった。
「小折玲です」
「そっか、お互い自己紹介済ませてないものね」
コホン、と咳払いして少女は名乗る。
「私の名前は三國栽（みくにさい）。よろしく」
少し遅めの自己紹介を終え、ケースに入ったそれを受け取る。
「はい」
「ありがとう」
「いいえ。出世払いの百倍返しを約束してもらったんだからお安い御用」
十倍増えてた。でも、いいや。
「本当にありがとう」

礼を行って家に帰る。親は仕事で居なかった。
自分の部屋に行って、ケースを絨毯の上に置き、開いた。
「これが……私の……」
ハイル１９４８と焼き印が押されたそれは美しかった。手に取るとまるで昔から自分の身体の一部だったかのような一体感を感じた。
ケースの中には銃の機能が書かれた紙が入っていた。こんなに多機能なのか。慣れるのに時間が掛かるとかは何故か感じなかった。
もうこんなに
手に馴染んでる。少しの時間で使いこなせるだろうと確信する。
説明の最後にこう、書かれていた。

――大事に使ってあげてね、魔弾の魔術師さんへ

「魔弾の魔術師」。その後私が呼ばれる二つ名だった。

「――くっ」
「それまで！」
私はハイルで相手を射貫く。そこで、試験は終了した。
月ノ宮高校実技試験。受験生同士が魔術戦を行う本番。
魔術師が杖や剣等の魔導具を使うように、私のハイルも実弾無しでの使用を認められた。
自分で言うのも何だけど、筆記も実技も完璧だった。
数日後、合格通知が家に来た。
「玲……」
両親は私の手の合格通知を見つめる……。

月ノ宮高校受験生様へお知らせ

≪合格≫

小折玲殿、貴殿は本校の試験により大変優秀な成績を収めました。
よって、あなたを『特待生』として迎えます。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

（中略）

〜〜〜〜〜〜

月ノ宮高校理事長

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――
――――――

合格通知には合格と、特待生の文字が書いてあった。
「合格したよ、お父さん、お母さん！」
両親は泣いて喜んだのと同時に、悲しんだ。
「玲がいないなんて寂しいなぁ……」
お父さんは泣きながらそんな事を言った。
「前向きに考えようよ。私がいない間お金が一切入らないんだよ。少し生活が楽になると考えてば良いんだよ」
母さんは目の涙を堪えて、「いえ、貯金しましょう」と言った。
「玲がいると思いながら生活するために貯金する。その負担すら私達はきっと愛しく感じるでしょう。お金を貯めて、玲の卒業式を見に行くの。そ

して、帰りはおいしい物食べましょう。とびっきりのごちそうを、今まで食べたことの無い様な豪華なものを……」

お母さんは私の夢を知っている。その夢のためには努力が必要な事を知っていた。

「だから、お母さん達は卒業式まで、玲には会えない。お金を貯めるために」

だから、私が甘えないように、卒業まで会わないと宣言した。

「うん、その日を楽しみにしてる」

合格通知が来てから、いろいろと手続きが必要なため、明日には陽ノ宮を発たないといけない。

だから、これが私と両親とのしばらくの別れとなる。

（お父さん……お母さん……私、頑張るから……）

その日、私達家族は川の字になって寝た。

枕は涙で濡れていた。

入学してから数日。高校生活も慣れてきた。魔弾魔術だけではなく、他の魔術も使えるような授業を受けた。

授業は単元別授業。科目を選んで、授業に参加。成績に応じて単位を得る。私は『魔力放出』を主に専攻した。

「小折、雑だな」

「そうですか？　先輩？」

部活は射撃部に入った。私の射撃精度を上げるために役立つと思ったからだ。

この人は先輩の葵文祢（あおいふみね）先輩。一年学年が上で、私と同じ特待生になった人だ。

「いいか、人間も魔術師も変わらない。急所は心臓（魔術炉）だ。だから……」

キーン、人型の的が現れる。

『パンッ』

先輩はその人型の心臓部を正確に射貫く。

「一発で決めれば強いも弱いもない。弱さ捨てろ。時に冷酷になれ。お前は優し過ぎる。だから、人型の的だと無意識に急所を避けてしまうんだ。

良いか？　玲。撃つのは銃じゃない。お前だ。お前が引き金を引かなければ銃は誰も傷付けない。それを肝に銘じておけ」

先輩の指導は的確で役に立った。事実、先輩に射的を教えて貰ってから、射撃精度が上がった。……人型の的への狙撃は相変わらずだったけど…

…。

時は流れ、先輩は卒業。大学へ進学するそうだ。

私の夢は「　　」。だから、もっと頑張らないと。

「卒業かぁ……」

ふと、そんな事を呟いてしまった。慣れた学校を離れるのは少し寂しい。

いよいよ卒業、内定は決まっている。

これで、私の夢が実現する。誰よりも優しくあるためにはまず強さが必要なんだ。

数日前、電話があった。

「玲？」

三年振りの母の声は元気そうだった。

「うん。どうしたの？」
「もう少しで卒業式があるみたいだから連絡しようと思ってね。借金も返せたっていうのも報告」
「本当！　良かった～」
それだけが不安だった。迷走鬼組ってヤクザからお金を借りていたみたいだから心配だった。……まぁ、お金を払っていれば、用心棒になってくれる程、義理堅い連中の集まりだったけど……。
「でね、明日行くからね」
「うん」
「お父さんに代わるからね」
「うん」
「玲……か？」
父さんの声がする。
「うん」
「そうか、心無しか逞しくなったな……」
「もう、声だけで判断しないでよ」
「そうだな。父さん達、玲の晴れ舞台を楽しみにしてるからな」
「私もだよ」
「じゃあ、そろそろ電話料金が高いから切るな」
「わかったよ、じゃあね」
ツーツー。電話が切れる。
「三年振りの再会か……」
本当に楽しみで堪らなかった。

『卒業証書授与』

「ふぁ～」

寝不足だった。昨日は楽しみで眠れなかった。それは、両親も同じのようで、「少し遅れる」と連絡をくれた。

『小折玲』

「はい！」

証書を受け取ち席に戻る。しばらくして私はまどろみの中に溶けていった。

……

……

『これで、卒業式を終わります。卒業生退場』

「はっ！」

気付けば卒業式は終わっていた。結局両親は間に合わなかったみたいだ。残念だけど、仕方ない。後で怒ってやろう。

外に出ても両親はいなかった。

「遅いなぁ……迷子かな？」

月ノ宮は広い。私も来たばかりの頃良く迷った。

「仕方ないな……。ハイル、お願いね」

ケースからハイルを取り出す。魔力探知機能。両親に魔力は無いけど、お母さんには私が家を出る前に渡したペンダントがあるはずだ。私の魔力が込めてあるからすぐに見付けられるはずだ。

ハイルを通して周辺の魔力反応を見る。

「何だ……すぐ近くじゃない」

私は走り出した。すぐに会いたい。

「――――えっ？」

一瞬、両親だとわからなかった。両親は血まみれで倒れていた。

「父さん……母さん？」
「ごめん……ね、玲。ペンダント、盗まれちゃった……」
「何があったの？」
「父さんを連帯保証人にした人がな……金が必要だからって言ってな……口論になって……」
その人は、月ノ宮に逃げていた。で、またお金が必要だからお父さんにたかった……？
「ぐっ……」
お父さんの左胸に深々とナイフが刺さっていた。お母さんは色んな所を切り刻まれていた。抵抗したからだろうか？　首の周りに痣が出来ている。
「お父さん……！」
「良いか？　父さんが死んでも……恨んじゃいけないよ……玲は優しい子なんだから……」
握っていた父さんの手から力が抜ける。
「お願い……あなたは、幸せに……夢があるんでしょ？　『魔術自衛軍』に入ってみんなのために働くんでしょ……もし、復讐に走ったら折角の夢が台無しよ……」
涙で顔が見えない。どうして、こんなに優しい人がこんな目に遭わなきゃいけないの？　絶対に間違ってる……。
「お母さん、待ってよ。私まだ、お父さんにもお母さんにも怒ってないんだよ？　卒業式遅れたこと。壇上の姿を見て欲しかったの。三年振りの立派になった所を……この後おいしい物食べに行くんでしょ？　私、お腹空いたよ。もう、怒らないから……」
お母さんは目を眠る様に閉じた。恐らく、もう目覚めることのない永遠の眠り。
「もう……怒らないから……目を開けてよ……」
私は壊れたように涙を止める。壊れた壊れた壊れた壊れた壊れた壊れた壊れた壊れた……私の大切なものが……。だから、
「……てやる……」

ごめん、お父さん、お母さん。私、やっぱり駄目だ。優しい子なんかじゃなかった。

「……してやる……」

私はハイルの魔力探知機能を使う。

「……近い」

近くのビルの屋上へ上る。屋上の扉は鍵が掛かっていた。

「ハイル、収束」

ハイルで魔力を収束し、放つ。慣れた動作。この数年で、ハイルは完全に身体の一部となっていた。

扉は木っ端微塵になる。

これから、もっと残酷な事をする。

標的はすぐそこ。私の苦手な人型の的だった。

『いいか、人間も魔術師も変わらない。急所は心臓だ』

『弱さ捨てろ。時に冷酷になれ。お前は優し過ぎる』

先輩、今、残酷になります。

『　』

実弾を込めた魔弾が男の心臓に命中する。心臓の周りに風穴が出来る。

サイレント機能で銃声はしない。

”まだ”生きている。

「まだ……こんなんじゃ残酷とは言えない……」

『　』

次は頭を狙った。
命中。あいつの頭が潰れたトマトのように破裂した。
サイレントで消された筈の銃声が聞こえた気がした。

それは、この三年間付き添ってきた相棒の悲痛な叫びだったのかも知れない。

『玲。撃つのは銃じゃない。お前だ。お前が引き金を引かなければ銃は誰も傷付けない。それを肝に銘じておけ』

「本当に先輩は正しかったですね」
空を見上げると、視界が涙で歪んでいた。

その場を去る。あのペンダントは形見だ。回収しないと。警察が来る前に……。

「やぁ」
知らない声だった。警察？
「安心しなよ。警察やメイガスじゃない。むしろ逆だよ」
「逆？」
「そう。君は資格を手に入れた」
「何の資格よ！？」
苛立ちを隠せない、今はそれどころじゃないんだ。
「俺達の仲間になる資格だ」
ローブにフードの男は私に寄り、フードをめくる。

「奪われた者（ロスト）へ入る資格だ」
「ロスト？」
「君と同様、家族や恋人を殺された人間の集団さ。活動はそうだな……ネズミ小僧って知ってるか？」
「一応は」
「それと一緒だ。弱気者を守る。自分と同じ悲劇を起こさないために活動するのがロストだ。まぁ……復讐に走って、殺人狂になるのを防ぐ受け皿でもある。どうだい？　入らないか？」
「入る」
「あっさり承諾してくれてびっくりだよ」
メイガスには入れない。だから、せめて、私は自分のやり方で『優しい事』を成し遂げようと思う。
「ロストへようこそ。はい、これ。大事なペンダントなんだろう？」
「ありがとう」
「――それと……」
男が指を鳴らすと同じ格好をした集団が現れる。
「ご苦労様」
ロストの集団から次々と大きな袋が渡される。男の手には血の付いた袋。四つもある。……両親が持っていたものらしい。
「これ、両親が襲われるとき咄嗟に投げたらしい。少し血は付いてるけど、気になる量じゃないだろ？」
確かに、血が何滴か付いてる程度だ。
「中身は……」
気付くべきだった。大きな袋だと思った。とてもとても大きな袋。警戒していれば耐えられたのに……。
「これ……」
「随分大きなぬいぐるみだね。しかも四つも」
「……気が早いよ……」
私は枯らした筈の涙を出す。

誕生日の日にいつも買ってくれたぬいぐるみ。四つ。三つは私が家にいなかった分の、もう一つは、まだまだ先の誕生日の分。気が早いし、こんなに大きなぬいぐるみ、持ってたら邪魔になるのに……本当に馬鹿だな……。

わかってる、両親は私を驚かせたかった。喜ばせたかった。ただ、それだけだったんだ……。

（まだ……間に合うかな？）

私は自分に問いかける。

（まだ、優しくあれるかな？）

私は答える。きっと、まだ間に合うと、理想は捨てないと。でも、現実的になる必要はあると答える。

誰よりも優しくあろう。色んな人が私にそうしてくれたように……。

「君、名前は？」

男は微笑みながら訊ねてきた。それも、そうか。これからはここの一員なんだ。

どう答えるべきなのか少し迷った。

だから、私はこう名乗った。残念だけど、出世出来ないだろうから、せめてその二つ名を使おうと……。

「魔弾の魔術師、小折玲」

――誰よりも優しくありたかった。それは私のエゴだ。

わかっているけど、それが理想。夢。それを通したかった。

でも、人は嘘を付く。裏切る。だから私は自分を捨てた。理想を裏切った。

……誰よりも優しくありたかったなぁ……。

……だからこそ、時に非情に、時に優しくあろう……自分の理想を守るために。

―その後―

ロストに入ってもう何年経つだろう？　私は私のために人を撃ってきた。

ロストのリーダー『フェイク・アナンダ』のカリスマ性には目を見張るものがあった。アジトがばれそうになれば、すぐに場所を変え、被害者が出そうな地域には単独で変装して救い出した。

ファクトからロストに入ってすぐに謝られた。「君の両親を救えなくて済まなかった」その言葉で少し救われた。この人も、優しくあろうとしてると。

ここは居心地が良い。本当にそう思う。

「レイ、ファクトが客だとさ」

魔術師、ドレア・アルマが私にそう告げた。

「ありがとう、アルマ」

今回のアジトは城だった。アルマが人よけの結界を張ったそうだ。優秀な魔術師のアルマは強くて残虐な最悪の奴だけど、そうなったのも理由がある。私達はその理由を知っているから、アルマを仲間として認めている。

私は客間に進んだ。

客間に進むと馴染みの顔が見えた。随分久しい顔だった。

「よっ」

文祢先輩だった。

まるで、昨日も会ったかのような挨拶をしてきた。

「こんな所までどうしたんですか？」

「用心棒をしてもらいたい」
「はっ？」
残念ながら意味がわからなかった。
「俺がこれからする研究のために」
意味がわかっても、多少驚く。でも、断る理由が無かった。先輩には恩があるからだ。
私は、先輩の研究チームの用心棒を頼まれた。

「初めまして、小折さん」
「玲で良いよ。私も詩衣って呼ぶから」
「わかったよ、玲。一つお願いがあるんだけど……良いかな？」
「良いよ。私は用心棒で、厄介事専門だから」
「そういう事じゃなくて……」
「何？」
「私の友達になってくれないかな？」
その笑顔を見て、私はこの友達のために、文祢先輩や、研究チームのみんなのために戦おうと思った。

詩衣の笑顔を私は見たくなってしまった。文祢先輩もきっと、詩衣の笑顔の被害者だ。

――だから、私は、この魔性の笑みの加害者を私は守り抜いてみせよう。

番外編　小折玲（後書き）

番外編です。何か矛盾がありそうで怖いです。もし、あったらよろしくお伝え下さい。

次回は第二章。時間はまだ掛かりますがよろしくおねがいします

戯言

――この物語はまだ始まってすらいない。

宮暦１９９９年、この年起きた出来事、事件はオレのから見ればまだ序章に過ぎない。映画の前にやる無駄に長い予告と一緒だ。多少興味があるにしろ、それを見に来たわけではない。その間に携帯の電源を消したり色々と準備をするだろう？

繰り返すが、宮暦１９９９年はオレにとっての”準備前”もしくは”準備中”に過ぎない。そして、準備は”まだ”終わってない。

宮暦２０００年、この年はオレにとっても重要だ。

こっからだ。この年での出来事が大きな鍵となる。だからこそオレは成さねばならないことがある。

まだ、”準備中”。準備はまだ終わってない。やるべき事はまだ沢山ある。

それを一つずつ片付ける。

宮暦１９９９年の出来事はオレにとって夢のようなもの……。

――ここからが現実だ。

さぁ、幕開けだ！　宮暦２０００年の始まりだ！

戯言（後書き）

第二章、開幕！　短い。だって戯言だもの。

第1話　4月（1）　鳴海と玲

宮暦２０００年　４月

魔導師の街、陽ノ宮。この街の夜は『夜の狩猟者』と『夜の獣』との戦いが繰り広げられている。

そして、逆にそれを利用するものもいる。獣を放つ魔導師は『夜の獣』に、縛りを利かせている。

それは、『家の中の人間を襲うな』。これは、魔導師自身も守る術である。もし、これをいたずらに破れば、枢機卿『四之宮』や魔術自衛軍に狙われかねない。

『夜の狩猟者』もそれを容認している部分もある。前記二つが良い抑止力になっているのか、『夜の獣』が家の中に上がり込んで、人を襲う事は無い。

『夜の狩猟者』にとって、そのルールは本当にありがたい。外の獣だけ狩れば良いのだから、もし、家の中に獣がいると仮定して動くとしたら、何人いても足りない。少人数で動けるのは、こうした理由があるためである。

『　　』

音の無い銃声。夜の街の屋上。そこから正確無比な射撃をする者がいる。

小折玲。かつて、葵詩衣と共に生命掌握装置『歯車』の研究をしていた仲間。元々、研究の用心棒として雇われた彼女の能力は高く、『夜の狩猟者』に入ってからもその能力は発揮されていた。

『　　』

一発で仕留める。実弾入りの魔弾の威力は、玲の魔力次第だが、インパクト?並の威力はある。夜の獣は見えない凶弾に驚異に脅かされているというわけだ。

「鳴海、悪いね……」

「いやいや、良いよ。良い話聞けたし……」

鳴海は最後の疑問、何故『歯車』に関係していたかを訊ねるために玲の所へ来た。玲は「仕事を手伝ってくれるのなら……」と快く承諾した。

玲が話したのは自分の過去の話。本当は魔術自衛軍に入るのが夢だった事から、両親が殺された事、奪われた者（ロスト）の事、文祢に用心棒を頼まれた事……それについて思ったことを饒舌に話した。鳴海の見たその顔はとても優しく見えた。

鳴海を呼んだのには理由がある。認識改竄の魔術。鳴海縁の魔術。空間内の生物の五感を操り、その場所に見えるものを改竄する魔術。簡潔に言えば、現在、鳴海の魔術で鳴海と玲は周りの人間から見えない状態になっている。

玲の弱点は近接戦闘。場所がばれたなら、距離を必ず取らねばならない。しかし、今は違う。認識改竄により、姿は見えず、ハイル１９４８のサイレント機能により、銃声は消され、もはや視覚はなかった。

「それにしても、このコード便利過ぎるな。スペル・コードリカバリー」

スペル・コードリカバリー。迷走鬼縫が作り出したコード。魔力を回復させる効果を持つ。魔術自衛軍の一部と、縫に関わった人間しか知らないコードである。

「全くだ……私の努力は何だったんだ……まぁ、ハイルがあるから良いが……」

『　』

三匹目。命中。そもそも、玲が打ち損ねたのは最近で言えば鳴海位である。

「このコードのお陰で紙に魔力を染みこませる作業をしなくて済んで助かる」

「……鳴海、一応、紙も容易しておけ」

玲はこのコードの弱点を見抜いていた。

「何でだよ？」

「探偵なら自分で考えろ……」

尤もな意見だ。探偵は思考を止めたら敗北なのだ。う～んとうなり、瞬時に答えを出す。

「成る程……使用に隙があるって事か」

「そうだ、」

瓶を割って魔方陣を展開するまでに若干だが隙がある。魔術師戦においてその隙は決定的なものとなる。

「それだけじゃない」

さらに続ける。

「鳴海、それ取られたらどうする？」

「……！　そうか、相手に取られる可能性もあるってことか」

玲の示唆したもう一つの可能性、相手に取られ、形成逆転されるという可能性。

「その点では確かに紙の方が便利だな。タイムラグ無しで魔力を回復出来て、持ち運びも便利だ」

「そういうことだ」玲はかしこまって続ける。「鳴海。頼みがある」

「何だ？」

「この街を調べてくれ」

もう一つの要件。それは、最近、玲が感じている不穏な空気。

「この街で何かが起ころうとしている」

鳴海は首を縦に振る。

「ああ、俺も最近そう思っていたところだ。わかった、調べるとしよう」

鳴海はその頼みを彼女がそうしたように快く引き受けた。

第1話　4月（1）　鳴海と玲　（後書き）

新章突入！　ここから読んだ人も、最初から読んだ人も、応援宜しくお願いします！

第　話　４月（？）　可能性の一つ（前書き）

残酷な表現ありです。そもそもこの章から残酷な表現が増える予定です。ご注意下さい。

第　話　4月（?）　可能性の一つ

――その時、叫び声が聞こえる。

『キャァアアアアアアアアアアアアアア、うわぁああああああああああああああああああああああああああああ』

甲高い声が聞こえる。少女の声だった。

断末魔の叫び。残念ながら、その声からもう少女は無事では無いことがわかった。

「小折、あの声」

「ああ……しかし、どういう事だ。…………まさか、家の中に夜の獣が…………？」

二人は屋上から急いでビルを下ってく。

「ハイル、あいつの場所を……」

『夜の獣』は魔力の塊。故にハイルの力を使えば容易に見付けられる。

走る走る走る。二人は走った。

「ここだ」

幸いと呼べるかは不明だが、ビルから家は近かった。

「……行くぞ」

「ああ、認識改竄……」

念のために姿を消す。家は広かった。

「血の臭いはあっちからだな」

小折は先導する。二階に上がっていく。部屋を一つ一つ調べた。

そう、もうハイルではわからなかった。魔力が家の中に”充満”していた。

「「くっ――」」

二人は頭痛に襲われる。魔術師は主に龍脈から魔力を得ている。

しかし、皮膚呼吸並みだが、大気からも常に微少だが、魔力を貯えようとしているのだ。
その、魔力に恐怖を覚える。こんな魔力を味わったのは初めてだった。
「……ここか」
玲は頭を押さえながら部屋に入る。すると、そこに少女がいた。
いや、あった。
それはもう少女ではない。抜け殻だ。四肢は千切れ、もう、顔も見れたものではない。部屋中が血で染まっている。
しかし、疑問が残る。『夜の獣』は何処へ行ったのか？
その謎はすぐに明らかになる。
『狭いですね。ここは……時間が掛かりそうだ。躾けのなっていない獣は殺しました。あなた達は人間ですか？』
「「！」」
声は聞こえる。だが、何処から聞こえているかまるでわからなかった。それに、おかしいのだ。認識改竄魔術を使っているのに、”感知される”のは……。
『変な魔術使ってますね。でも、そんな魔術、意味を成さないですよ』
その発言で完全に改竄の魔術が無効になっている事を知る。
『質問に答えて下さい、あなた達は人間ですか？』
「ああ」姿無き声に、鳴海答えた。
『返答感謝します……さて、早くここから出なくては……もう少し待ってて下さい……』

二人は気付く、その魔力がそこから放たれている事を……。

少女の胴体から……腹から。

腹の中にいる。

だから、先に撃てば良い、そう思うが玲は動けない。恐怖とかそういうレベルじゃない。とにかく動けないのだ。魔力汚染とも言える異様な魔力により、上手く身体が動かない。

ぬるっ、と音がして、腹から手が出てくる。左手、右手。そして顔が見えた。そして、腹から上半身が出ると、少女の胴体を引き裂き、全身の姿を現す。

「初めまして、『ダーク』のイハトナ＝イレイミ＝レーマです」

その男は、笑っているにも関わらず、無表情だった。

服は神話に登場しそうなローブで、髪は目に掛かるか掛からないかの長髪だった。

「すみません。『朱鷺羽』は何処ですか」

「「……」」

二人は黙る。その問いに答えられる明確な解を持ち合わせてなどいなかった。

「返事がないと言う事はわからないという事ですか……残念です」

イハトナはそう言うと何事も無かったかの様に部屋を去る。

「……」

「……」

ばらばらばらばら……

二人の身体がばらばらに崩れ落ちる。イハトナは二人に気付かれることもなく、少なくても百回は二人を殺した。

「さて、朱鷺羽を殺すまで、存分に殺人を愉しみましょう。だって、殺人は愉しいものですから……」

第　話　４月（？）　可能性の一つ（後書き）

次は軽めの話。すぐに投稿出来ると思います。

第2話　3月　幼女師匠

宮暦２０００年　3月

私の中の今年度のイミフ・オブ・ザ・イヤーが早速更新される。
確かに、私は夜の狩猟者を現在休業している。毎日、堕落した生活を送っている。
だからって修行？　ジャンプの主人公じゃあるまいし。最近のジャンプの主人公すら修行なんてイベント控えるというのに……。
「今日あんたの師匠来るからよろしく～」
よろしく～って……困ったな、録画していた特撮を消化しようと思ったのに。
「了解。ところで母よ、何処に行くんだ？」
「今日は弟子と用事があるから」
弟子？　ああ鳴海か。
「わかった、行ってくると良い」
「ありがとー」
母は車椅子で家を出て行く。
この間、玲が詫びに母に新しい車椅子を買ってくれた。最新式の電動車椅子だ。それから母は一人で外に頻繁に出掛けるようになった。良い事だと素直に思う。何せ、料理をする可能性が少しでも減るんだからな。
時速１５０キロも出る必要は無いと思うけど、インパクトシリーズを愛好していた母に対してもう何も言うまい。
「さて、どうしよう」
土曜日午前中。良い天気。無条件に眠くなる条件は揃っている。
録画を見るのも、見てる途中で来たらやだ。

「……寝るか」
寝ることにした。
自分の部屋まで行くのも億劫だったため、ソファーでテレビを見ながら眠ることにした。3、2、1、爆睡。

『ピンポーン』

「ハッ！」
インターホンの音が鳴っている。
『ピンポンピンポンピンポーン』
「い、今行く！」
完全に寝ていた。しまった。師匠怖そうな人だったら怒られそうだな～。
扉を開けて私は腰を抜かす。殺気だ。今まで味わったことの無い殺気が私に向けて放たれていた。純粋な恐怖。

……そこに居たのは私より小さな少女（幼女）。

風変わりな服を着ている。
直感する、この人が師匠だ。
「赤羽那癒多……さん？」
声色で怒っているのがわかる。
「どれくらい押してましたか？」
「一時間」
「ご、ごめんなさい」
「まぁ、良いです。早速修行に移りましょう」
思わず安堵する。良かった優しい人だ。
「この恨みは修行の中で消化していきましょう」

前言撤回、根に持つタイプの人だ。
「では、行きましょう」
私は首根っこを捕まれる。
そして、飛ぶ。一瞬にして、私の家が小さく見える。
この人、空を飛んでいる。

『ぎゃぁああありおりはべりいまそがりぃいいいぃいいいいいいいいいいいいいいいいい！』

叫ぶ。叫ぶしか恐怖を緩和する方法が無かった。
……やばい、死ぬかも。
「あの辺でで良いか……」
どういう意味だろう？
「ちゃんと受け身取ってね」
その少女は、万人が可愛いと言うであろう笑顔を見せる。
しかし、私には悪魔が微笑んでいるようにしか見えなかった。
「ちょ、まさか」
「そのまさか。えいっ」

「うわぁぁぁあああぁぁあぁあああああああああ」

私は空から地上へ投げつけられる。
ここは、何処だ。そうだ、夜熊と戦った場所、つまり陽ノ宮森林公園か。
受け身？　受け身でどうなる高さじゃない、どうしたら…………
そういえば、鳴海が私に何か言ってたな。
『赤羽、これからも夜の狩猟者続けるなら一応助言しておく。お前には魔術師の才能がある。これからは魔術にもっと特化した方が良い』

防御？　防御防御防御……。ちょっと待った。あの人どうやって空飛んでた？　飛鳥も、櫻井もどうやって空を飛んでた？　生身の人間が空飛べる筈ないじゃないか。

「あっ」

この状況になって気付く、生身の人間じゃない。

そうだ、あれは魔力を纏った人間だ。

気付くのが少し遅かった。もう少しで地上だ。魔力で体を覆う。

飛ぶ。飛ばないと。

「うぉおおおおおおおおおお！」

『バーーーーン』

轟音。公園に私サイズのクレーターが出来る。

そこに、幼女師匠が現れる。

「うん、まぁ合格かな」

「いたたた」

「魔力使用での衝撃軽減。お見事」

「あ、ああ」

本当は飛ぶつもりだったんだが、まぁ、良いか。

「自己紹介が遅れた。私は朱鷺羽未咲（ときわみさき）少なくてもあなたよりも年上です。よろしくね、那癒多」

「よ、よろしく」

見た目はどう見ても年下なのに、上から……目線、いや、下だけど少しむかつく。

「さて、いくよ。第一レッスン。私の攻撃をよけましょう」

ブンッ。丸太が私の頭を横切った。……と思ったら幼女未咲、もとい幼女師匠の拳だった。

「直撃したら死んじゃうからね～」

「ちょ！」

生きて帰れるかな？
その一撃一撃が死を連想させる。
私の”苦行”が始まった。

第2話　3月　幼女師匠（後書き）

暗い話連続だと滅入っちゃうものね。実は那癒多パートを書いてる時が一番楽しいかもしれない。

第3話　4月（2）　新学期

宮暦２０００年　４月

「黒陽さん、行ってきますね」
「行ってらー。こころちゃん、いい加減『飛鳥さん』で良いよ～飛鳥さん泣いちゃう」
「……考えておきます」
名前で呼ぶのはまだ気恥ずかしかった。
こころは家を出ると真っ直ぐ学校へ向かわなかった。
「おはよー」
「おはよう、祢衣ちゃん」
少し遠回りして、祢衣の家まで寄る。二人は待ち合わせをしていた。
「じゃあ、行こうか」
「うん」
学校に向かいながら、祢衣は何気無く近状を聞き出す。
「最近どう？　飛鳥さんには慣れた？」
「うん、トーストブーメランの取得食事はこれで何とかしてる。起こし方は今、検討中。最近では一緒にお風呂も入ったりする」
「そして？」「……揉まれる」
祢衣の経験上、その運命から逃れる術はない。
「お風呂の中でお酒も飲んじゃうから厄介なんだよね～」
「あはははは」
こころは一度飛鳥と戦った事がある。魔術師として飛鳥の実力を知りたかったからだ。
結果は惨敗だった。こころは手加減されて負けた。
もし、任務を続行して飛鳥と戦っていたら……こころはぞっとした。

「まぁ、何だかんだで楽しいから問題無いよ」
「……こころちゃん、それは嘘ですね」
「なるなるの真似？」
「……何か悩みがあるね！」
祢衣の無駄な第六感が働く。対こころ直感。それはＮＡＳＡの技術をも凌駕する。
「な、無いよ」
じー。祢衣はこころの目を見る。まるで心を読んでいるかのようだった。
「こころちゃん、恋かな？」
「なんのことかな～周りに男子なんていないじゃない」
「前提条件、」
祢衣はこころに指を指す。
「こころちゃんが好きなのは朱鷺羽咲炉君。そのお姉さん朱鷺羽咲夜さんと縫ちゃんは親交がある。お姉さんから情報を得られれば咲炉君の住まいもわかる」
名探偵祢衣が降臨する。
こころは認める。
「最初は出来心だったんです」
さも犯人のよう述べる。
「わたしは別に今のままでも充分幸せなんです。でも、彼に一度会ってみたいなと思ってしまってそれから……」
延々と懺悔が繰り広げられる。祢衣は少しおかしかった。
「こころちゃん乙女だなぁー」
俯いても顔が真っ赤なのは明らかだった。
「よし、私に任せて。期待しててね」
「期待って……」
こころが呟くと、
「久しぶり～」
縫の声が聞こえた。

「縫ちゃんおはよう」
「おはよう、祢衣ちゃん。見ない間に背伸びた？」
「うっ、地味に気にしている事を。これ以上大きくなりたくないのに」
現在の身長は１７０センチ超。女子にしては少し大きめである。
「おはよう、こころ」
縫は、こころに挨拶すると、
「おはよう」
「どうしたの、恋煩い？　変な顔して」
超能力を発揮した。
「エスパーだ！」
エスパー縫が降臨した。
「ふっふっふ、冗談だよ。そういえば、咲夜さんからこの間連絡来てね、夏休み前の七月に陽ノ宮に来るって……だから……」
７月、今は４月。あと３ヶ月……こころにとっては少し長かった。
縫が喋ってくれたお陰で、祢衣が縫に訊ねる手間が省けた。
「本当！？」
「あら、本当に恋煩いだったの？」
「うん、朱鷺羽咲炉君で頭がいっぱいなんだって」
「陽ノ宮に来た時にお姉さんから朱鷺羽君の居場所聞ければ良いんだよね？」
「そういうことになるけど」

『みんな～お・は・よ・う』

聞き覚えはある。ただ、その声の持ち主はいつも無駄にエネギリッシュで、気だるそうにしている。
死にそうな声はまず出さない。
「那癒、どうしたの？」
那癒多は杖をついていた。

縫は那癒多に駆け寄る。よく見ると包帯がいたる場所に巻かれていた。
「どうしたの、この包帯？」
「バカ、触れるな！」
「あっ」
静止を求めるが、遅かった。
「ぎゃぁあああああああぁぁあああぁあぁぁぁぁああああぁああっぁぁああああああああああああ！」
叫ぶ。それ以外に痛みを緩和する方法が無かった。
「那癒、どうしたの？」
那癒多は息を切らす。息を整えながら答える。
「筋肉痛だ」
「筋肉痛？　その包帯は？」
保冷剤だ。取り敢えず、冷やさないとやばい。
「無理に学校来なくて良かったのに」
尤もな意見だった。こんな状態で学校に来ても意味が無い。ましてや、今日は始業式、そんな張り切る理由も無い。
「何を言っている？」
「えっ？」
「私の休息出来る場所はここしかないんだぞ！」
那癒多は泣きそうな顔になりながら、そう訴えた。
しかし、運動神経抜群の那癒多がこんなにもボロボロになる理由を考えるとそれも当然のように思えた。
「一応、訊こう。何があった？」
「母さんが、化け物（師匠）連れてきた」
「ししょう？」
「そうだ、これからも夜の狩猟者続けるかって聞かれて、続けるって答えたら化け物が来て、修行が始まったんだ。初日から空から地上に叩き付けられたり、飛行機の翼の上で戦闘したり、マシンガンをかわせって言われてかわしたり、そりゃもう、命が幾つあっても

足りなかった！」
「……もう4月1日は過ぎてるよ、那癒」
「嘘じゃないぞ、ほら」
包帯を取ると、そこには銃弾が食い込んでいた。
「高速治癒は？」
「魔力による治癒を無効化にする銃弾使ってきてる。弾は師匠にしか抜けないんですと。痛い痛い」

那癒多が人間をやめる日は近い。

「なゆなゆ大丈夫？」
「大丈夫だ、問題ない」
「……痛そう」
「それより、時間ないぞ、みんな遅刻するぞ」
のんびり歩いていてチャイムが鳴るまであと5分。ここから教室まで約2分。
しかし、今の那癒多にあと5分で教室に行けというのは随分と酷な話だった。
「私に構わず先に行けぇえええ！　な～に、すぐ追いつくさ」
「でも、那癒ちゃん……」
「いいから、行けぇえええええ」
「行こう、那癒の犠牲を無駄にしちゃいけないよ」
「なゆなゆ、わたし、なゆなゆの事忘れないから！」
三人は校舎の方へ消えてゆく。

「ふぅ、ちょっと茶番が過ぎたけど、面白かったなぁ」
那癒が一人で感慨にふけていると、
「そして、休息の場所などあなたには存在しません」
那癒多の恐怖の代名詞の声がする。
「えっ？　まさか……」

「そのまさかです。あなたの師匠の朱鷺羽未咲です」
頭の横に狐のお面を付けている幼女がそこにいた。
「学校まで来るなんて非常識じゃないか？」
「うーん、それもそうですね少し休息を与えましょう。約束してあげます。学校では”私”は手出ししません」
「常識の範囲内のルールを守っていただきまことにありがとーございます」
「よろしい。じゃあ、学校生活を謳歌してね、グッバイ」
未咲が姿を消す。
包帯だらけの自分の姿を見る。
「……これは死ぬかもしれない」
那癒に明日はあるのか？

少し遅れて那癒多が教室に入ってくる。教師には怒られなかった。心配はされたが。
「学校は素晴らしい、敵がいない」
と、思う時期が彼女にもありました。
存在したのだ。敵が、同じ夜の狩猟者、赤羽那癒多の天敵が。
「先生、ほけんし」「良いぞ、行ってこい。誰か連れてってやれ」
那癒多は縫とこころに連れられ保健室に向かった。
初日那癒多は保健室で眠った。
その日、那癒多は久しぶりに安らかな顔をしたという。

第3話　4月（2）　新学期（後書き）

文章力がここに来て酷いですね（汗）

第4話　4月（3）　スペル・コード部と廃部の危機

「那癒～迎えに来たけど」
『今行くー』
家の中から声が聞こえる。
次の日。三人は那癒多の様子を見に那癒多の家まで来ていた。
昨日の下校時には登校時に比べ元気になっていたが、それでも心配だった。
なので三人は早めに家を出て那癒多と一緒に登校しようと決めたのだ。
「悪い、待たせた」
包帯は無く、いつも通りの元気な那癒多がそこにいた。
「何だ、縫。馬鹿みたいな顔して」
いつも通りの毒を吐く。
「良かった……いつも通りだ」
怒るべき場面にも関わらず、思わず安心してしまった。
「那癒、いつも通り突っ込んでくれ。調子狂う」
「ああ、はいはい」
いつも通りの二人の会話。つられて祢衣とこころも安心する。那癒多が元気じゃないと、何だか気持ち悪いのだ。
「良かったよ～元気になって」
満面の笑みを那癒多に向ける。
「おおー、祢衣の笑顔で元気百倍だぜ！」

祢衣の笑顔：疲労回復の効果と魔性の魅力があるでしょう。

那癒多は一つ疑問を抱く。
（なゆなゆの回復力は常人の域を超えている。……もう人間の回復力じゃない……。そのなゆなゆがあれ程疲労する修行って一体……）

別の意味で心配になる。那癒多が修行で命を落とすことも有り得ると。自分に出来る事があるなら何かしようと思う。

だから、こころは、

「ねぇ、なゆなゆ、ちょっと良い？」

那癒多に提案した。

◆

「迷走鬼、ちょっと来なさい」

朝のＨＲの終わりに担任の教師が縫にそう言った。

「やーい、先生に怒られる～」

「はいはい怒られる。もう、何言われてるのかわかってるから、大丈夫だから」

縫は教室を出て行く。五分ほどすると帰って来た。

「マズイわ」

「私の母親の弁当はマズイ」

「本当にマズイわ」

「突っ込みをサボるなよ！」

縫の表情におおよそ余裕というものは無かった。那癒多は表情を切り替え、縫の話を聞きに入る。

「スペコ部の部員数が少なくて……このままだと廃部になる。……何とか勧誘して１０人以上にしないと……」

陽ノ宮高校の校則によると、部活動は最低十人いなければならない。

去年祢衣とこころが入ったため、三年生が４人、二年生２人。計６人。一昨年まで卒業生がいた。つまり、今年中にその穴を埋めるために最低４人が入部しなければならない。

「成る程、じゃあ勧誘か」

「ええ、だから二年生の部員にも声かけないと。こころもちょっと良い？」
「うん」と返事をして、こころも会話に参加する。
「部活の事なんだけど……」
縫は簡潔に状況を説明する。
「わかった。縫ちゃん、そういえばわたし、二年生の部員の人にあったことなかった」
「あっ、忘れてた」
「そうだな、祢衣とこころの顔合わせも兼ねるとしよう」

～昼休み、理科実験室～
昼休み、理科実験室には計6人の生徒がいた。
「那癒と私の事は全員知ってるから省略。じゃあ、祢衣とこころから紹介お願い」
縫の促され、二人は自己紹介を始める。
「葵祢衣です。よろしくおねがいします」
パチパチと拍手の音が響く。
続けて、こころの番、
「二ノ宮絵心です。去年転校してきました。よろしくおねがいします」
紹介を終えると、縫は「じゃあ、二人ともお願い」と二人に促した。
「「はーい」」
二人の内の一人少女が祢衣とこころの前に立つ。小柄で、身長は那癒多と同じくらい。短髪で前髪がピンで止められている。
「青葉　千尋（あおばちひろ）です。よろしくです」
「よろしく」
「よろしくね」
続けて、もう一人の少年。現在唯一の男子生徒である。

「古賀仁志（こざとひとし）。よろしくお願いします」
二人は同様に挨拶を済ませる。
四人が簡単な自己紹介を終えると、部長の縫が進行を務める。
「えー、みんな察している通り、我が部は今最大のピンチを迎えています。来年、私達三年生四人が抜けると、この部は廃部になります」
「あっ、本当ですね」
「あんま来ないから気付かなかった……マズイな」
今日になって自分の所属する部活の危機を知る二人。態度とは裏腹に、かなり動揺していた。
（どうしよどうしよ……この部活の縁がなかったら古賀くんと……）
※青葉→古賀
（おおおおおお、落ち着け。慌てるな、まだ、廃部になるわけじゃない。もし、この部が無くなったら青葉と……）
※古賀→青葉
「とにかく、四人は入部してもらわないといけないから宜しく！期日は４月末だから。これで解散」
縫の言葉で二年生二人は肩を並べて去って行く。
「なぁ、縫」
那癒多の無駄な第六感が働く。
「何？　那癒」
「うちの部活ってこんなラブコメってたっけ？」
「さぁ？」

◆

という事で、新入生勧誘が始まる。
二年生二人のやる気が凄まじかった。

『スペル・コードに興味はありませんか？』
『機材も使い放題です、是非見ていって下さいね』

「ふむ、このままだと不味いな」
「ええ」
「頑張ってるけど、新入生の人来てくれないねー」
「仕方ない、催眠魔術で……」
「こころちゃんが怖い事言ってるよ！」
「確かに……それくらいしないと駄目かもな……」
「……」
「どうした？　縫」
「いや、いくら何でも集まらな過ぎる、と思って」
縫に言われ、那癒多は辺りを見渡す。確かにそうだ。人通りが少なく。多くの新入生がこっちを見ようともしない。まるで、スペコ部を避けているとしか思えない。
「まさか……」
「そう、そのまさか。それしか考えられない」
「火山か！」
火山薫。風紀委員長。この時期、風紀委員には恒例行事がある。『風紀整理』。学校に貢献しない部活、部費の割に成果を挙げられていない部活、存続困難な部活を潰す行事。風紀委員と教師の負担を減らし、学校予算節約の目的がある。
その対象になった部活は執拗なまでの妨害を受け、大抵の場合廃部になる。
「まずい……前年度はこれといって成果を挙げてない。それどころか、ちゃんと活動してなかった」
「弁解の余地無しだな」
「やっぱりわたしが催眠魔術で……」
「こうなったら、メドゥーサで……」
「おーい二人とも危ないことするなよー」

六人は一旦部室に戻り作戦会議をする事にした。
「しかし、火山の妨害はやばいな」
「ええ、幽霊部員も許すわけないでしょうし……、火山が妨害して来るとわけってハードルが上がったわけか……」
「縫ちゃんどうするの？」
「部長さん！　何か策はないんですか！？」
祢衣と青葉が必死に縫に問いかける。
「方法はあるけど……」
「参謀縫ちゃん、それは何かな？」
こころは少し悪い顔をして、縫に訊ねる。
「弱みを掴む」
「火山の？」
「それでも良いけど、出来れば風紀委員の。例えば、不当な取り締まりとか」
「希風以外の不当な取り締まりかー」
「はぁ……ほんと、あいつに文句言えたらどんなに楽か」
水樹希風には暴力を正当な指導とする絶対的な権限がある。そのため、彼女は風紀委員の弱みとなり得ない。逆に、希風が風紀委員の不当な取り締まりをしてしまえば、それは正当な取り締まりとなるのだ。
「優等生の集まりの風紀委員の弱みを握るか……」
「ふっ」
こころが席を立ち、自信有り気な顔になる。
「諜報活動なら任せて」
元・『四之宮』の執行人二ノ宮絵心の腕の見せ所である。
「おぅ、こころ、頼んだ」
「私もキャメロット使って風紀委員が怪しい動きしないか見張るよ」
「あの……」
青葉が手を挙げる。
「風紀委員を何とかしても……その……根本的な解決にはならない

んじゃ……」
「「「「あっ！」」」」
四人はぽかんと口を開けたまま動かなくなる。
四人の頭は風紀委員しか無かった。
そうだ、風紀委員の妨害を阻止しても、結局の所、部員不足を何とかしなければどうしょうもないのだ。
「じゃあ、こうしましょう。私と那癒と千尋と古賀君で勧誘を続ける。祢衣とこころは風紀委員の弱みを握る。または、妨害の阻止をお願い」
「ああ、それで問題無いな」
「祢衣ちゃんと仕事か」
「こころちゃん、頑張ろうね」
「うん」
こうして、スペコ部存続作戦が始まった。

第４話　４月（３）　スペル・コード部と廃部の危機（後書き）

久しぶりの更新で文章力が凄い事に……。時間が出来たら即刻編集したいです。

第5話　4月（4）　火山と素敵な賄賂

【火山薫の印象と言えば？】

同じクラスの面々に訊いてみた。

・少年Kの場合

「え、火山？　ああ、出来れば関わりたくないね。第一ボタン開けてただけで水樹使って指導だぜ？　冗談じゃない。やべっ、水樹だ。……ぎゃぁあああああああああああああああああああ！」

・少年Sの場合

「印象？　そうだな……冷徹無比って感じかな？　規律に厳しいよ。自分にも他人にも。公平だ。まぁ、自分がきちんとしてれば害はないし、この学校って色んな意味で問題児多いから良い抑止力になってるんじゃないかな？」

・少女Aの場合

「一言で言うと……融通が利かない。悪いやつじゃないんだけど、とにかく頑固。自分が正しい事をかこつけて、他人の意見を無視。で、逆らう者は希風で一刀両断。まぁ、良いところもあるんだけど……。ああ、そろそろあいつが希風に半殺しに逢う時間だからこの辺で……」

この通り、火山薫の印象はあまりよろしくない。規律を守る法の番人が如く陽ノ宮高校に君臨する彼女。

今日は彼女の一日に迫ってみよう。

【5：00】

起床。毎日この時間になると起きるよう身体が出来ている。一秒の狂いもない。

起床すると、まず洗面台に向かう。顔を洗いうがいをする。彼女はご飯を食べた後歯磨きをする派である。彼女曰く、「ご飯の前に歯を磨く意味がわからない」だ、そうだ。

「お嬢様、朝食のご用意が出来ました」

専属のメイドが彼女にそう告げた。

「わかった。すぐ行くわ」

彼女もすぐに返事を返して食卓へ向かった。

一人で食事をするにはこの食卓は大き過ぎる。

彼女の側には執事長、メイド長がいる。少し離れ、執事とメイドが十人ずつ控えている。食卓に響く音は、彼女のスプーンやフォークが食器に当たる音だけ。いつまでも静寂が続く。慣れたとはいえ、少し寂しいと彼女は思う。

幼い頃から彼女は一人だった。両親は仕事でずっと家を空けている。自分を育ててくれたのは、執事長とメイド長。だから、両親というものを彼女は良く知らない。……家族というものをよく知らないで育った。

食事を終え、歯を磨き、着替えを済ませる。いつも通りの行動だ。

【6：00】

学校の道具の最終チェックをする。間違いの無い事を確認して家を出る。

「お嬢様、お車の準備が出来ております」

「ありがとう」

執事長に促されるまま車に乗り、学校へ向かう。会話は無い。それが普通だから、彼女は何とも思わない。

【6：20】

学校に到着。彼女が朝早く登校する理由は、あまり目立ちたくないからである。学校に来るのにこの車は目立ちすぎる。

「行ってらっしゃいませ」

「行ってきます。帰りは何時になるかわからないので迎えは要りません」
「かしこまりました」
執事長はそう言うとゆっくりと車を走らせ去って行った。
「さて……」
風紀委員の教室へ向かい、彼女は仕事を始める。風紀委員の仕事はほとんど彼女が請け負っている。この朝の時間を使ってほとんどの仕事は片付けてしまうのだ。
何故か？　彼女自身はわかっていないが、寂しさを紛らわすためだ。やるべき事があってそれに没頭する。仕事を必死でしている時だけ寂しさから逃れられる。

【８：００】

仕事を終え、教室に戻る。教室は騒がしく、「静寂」という言葉からはかけ離れている。この平和な賑やかさを脅かす人物がいる。「三岸御影」。このクラスの委員長。彼女に嫌悪感を抱いたのは、一年生の時。彼女はある問題を起こした。その事件は、学校全体を巻き込む大事件。去年のブラックアウト症候群に並ぶ騒動だった。
みんなが怯え震えているにも関わらず、御影は一人”笑って”いた。直接的に御影が悪くないのはわかっている。だが、彼女は許せなかった。自分の家族の様な存在である学校の生徒を危険に巻き込んだ事を。だから、彼女は御影を嫌う。同時に御影を気にかける。御影も学校の一員だから。
「さて、そろそろか……」

「ブレェェェイイィィイイイイク！」

８：３０分ジャスト。奇声と共に轟音。バイクによりドアが粉砕される。
「はーい、出席取るぜ」

担任の私市が教室に颯爽登場する。
「せんせー、笠原がバイクの下敷きになってまーす」
「おう、そーりー。大丈夫か？」

『へんじ　が　ない　ただ　の　かさはら　の　ようだ』

「うむ、大丈夫だな」
「何殺しかけてるんだよ！」
「おう、生き返ったか……チッ」
「せんせ、今舌打ちしなかった？」
「じゃあ、今日も勉強頑張れよ。ハハハハハハハハハ」
バイクに乗り、私市は去って行く。８組のいつもの風景だった。
だが、彼女は気付いた。御影の様子に、違和感に……。
「御影さん」
「……何よ？」
火山の中の御影は愛想笑いを振りまく道化師の様な存在。その道化師が今日に限って暗い顔をしていた。顔面蒼白。目は真っ赤。火山は思い出していた。二年前の事を。
（確か、こんな様子になってからしばらくしてあの事件が起きた……まさか、今回も？）
「顔色が優れないけど、どうかしたのかしら？」
「珍しいわね、アナタが私の心配なんて」
「憎まれ口を叩ける程の元気があるなら大丈夫でしょ」
火山は背を向けて、御影に囁く。
「もし……悩みがあるなら私にぶつけなさい……絶対に……」
「……」
御影は黙ったまま。火山もそれだけ言うと自分の席に戻って行った。

【１６：００】

放課後、風紀員の仕事。風紀委員内での会話は少ない。火山や水樹を怖がって自分から話す生徒は少ない。

【19：00】

帰宅。帰りはいつもこれくらいの時間。一人帰路を行く彼女。彼女の至福の時がこの帰宅時の時間だ。

「ほら、持って来たよ」

足を止め、そう呟く。

人影はない、火山には水樹の様な霊能力はない。だから、幽霊が見えているわけではない。一人でいもしない幻想を会話するメルヘン電波少女というわけではない。

体勢を低くする。そこにいたのは……、

「今日も来たよ、みんな」

『にゃぁあ』

猫だった。大量の猫が火山の周りを囲む。鞄から取り出したのは猫の餌の缶詰、他市販の猫の餌。

そこには、大量の猫と、――火山の笑顔があった。

ここにいる猫は全て捨て猫。もしくは虐待を受けた猫。火山は家で飼えないので、ここに猫を集め飼っていた。放課後何か理由を付けて必ずここに立ち寄る。雨の日も風の日も雪の日も。猫達のために、自分と同じ寂しきものと傷を舐め合うために。

「お前達は良いね、仲間がいて」

火山の目は何処か哀しかった。

「にゃぁ」

「そうか、仲間がいるのは嬉しい事なのか……。私には、友達と呼べるものがいない。欲しくないわけじゃないんだ。でも……どう接して良いかわからなくて」

『なぁーんだ。鬼の風紀委員も人間らしい所あるんだ』

「誰！」

誰もいないと油断していた火山に話し掛ける人影。

「隣のクラスの二ノ宮絵心と」「同じクラスの葵祢衣です」

「二人とも、こんな時間に……なに……を」

自分も人の事を言えない事に気付く。

「ちょっと野暮用で」

「同じく野暮用で」

「へぇ、奇遇ですね、私も野暮用ですの」

「奇遇だねぇ」

「奇遇だ」

二人は微笑む。

「じゃ、わたしはこれで、行こう祢衣ちゃん」

「ちょっと待って」

祢衣は火山に寄り、「寂しかったら私達の部活に入ると良いよ」と満面の笑みを浮かべ、火山を射貫く。

「じゃあね、火山さん」

二人は闇へ消えて行く。

「にゃぁ」

「……」

残ったのは猫の鳴き声だけ。

「ずるい……言いたい事だけ言って去るなんて」

溜め息を吐き、立ち上がり、見えなくなった二人の方を見て「ちゃんと返事言いたかったのに」。そう、呟いた。

◆

次の日。いつも通り火山は猫に会いに行った。
「……いない？」
いつも火山が来ると現れていた猫がいなかった。探す、でも見付からなかった。
周辺を走ると、怪し気な魔導師がいた。魔導師は男で、長身で筋骨隆々と言った感じだった。
魔導師の男の持つ大きなゴミ袋のような袋の中から鳴き声が聞こえる。
『にゃあ』
(確かにあの子達の声だ)
魔導師の実験、夜の獣。
捨てられた動物の末路は大体こんな感じ。魔導師に捕まり実験道具にされる。
火山は動けなかった。足がすくんで動けなかった。
怖い。
恐怖が火山の頭を駆け抜ける。
(あの子達が実験道具にされるのが怖い、でも、私に何が出来るんだろう？　私もあの魔導師に酷い事されるかも……嫌だ。怖い怖いよ……何も出来ない自分が憎らしい)
『にゃああ』
猫の鳴き声が木霊(こだま)する。その声で彼女は……火山薫は吹っ切れた。
「そこの魔導師さん、少しよろしくて？」
足は震えていた。学校での火山を知るものがいれば笑うだろう。
「どうしたんだい？　可愛いお嬢ちゃん」

下品な顔と声。火山は本当の人間の中のクズと出会った。
「ちょっと訊ねたい事がありまして」
「良いよ、何だい？」
卑しい表情で男は答える。
「何で、その子達を捕まえたのですか？」
きょとんとするも魔導師は即答する。
「そりゃ、生命掌握の実験のために決まってるだろ」
わかっているからこそ腹を立てる。
「違います。意味が違います。どうしてそこ子達じゃなければいけないのですか？」
「そりゃ、捨てられてたからだろ。有効活用しないとな、落ちてる命は」
わかっていた。こんな人間に腹を立てる事は無駄だと、でも、言わずにはいられなかった。
「――この、クズが！」
火山は生まれて初めて汚い言葉を吐く。
「なん……だと？」
「どうして、捨てられたものをいたわる気持ちを持ち合わせていないのですか？　捨てられて実験道具にされて、この子達は何のために生まれて来たというのですか！」
「そ、そりゃ、俺達魔導師の糧となるために……」
「……一人で寂しかった私の、家族に手を出すな！」
火山は叫ぶ、感情をぶつける。魔導師の元へ走り、手にかみつく。
「いてぇ！」
男はたまらず袋を落とす。中から猫達が出てくる。
「さぁ、今のうちに逃げなさい！」
猫達は散って行く。
「てめぇ！」
「うっ」
火山は顔をぶたれる。それでもなお魔導師の事を睨み続けた。

「この野郎……ひん剥いてじっくりといたぶってやる……」
魔導師は火山の首をしめそのまま押し倒す。
「くぅ……この変態……」
「へっ、その生意気な口もすぐに利けなくしてやるぜ」
魔導師の太く汚い手が火山に触れようとしたその瞬間。

『パァーン』

銃声がした。牽制のための発砲。誰に当たったわけでもない。
「誰だ！」
魔導師は銃声の方を見る。
「誰だって言われても困るなぁ。えっと……魔術師の二ノ宮絵心です。以後お見知りおきを」
「魔術師……だと！」
魔導師以上に火山が驚いていた。
（二ノ宮さんが魔術師？）
「猫見に来たらいないんだもん。びっくりしたよ。さっき猫達がこっちに来いって誘導するから何かと思ったらそういう事か」
こころは溜め息を吐く。そして、最後の忠告。
「その子から離れないと五体満足で”生きて”帰れないよ」
死ぬ事は確定。どんな死に様になるかは保証しない。最後の警告だった。
「魔導師は火山から離れる」
「よーし、じゃ……って、えー」
魔導師はこころに襲いかかってくる。錯乱状態に陥っているとはいえ、もっとも愚かな選択をした。
「捕まえた！」
魔導師はこころを捕まえる。
「それは魔術で作った残像だよ」
こころは魔導師の後ろに立つ。

「あぅ……ああ」
恐怖のあまり魔導師は震える。それ程までにこころの殺気は凄まじかった。
「じゃ、火山さんを話してくれたから、五体『不』満足で帰してあげるよ」
肉体強化をかけたこころの蹴りで魔導師は吹っ飛ぶ。数メートル先の電信柱に当たり、電信柱が折れる。
グゥアン、と物音を立てて電信柱が倒れる。
「あっ……やばい。やりすぎちゃった」
舌を出して自分の頭を小突く。
火山の元に寄り手を差し伸べる。
「大丈夫？　火山さん」
「え、ええ。ありがとう」
「良かった。怪我は無いよね？　変な事されてない？」
「大丈夫、少し頬をぶたれただけだから」
「あっ、本当だ。ちょっとじっとしてて」
こころの手が火山の頬に触れる。呪文の詠唱を始めるとすぐに腫れが引いて行く。
「これで、良しっと」
「ありがとう」
「どういたしまして。そうそう、あの猫だけど――」
こころの提案に火山は快く頷いた。

◆

「駄目だ、人数が足りない」
放課後、理科実験室。
みんなの健闘虚しく、新入生で入ってくれたのは二人だけ。あと

二人足りなかった。
「まぁ、縫落ち込むな。頑張っただろ、私達」
「そうね、全力は尽くした。まだ、火山を説得するって手があるし……」
見計らった様に扉が開き、火山とその他風紀委員が入って来る。
「今日が期日よ」
「わかってるわよ」
「部員届けを出して」
縫は大人しく火山に部員届けを渡す。受け取った紙に火山は何やら記入してゆく。
「これで、規定数以上の人数ね。問題無いわ」
こころと祢衣以外の部員は疑問符を浮かべる。一同は部員届けを眺める。
「縫、おかしいな、何か火山薫って書いてあるんだけど」
「那癒、おかしいな……一年生の名前まで書かれてる。確か風紀委員のメンバーだ」
「そういう事。じゃあ御機嫌よう」
火山達が部屋から出て行く。
「待って火山、訊きたい事がある」
火山が足を止める。他の風紀委員に「先に行ってて」と促し、火山だけが残った。
「何かしら？」
「どうしてこんなマネを？」
火山は肩をすくめ笑って答えた。
「賄賂を……貰ったからよ。素敵な賄賂をね」
「ちょ」
それだけ言うと火山は部屋を去って行った。
「何よぅ……」
縫は何だか消化不良だった。
「まぁ、良いじゃないか。存続出来て」

「まぁ、そうだけど……」
「それより、こころと祢衣は何か知ってるな？」
「「さぁ？」」
いかにも知ってるという反応を取り、はぐらかす。
「教えろー」
「ええー知らないよ。ねぇー祢衣ちゃん」
「ねーこころちゃん」
理科実験室から賑やかな声が響く。祢衣とこころの賄賂によって。

◆

「どういたしまして。そうそう、あの猫だけど――」
こころは火山に持ちかける。
「祢衣ちゃんの家で飼う事にする」
「……えっ？」
意外な提案に火山は聞き返す。
「葵さんの家で？」
「そう、外だと危ないし、やっぱ飼った方が良いかなって」
「そう……」
「で、取引。スペコ部を存続させて欲しい」
「どういう事？」
「もし、存続させてくれないなら、猫は猫鍋にでもして食べちゃう。存続させてくれるなら、あなたは今まで通り猫たちとふれあえる」
「賄賂……ってわけ？」
「そういう事」
火山は笑う。ついさっき助けてくれた恩人の頼みを断る事も出来るはず無いというのに、こころはさらに条件を付けて来るのだから。
「良いでしょう。飲みましょうその条件」

「最後にもう一つ条件」
「はいはい、何でも聞きます」
ヤケになり気味でこころの話を聞く。
「わたし達と友達になって」
「えっ？」
「良いでしょう？」
「……良いわ」
「これで、良しね。じゃあ、そういう事だから。よろしくね『かおるん』」
「かおるん！？」
変なあだ名で呼ばれたじろう火山。でも、悪くないと思った。
賄賂は渡してしまった以上返せない。だから、火山とみんなはもうずっと友達。
綺麗で、優しいこれでもかって位の最高に素敵な賄賂を火山は受け取った。

第5話　4月（4）　火山と素敵な賄賂（後書き）

気のせいかな？　最終回っぽくなってしまった。
次からヘリウム位軽い話です！

第6話　5月（1）　那癒多と未咲（1）

――痛いのはやだ、だけど、死ぬのはもっとやだ。
……だから、緊急時には痛みは無視する。

――赤羽那癒多

慣れというものは怖いもので、那癒多はあの修行に慣れて来ていた。
少なくても、筋肉痛に苛まれることは無くなった。
今までの筋肉痛も高速治癒を使えば直せたが、筋肉痛に魔力を使ってしまうと、他の怪我の魔力が無くなってしまうため今までしなかった。
何より、高速治癒がまだ使えるというのは精神的な余裕が出来て良かった。
魔力の配分がわかっていなかった序盤の方、始業式の日は、筋肉痛に高速治癒を使い続けた結果、魔力を使い果たし、あの様な状態になってしまった。
身体の慣れた今なら、寝る前にでも高速治癒を使えば魔力が足り、次の日のパフォーマンスに影響は出なくなる。
筋肉は鍛えて虐めて休んで強化される。那癒多は”休む”という工程を経る事無く、鍛え続ける事が出来るようになっている。
その結果、那癒多は、あるラインに達していた。

「――ッあぶね」
「大分かわせるようになったか」
「ああ」

那癒多は未咲の攻撃を紙一重であるが確実にかわせるようになっていた。
「感心する。この短期間で私の攻撃が当たらなくなったのは君で二人目だ」
「そりゃ、どうも。……なぁ、あんた最悪だな」
唐突なその発言にも未咲は何の動揺も無かった。一応だが、心当たりがあるからだ。
「あんた、『私の身体能力』と『自分の身体能力』を魔術で完全に一致させてるな。それを、強化魔術で強化してる」
「如何にも」
「つまり、私は最初からあんたより強くなれないってことだよな？」
「理論上は、そういう事になる」
「理論上？」
「私は自分の身体能力しかいじっていない。君が自分のスタイルを見つけ、私を凌駕すれば私に勝てる」
「あんたの下で修行している限り私はあんたに勝てない、繰り返すが、魔術の腕はそっちが上で、身体能力は同じ。X＋αの式だとXの値は一緒で、勝敗を分けるのはα、私はそのαで負ける……違うか？」
「……私は今まで弟子を何人か持った事がある」
突然過去を語り始める未咲に那癒多は意外がる。未咲が自分から語り始めるのは初めてだったからだ。だから、自分の話を無視した事は大目にみた。
「さっき言った弟子は最後の日、私に勝ったよ。どうして勝てたと思う？　身体能力は同じ、魔術は私の方が上……では、何故？」
「それがわかったら苦労しない」
全くもってその通りだった。
「あの弟子は、私の修行を基礎に、”自分”で勝つ術を見出した。だから……」
そこで、那癒多は結論に辿り着く。

「結局……自分で考えろって事か」
「その弟子に言われたよ『師匠の言う事聞いてばかりじゃいけない』って」
「へぇ、参考までにその弟子の名前聞いておこうか」
「朱鷺羽流次期頭首候補、朱鷺羽咲夜」
そこまで意外ではなかった。朱鷺羽の姓を持つ以上、師匠も朱鷺羽の可能性は充分にある。
それに、朱鷺羽咲夜の強さは尋常ではないと、陽ノ宮でも大分有名だった。
「へぇ、知ってるぞ。会った事はないけど」
「何処まで知ってる？」
未咲は探りを入れるように凄味をかけて問いた。
「弟がいる程度しか知らないよ」
「そうか」
安堵の息を吐く未咲、朱鷺羽家にはある秘密がある。そこまで知られていたら、記憶操作の魔術でも使ってその記憶を消す必要があった。
那癒多は、何気無く疑問をぶつける。
「次期頭首候補って何だ、”候補”って」
「弟か咲夜が次期頭首になる」加えて、未咲は、「残念ながら、弟じゃ咲夜に勝てないさ」と、はっきり”言い切った”。
「言い切れるのか？」
「ああ、アレは間違いなく天才だった。弟にもあったが何か違うんだ。他の人間とは違う何かを持ってる」
「そんな天才と比べられていたのか」
「那癒多、君は頭が悪いようだから意地悪無しで教えよう」
「はっ？」
「私がいじっているのは身体能力だけ。魔力も実は制限してある。君が勝てる可能性は一応はあるんだ」
那癒多は隠しもせず胡散臭そうに感じながらも、それが事実であ

ることを信じた。特撮でもそうだが、必ず正義の味方が勝つ。負ける事もあるが、勝つ可能性が必ず秘められている。だから勝つことが出来る。

この修行もそうだと思いたかった。

「おい、何か鳴ってるぞ」

「ああ、すまない。電話だ」

未咲の容姿と口調の違和感にそろそろ慣れて来たつもりだったが、子供用の携帯を出してきた時にはもう訳がわからなくなっていた。

「ああ、もしもし。ああ、そろそろそっちも動いてくれ。頼む」

「で、何だそのふざけた携帯は」

「昔の話だ」

ふと、遠い目をする。溜め息を吐き、自分の黒歴史を暴露するような様子だった。

「私は相手に会わせて肉体の年齢を変えて楽しんで戦ってた時期があった」

その時点で那癒多は「本当にロクでなしだな」と思う。

「その時、現頭首、咲嵜に馬鹿にされた。頭首がなんぼのもんじゃーって挑んだらボコボコにされた」

「そんで？」

「この携帯持たされた。捨てても壊しても朝起きたら枕元に……そんな携帯だ」

「へぇ、あんたも人間っぽいところあるんだな」

那癒多は爆笑を堪える。

「ぐはっ」

だが、未咲に蹴られ、意識を絶たれた。

◆

「そろそろ、技教えようかなー？」
目覚めて最初に言われた事がそれだった。
「技？　かめはめ波とか太陽拳とか？　それとも波紋の呼吸？」
「私が朱鷺羽家の人間だってこと忘れてないか？」
未咲はやれやれと首を振る。
「すまん、それ以前に人間だと言う事を忘れてた。……ぐふっ」
未咲の蹴りが那癒多のみぞおちに食い込む。
「女が女にすることじゃないと思う、マジで」
「人間じゃないんだろう？　私は」
「悪かったから、続きを」
「口の利き方がなぁ」
「ごめんなさい、おねがいします」
那癒多の精一杯の敬語だった。
「朱鷺羽家は皆どんなに才能が無くても身体能力が高い。で、例外もいるけど、基本的に魔術だけで戦うことが少ない」
「はっ？　意味が分からないんだが」
「朱鷺羽咲嵜は”黒印”魔術、咲夜は”光華”っていう魔術を使って自ら戦うを事を主体としている。さっきのかめはめ波みたいに、魔術でそのまま攻撃することを好まない。その性格は初代朱鷺羽頭首から引き継がれているらしい」
「私は馬鹿だから簡潔に言わないと伝わらないぞ」
那癒多は胸を張り、告げる。
「わかった、簡潔に言おう。朱鷺羽家は肉体強化と戦闘補助を主体としている」
その時、縫の鍾乳洞での発言が思い出された。

『私、考えたんだけどね、近接戦闘なら私達も魔術師も大した変わらないと思うの』

「近接戦闘に特化した魔術師、それが朱鷺羽家。で、朱鷺羽家には

朱鷺羽流っていう技が幾つも存在する。それを教える」
「良いのか？　何か秘伝の技っぽいけど」
「ふふぅー」
未咲は今までの修行期間の間で一番の笑顔を見せる。
「並の人間じゃ朱鷺羽流は使えない。だから、別に秘伝の技ってわけじゃない。身体能力が高くないと使えない。朱鷺羽家並の身体能力を持たないと使えないってわけ」
「へぇー」
「今までやってきたことは体力作り。あんたは見事朱鷺羽家並の身体能力に達したってわけ」
「まじでか」
「不気味な位まじ。体の丈夫さが異常。化け物よ。特に右腕。その腕に関しては朱鷺羽家とかじゃなくて、人間を超えている」
「あっ」
骨は折れると丈夫になる。那癒多はインパクトで何度も腕を折ってきた。
さらに、高速治癒で治した。
折って治す折って治す折って治す折って治す折って治す折って治す……。この苦行を繰り返すことで、那癒多は常人では考えられない耐久力を手に入れていた。
「魔術を教える。肉体強化。多分、今日一日あれば出来ると思う」
「根拠は？」
「だって、あなた高速治癒の方が遙かに難しいもの。で、その前に朱鷺羽流奥義を教える」
「順序逆じゃないか？　それに奥義って普通幾つもの技を覚えてからじゃないのか？」
「朱鷺羽流の技全部覚える気？　数百個技あるけど」
「やめとく。無理」
「ついでに言うと、頭首でも使えない技が存在する」
「何なんだよ朱鷺羽流！」

頭首に使えない技があってはいけない筈なのだ。あの鷺ノ宮の頭首が使えないのなら、那癒多に使えるわけなど無かった。頭首に使えない技は人間が使えない技なのだから……。

「教える技は朱鷺羽流、奥義・鷺烙印」

「さぎ……らくいん？」

「そう。自分の魔力を相手に叩き込む上級奥義」

「難しそうだな」

「難しい。私も習得するのに何ヶ月も掛かった」

「そんな技を私に？」

また嫌がらせかと思う。振り返れば、素手で岩を割れとか、雲を掴めとか無茶な要求をして来た。これもその一環なのかと疑わざるを得なかった。

「簡単よ、要領はインパクトと同じだから……、」

未咲は意地の悪い顔で微笑む。

「インパクトは与える衝撃を増幅させるコード。鷺烙印は魔力を相手に叩き込む奥義。ちょっと似てるでしょ？　……デメリットさえもね」

原理もタイミングも一緒。鷺烙印の難易度の高さは、それらを身体で覚えるのに時間が掛かると言う事。那癒多は、そのタイミングを既に身につけている。

「何となくわかった。肉体強化を教えるってのはそういう意味か」

肉体強化にも色んな種類がある。てっきり、那癒多は筋力を増加して威力をもっと高めると思ったが、違った。肉体強度を上げて、鷺烙印に耐えられる様に強化するという意味だった。

皮肉にもインパクトを扱っていた那癒多だからこそわかる事だった。

「最悪だな」那癒多は悪態を付きながら未咲に言った。

「ふっ」と笑って未咲は続ける。

「自称馬鹿なのに飲み込み早いわね。その通り。失敗すれば、インパクト、骨が粉々。成功すれば鷺烙印、無傷。コード無しでインパ

クトを放った場合の成功例が鷺烙印なの」
「やっぱい。何か、わくわくしてきたっぞ」
自分の努力次第では無傷で使える技等、生まれて初めてだったわけで、興奮を抑えることが出来なかった。
「これからも基礎トレーニングはしてもらうけど、鷺烙印習得に向けて教えるからよろしく」
「おう」
「『はい』ね」
「はい！」
その日、那癒多は鷺烙印を習得、肉体強化も覚え充実した一日を送った。

……この時、那癒多は気付くべきだった。朱鷺羽未咲がこの程度で終わらせるわけがない……と。

第6話　5月（1）　那癒多と未咲（1）（後書き）

次話は今日中に更新予定です

第7話　5月（2）　那癒多と未咲の刺客

――命の危険は忘れた頃に殺って来る

――赤羽那癒多

あれから数日、那癒多は割と平和な生活を送っていた。修行も（多分）架橋に入り、肉体的にも精神的にも余裕が出てきのだ。

なにより、鷺烙印という技が那癒多にやる気を出させていた。

「さて、寝るか」

授業が始まってわずか二分。那癒多ＶＳ睡魔の戦いは睡魔の勝利で終わった。

「……那癒、あんまり寝過ぎたら今度は卒業出来ないよ」

縫が心配そうに声を掛けるが、那癒多の耳には届かなかった。

「……」

「こいつ……寝てるんだぜ……もう、起きないんだぜ……」

「慣れたつもりだけど、なゆなゆの寝入りの速さはいつ見ても凄いよ。いつからこうなの？」

「始めから、中学からずっとこう。昔は素直で可愛い子だったんだけどねぇ」

「なゆなゆが？」

素直な那癒多など、こころには想像不可だった。こころの知る那癒多とは、毒を吐き生意気な口を利き唯我独尊、傍若無人な少女。素直という言葉とはかけ離れた存在である。

「私も最近自信を無くしてる。あれは、あの那癒は本当に実在した

のか……」
二人が話していると、教師注意をする。
「迷走鬼、二ノ宮、喋ってるって事はこの問題わかるんだろうな？」
「ああ、はいわかります」
「そこまで言うなら書いて貰おう」
科目は英語。縫に解けない筈が無かった。
席を立ち、黒板の前へ立つ。すらすらと英文を書いてゆく。最後まで書き終え、チョークを置く。
「これであってますよね？」
「くっ……正解だ」
「戻って良いですか？」
「ああ、戻っていいぞ」
縫は教師の背を向け自分の席に戻る。その途中、舌を出す。クラスの面々が笑う。
英語の教師はプライドが高く、自意識過剰。自分が笑われたとすかさず勘違いした。そして、その怒りの矛先はこころへ向かった。
「二ノ宮、次はお前だ」
黒板に書かれていた事を全て消し、難解な英文を書き連ねる。はっきり言って高校レベルではない。大学教授でも解くことが困難な問題だった。難解大学問題集ｐ２８から抜粋。
「はーい」
こころは席を立つ。縫同様黒板の前に立つ。チョークを手に取る。
「どうした二ノ宮？　わからないのか？」
こころは手を止めたまま黙っている。
「わからないならわからないと言えばいい。授業中喋っててすいませんでしたと言えば良い」
こころは溜め息を吐く。英語教師の言葉など耳に入ってない様子だった。
「それに、何だ、赤いチョークを持って。ふざけてるのか？」
こころは赤いチョークを走らせる。解答では無く、添削を始めた。

「なっ……」
縫も驚く、英語は得意だと自負していたが、こころのしていた事はその域を超えていた。
「ここの単語が間違ってます。あと、ここもです。ここのｔｈａｔは省略すべきです混乱します。あと、ここも省略出来ます。そもそも高校レベルにするならこう書き直した方が良いです。あと、わかりやすく説明すると……」
「あっ」
縫がこの問題を解釈するのにさほど時間は掛からなかった。縫だけではない、他の生徒からも「ああー」「なるほど」と声が聞こえてくる。
「これ、大学問題の難問をうろ覚えで書きましたね」
「な、何を根拠に」
「だって、その問題集、わたしが作ったものですから」
教室が凍り付く。
「ちょっと頼まれて。まぁ、名前は伏せてますけど」
教師の顔が真っ青になる。生徒に看破された。見下され、馬鹿にされ、嘲笑された。
真っ青な顔が今度は真っ赤になって行く羞恥心を仰がれ、もうどうする事も出来なかった。
「あと、あなたの問題は大体何かの問題を模していますね。新聞とか、問題集とか」
「あっ」
縫は一年前のテストの問題を思い出す。あれも確か、ニュースを英文にしたものだった。
「後は……そうですね」
こころは教師の側に寄り、耳打ちする。他の生徒には聞こえない声で囁く。
教師は再び青ざめる。膝を落とし、授業をする気力を失っていた。
こころは、この学校に入学した時に学校の人間の弱みを全て調べ

ていた。英語教師の弱みさえ……。
『こころちゃん、授業してぇー！』
『二ノ宮頼む！　俺大学良いところ行きたいんだ！』
俺も私もと声が挙がる。誰も言わなかったが、英語教師の授業にみんな不満を持っていた。
先程の添削を見て、理解した生徒がこころの指導力を認めたわけである。
「先生、良いですか」
「……ああ、好きにやってくれ。じゃあ、自習だ。各自ちゃんとやるように」
英語教師が教室を後にする。
「じゃあ、授業を始めるね。わたしの授業は基本ノートあれば良いから。板書しなくても良い。わかった？」
『はーい』
こうして、こころは英語の授業を乗っ取った。
……ちなみに、都合の悪い事はすべて催眠魔術で揉み消した。

◆

（……殺気！？）
眠ってから何時間、何分経ったかわからない。ただ、感じた。殺気を。明らかに自分を殺しに来ているという意志を。
目覚める。
そして、気付く。自分が殺される寸前であること。
反射的に距離を取る。自分でも何をしたかわかっていなかった。
（ここは、教室だ。授業は続いている）
英語の授業は終わり、次の授業が始まっていた。

教師は無視している。生徒も気になってはいるが、こっちを見ようとしない。

縫とこころはだけが那癒多の方を見ている。耳が寝起きで悪く、縫が何を言っているか聞き取れなかった。

『ゆ……ろ』

（聞き取れないぞ、縫何言ってるんだ……？）

那癒多は縫の口を見る。読唇術とまではいかなくてもわかる。

『なゆ……後ろ』

「後ろ？」

瞬間那癒多の背筋は冷たくなる。

「うおぅ」

そいつはそこに立っていた。那癒多達と同じ制服を着ていて、手には日本刀、厳密に言うと妖刀。

そいつは那癒多の天敵であり、この学校においてどんな行動でも許される権限を持つ生徒。

「水樹希風！」

「……赤羽那癒多……覚悟して」

意味がわからなかった。何故自分が命を狙われるのか。

「そんな伏線あったか？　いや、なか……あっ」

思い出す、未咲の携帯での通話の相手。

「まさか……」

「……朱鷺羽未咲に……。学校で絶対権限を持つ私に常時命を狙えと……」

「へぇ、流石師匠。えげつない。報酬はなんだのかな？　凄く気になる」

「……秘密。機会があったら教えてあげようか？」

「是非教えて貰いたいね」
「……じゃあ、頑張って生き残ってね」
シュッシュ、と風を斬る音がする。
必死でかわす。希風の剣技もさることながら那癒多の体使いも相当なものだった。
二人とも常人離れしていた。
縫には早すぎて見えず、当の本人も勘でかわしてる部分もある。
こころだけが現状を理解していた。六対四で希風が優勢。身体能力は互角。
しかし、希風には武器がある。使い慣れた武器に剣技、幼い頃から叩き込まれた技は容易に見切れるものではない。
那癒多の体裁きは最近身につけたと言って良い。未咲との修行（一方的な虐殺パーティー）で生き残るために身につけた直感。その勘も長くは続くわけもない。
長引けば不利。誰よりも那癒多がわかっていた。それに、この場所は不利だ。教室という空間で剣による攻撃をかわし続けるのは困難だった。
「ちっ」
那癒多は舌打ちをして、隙をついて教室から廊下に出る。すかさず希風も追いかける。
「どぉおっせぇえい！」
那癒多は据え置かれた消化器を希風に投げ付ける。
「……無駄」
希風はそれを一刀両断する。
そして気付く「……しまった」
那癒多の狙いは消化器を切らせることだった。同時に賭けだった。
希風がかわすという選択肢を選べばこの状況は生まれなかった。
廊下は消化器の粉で白く霧掛かっていた。
一撃で良い。那癒多の攻撃は一撃必殺。一度間合いに入ってしまえばこっちのものなのだ。

「……集中」
希風も並の人間ではない。この様な状況で慌てたり焦った方が負けだと言う事は理解している。
だからこそ、焦らない。那癒多が攻撃してくることはわかっている。だからこそ待つ。那癒多の攻撃を。それをかわせば自分の勝ちなのだから。
「――そこっ！」
一閃。先に攻撃したのは希風の方だった。
感触はあった。しかし、希風は笑わない。その感触は明らかに人を斬る感触ではなかった。
「これ……は」
希風が斬ったのは切断された消化器だった。
希風に出来た隙を那癒多は見逃さない。那癒多は瞬時に構える。
「朱鷺羽流、奥義・鷺烙印！」
失敗でも良い。その一撃で充分希風を倒せる。
衝撃。辺りの粉塵が吹き飛ぶ。那癒多の一撃によって。視界がクリアになる。その一撃は……、
希風には届いていなかった。
「鞘……だとっ？」
この状況で希風は鞘で那癒多の攻撃を防ぎきったのだ。
「……負け」
希風は亡霊の様に呟く。そう、この攻撃を防がれたということは那癒多の敗北を意味する。
「……私の……負け……」
希風は妖刀を落とし、右手で左腕を押さえる。
「……恐ろしい技。防御しても貫通してダメージが来るなんて」
通し技。防御不可能。かわされなければ必ずダメージを与えられる技。それ故この技は朱鷺羽家において主力の奥義として伝えられ

ている。
膝を落とし、その場に倒れる。
「おい、大丈夫か？」
「……大丈夫」
「見せろ馬鹿」
俯せの姿勢から仰向けにして、押さえていた手を引きはがし、希風の腕を確認する。
「ばーか。大丈夫なわけ無いだろう。病院行くぞ病院」
希風の骨は折れていた。衝撃は鞘を通して全て腕に集約されていたのだ。
那癒多はスカートのポケットから携帯を取り出す。
「アイ、私だ。救急車頼む。大至急」
携帯を仕舞うと、那癒多は希風の方を向く。
「今救急車が来る。てか、痛いなら痛いって言えよ」
「……敗者は語らず。勝者に気を遣う。家の掟」
「はぁ」
溜め息を付くしかなかった。
「で、何でこんな事を？　朱鷺羽未咲に何を言われた？」
「……未咲さんに私から頼んだの」
「はっ？」
予想外の言葉に那癒多は口を開けたままアホ面をしてしまう。
「……そんなポカーンってしないでよ。理由は簡単。腕試し」
「腕試し？」
「……夜の狩猟者として、仲間となる人物の腕を知りたかった……」
「はぁ？」
夜の狩猟者というワードが希風の口から出るとは思わなかった。
馬鹿の那癒多の脳の処理速度では少し厳しかった。
「すまん、私馬鹿だからもう少し簡潔に言われないとわからない」
「……私は夜の狩猟者。配置替えであなたの地区の担当になった。あなたの腕を知りたかった……以上」

「まじか」
「……まじ」
「えっと、悪い。そもそも最近夜の狩猟者の情報が入ってきてないんだ。近状を報告してくれ」
希風は那癒多の先程の言葉を守り出来るだけ簡潔に説明するよう努めた。
「……あなたの地区の夜の狩猟者は全員お役所仕事になった」
「何故？」
「……ブラックアウト症候群の後、規則が変わって、基準に達する戦闘能力を持たない者は夜の狩猟者として仕事をすることが禁じられた」
「弱いから駄目って事か？」
「……そう」
（確かにその方が安全で確実だろうな……）
夜の狩猟者の規定が緩いのは昔から問題になっていた。だからと言って、こんなに簡単に規則が変わるものなのだろうか？　と若干だが、違和感を覚える。
「えっと、そうだ。玲は？　小折玲は？　私の代わりにこの地区を任されてる筈なんだが」
「……現役」
「じゃあ、問題無いじゃないか？　あいつは無茶苦茶優秀だし、別にお前がいなくても……」
那癒多の言う通りだ。
玲の能力は高い。悪行だったとはいえ、たった一人で沢山の陽ノ宮の人間の意識を刈り取ったのだから。
正直、那癒多は希風と一緒に仕事はしたくない。あまり良い印象が無い上、コミュニケーションが取りにくい。連携の取れない仲間ほど役に立たないものはない。その点玲は遠距離からの精密な援護射撃が望める。那癒多もそのつもりだった。
だからこそ首を傾げる。疑問に思う。玲はどうなっているのかと。

「……問題無い。優秀。とても優秀。私の憧れでもある。ただ……優秀”過ぎた”」
「優秀過ぎた？」
玲は出世した。異例の早さで。

下級狩猟者→中級狩猟者→上級狩猟者
↓（中略）↓地区監督責任者

と出世していった。
「出世しすぎてこの地区だけを担当出来なくなった」
「今どんな役職だ？」
「……来週、地区長昇格する」
「地区長！」
陽ノ宮市は全二十四区にわけられている。地区長とはその全ての地区のトップになるということだった。
規則も玲の意見を取り入れた結果変わった。
「それって、夜の狩猟者で二番目に偉いって事だよな」
「……ええ。一番は宮長で二番が地区長」
「有り得ない早さだな」
「だから、私はあの人を尊敬し敬愛している……本当に好き……愛してると言っても過言じゃない……」
いきなりの希風の頬が赤く染まる。
これ以上玲の話を続けると危ないと那癒多の第六感が働く。
（ああ、こいつはあっちの趣味をお持ちか）
何だか先行き不安だった。「こんな奴が仲間になるのか」と。
その那癒多を救う様に救急車が到着。医者、須久井衛の助手のアイ・アンノウィンが希風に歩み寄る。
「大丈夫か？」
「……ええ」
「一応検査だ。那癒多は大丈夫か」

「ああ、平気だ」
「そうか。おい、こいつを運んでやれ丁重にな」
担架を用意するほどでは無かったが、医者達の厚意を無下には出来ず、希風は運ばれ遠くへ消えて行く。
「やれやれ」
那癒多は溜め息を吐きどっと疲れた表情になる。いつも通りのだるそうな顔と表現する方が正しいだろう。
「おい、那癒多」
那癒多は「何だ?」と返す。それに、アイは激怒する。
「お前嘘付いたな。左腕ヒビ入ってるだろう」
「……ばれたか」
まだ、未完成の技をあんな状況で放ったのだ。無事である筈がなかった。
「確かに、お前は常人を超えた丈夫さを持っている。高速治癒もある。だからって、自分の体をないがしろにするな」
「ああ、ごめん」
「わかれば良い。さっさと高速治癒しろよ。じゃあな」
アイはそれだけ言うと外へ出て行った。
「……はぁ、ヒビか」
那癒多は”左”で鷺烙印を放った。人間を超えていると言われた右腕を人に放つのを怖れた。
それに、那癒多は自分の腕に自信があった。インパクトとは違い、自分で威力を調整できるなら、怪我することは無いのではないかと。
「人って脆いな、ちょっと過信してたな」
那癒多はヒビの入った腕に高速治癒をかけながら、そう呟いた。

第7話　5月（2）　那癒多と未咲の刺客（後書き）

宣言通り投稿。最近感想が無くて少し寂しかったりです（汗）
感想を頂けるような作品になるよう頑張りたいと思うので宜しくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7768v/

魔導師の街へようこそ

2011年10月3日03時25分発行